

京都大学構内遺跡調査研究年報

1995年度

京都大学埋蔵文化財研究センター

巻 首 図 版



京都大学総合人間学部構内A O 22区 弥生時代前期の水田跡

序

本報告書は、1995年度に埋蔵文化財研究センターがおこなった、大学敷地内の発掘調査の成果をまとめたものである。京都大学構内の遺跡は、北部構内の縄文時代の遺跡群、大阪府高槻市の農学部附属農場内の弥生時代の安満遺跡などによって古くから著名であるとともに、京都盆地の一角を占めるにすぎない吉田キャンパスにも、先史時代から近世に至る長い歴史を刻んだ遺跡が累積していることが明らかになっている。本センターが発足してすでに20年を越え、学内に分布する遺跡の概要についてはほぼ把握できるようになってきているが、新たな発掘による予期しない発見も少なくない。第2章で報告する弥生時代の水田跡などは、そのような例の一つである。

埋蔵文化財研究センターがおこなう調査は、学内の施設の建設予定地内の遺跡に限定されたものであるが、できるだけ精緻な分析にもとづいた報告を目指して努力を重ねている。この報告書も、吉田キャンパスを含めた北白川一帯に残る、先史時代から近世にわたる遺跡の従来の調査成果に、新たな資料を加えながら歴史的環境の復元を試みている。第Ⅰ部は、個々の発掘調査の結果とその考察をまとめたものであり、また第Ⅱ部は、過去の調査の資料を再検討するとともに、新たな資料による知見を加えたものである。ご高覧いただき御批判をお願いしたい。

おわりに、これらの調査を進めるにあたっては、学内学外の多くの関係者および関係機関から御指導、御助言をいただき、とりわけ、人間・環境学研究科、文学部、施設部の関係者各位には、多くのご協力を賜った。ここに厚くお礼申し上げる次第である。

1999年3月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

山 中 一 郎

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で1995年4月1日から1996年3月31日までに発掘、整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学埋蔵文化財研究センターにおける研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第Ⅵ座標系 ($x = -108,000$ $y = -20,000$) が ($X = 2,000$ $Y = 2,000$) となる京都大学構内座標によって表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式にしたがって、井戸：SE，土坑：SKのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通して表示を統一した。
Ⅰ：京都大学総合人間学部構内 AO22 区の発掘調査
Ⅱ：京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査
(例 Ⅰ 1：京都大学総合人間学部構内 AO22 区出土遺物 1 番)
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4，遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のものは、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 第Ⅰ部の参考文献は、本文中に、〔著者名 発表年〕の形式で表わし、第Ⅰ部の末に一括した。第Ⅱ部については、章末の注に一括して記載した。
- 8 古代・中世土師器の型式分類は、とくにことわりがない場合、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）に従った。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また、遺物の撮影はそれぞれ報告者が担当した。
- 10 編集は、富井眞が担当し、清水芳裕，千葉豊，伊藤淳史，古賀秀策，磯谷敦子，中田敬子，柴垣理恵子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度

目 次

第 I 部 1995年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章	1995年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1	調査の経過	1
2	調査の成果	1
第 2 章	京都大学総合人間学部校内 AO22 区の発掘調査	3
1	調査の概要	3
2	層 位	5
3	遺 構	8
4	遺 物	18
5	小 結	38
第 3 章	京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査	41
1	調査の概要	41
2	層 位	41
3	先史時代の遺跡	44
4	古墳時代～中世の遺跡	47
5	近世・近代の遺跡	77
6	小 結	79
参 考 文 献		83
京都大学構内遺跡調査要項		86
報 告 書 抄 録		94

第Ⅱ部 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要XⅢ

北白川追分町弥生時代遺跡の展開

——京都大学北部構内 BA30区（追分地蔵地点）の出土資料——

1 はじめに	95
2 1972年北部構内 BA30区（追分地蔵地点）の発掘調査	96
3 弥生時代前期の北白川追分町遺跡	113
4 おわりに	116
図 版	巻末

図 版 目 次

巻首図版 京都大学総合人間学部構内 AO22 区 弥生時代前期の水田跡

図版 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点

図版 2 京都大学総合人間学部構内 AO22 区

調査区全景（北東から）

1 近世遺構

2 古代・中世遺構

3 弥生前期遺構

図版 3 京都大学総合人間学部構内 AO22 区

1 水田域全景(1)（北東から）

2 水田域全景(2)（北から）

3 水田域細部（北から）

4 中央微高地上の農耕具痕（東から）

5 完掘後全景（北東から）

図版 4 京都大学総合人間学部構内 AO22 区

1 鑄造遺構 SX 1～SX 4（西から）

2 SX 1 上層遺構（西から）

3 SX 1 完掘（南から）

4 SX 2 完掘（南から）

5 SX 3 完掘（南から）

6 SX 4 完掘（南から）

図版 5 京都大学総合人間学部構内 AO22 区

1 調査区西半古代・中世遺構完掘全景（西から）

2 井戸 SE30（南から）

3 井戸 SE29（南から）

4 井戸 SE19（南から）

5 井戸 SE20（北から）

6 井戸 SE31（北から）

図版 6 京都大学総合人間学部構内 AO22 区

1 土器溜 SK 1（北から）

2 土器溜 SK17-2 下層（西から）

3 土器溜・集石 SK78（北から）

4 埋納遺構 SK15（東から）

5 配石 SK13（北から）

6 配石 SK80（北から）

図版 7 京都大学総合人間学部構内 AO22 区

黄褐色土出土遺物，黒灰色土出土遺物

図版 8 京都大学総合人間学部構内 AO22 区

SD18 出土遺物，黒褐色土出土遺物，SE29 出土遺物，

SX 3 出土遺物，SX 1 出土遺物

- 図版 9 京都大学総合人間学部構内 AO22 区
SK 1 出土遺物, SK17-2 出土遺物, SK15 出土遺物
- 図版10 京都大学総合人間学部構内 AO22 区
SK78 出土遺物, SE24 出土遺物
- 図版11 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
1 西調査区全景（西から） 2 東調査区全景（北から）
- 図版12 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
1 中世の溝群（東から） 2 倒木跡（北から）
3 SD 2 遺物出土状況（北から） 4 SD 4 遺物出土状況（西から）
5 SX 5 遺物出土状況（南から） 6 SX 7 遺物出土状況（東から）
- 図版13 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
1 暗褐色土出土縄文土器 2 上層遺構出土の縄文土器と石器
- 図版14 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
古墳時代・古代の遺物
- 図版15 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
SD 3 出土遺物, SD 4 出土遺物
- 図版16 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
SD 7 出土遺物
- 図版17 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
SD 5 出土遺物
- 図版18 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
SD 6 出土遺物 (1)
- 図版19 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
SD 6 出土遺物 (2)
- 図版20 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
SX 2 出土遺物, SX 5 出土遺物, SX 6 出土遺物, SX 7 出土遺物
- 図版21 京都大学本部構内 AX25・AX26 区
軒平瓦

図版22 京都大学本部構内 AX25・AX26 区

1 軒丸瓦

2 京都大学構内出土の緑釉円塔

図版23 北部構内 BA30 区の発掘調査 (1972年)

1 調査区全景 (西から)

2 調査風景 (北から)

3 東西畔南壁の層位 (南から)

図版24 北部構内 BA30 区出土遺物

弥生時代前期の土器 (1)

図版25 北部構内 BA30 区出土遺物

弥生時代前期の土器 (2)

図版26 北部構内 BA30 区出土遺物

弥生時代前期の土器 (3)

図版27 北部構内 BA30 区出土遺物

1 縄文時代後期・晩期の土器

2 石器, 削出突帯の細部

挿 図 目 次

総合人間学部構内 AO22 区の発掘調査

図 1 関連調査地点と字境界 4

図 2 東西方向の層位 7

図 3 主要遺構の配置 (1).....10

図 4 主要遺構の配置 (2).....11

図 5 地区別遺物出土頻度14

図 6 各水田区画の平均標高15

図 7 平安時代鋳造関連遺構の配置
.....17

図 8 黄褐色土出土遺物19

図 9 水田域黒灰色土出土遺物20

図10 中央微高地黒灰色土
出土遺物 (1).....21

図11 中央微高地黒灰色土

出土遺物 (2).....22

図12 流路出土遺物23

図13 弥生時代中期の遺物24

図14 SE30・黒褐色土出土遺物.....25

図15 SE29出土遺物 (1).....26

図16 SE29出土遺物 (2).....27

図17 SX 3・SX 4・SX 1
出土遺物28

図18 SK 1 出土遺物29

図19 SK17- 2 出土遺物 (1).....30

図20 SK17- 2 出土遺物 (2).....31

図21 SK15出土遺物32

図22	SK78出土遺物(1)……………	34
図23	SK78出土遺物(2)……………	35
図24	SE24出土遺物(1)……………	36
図25	SE24出土遺物(2)……………	37

本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査

図26	古墳時代～中世の遺構……………	42
図27	西調査区の層位……………	43
図28	暗褐色土・上層遺構 出土土器……………	45
図29	石 鍬……………	47
図30	SD 5・SD 6 断面図……………	48
図31	土器溜 SX 2……………	49
図32	SK17・SK18・ 上層遺構出土遺物……………	50
図33	SD 3・SK 4 出土遺物……………	51
図34	SD 7 出土遺物(1)……………	52
図35	SD 7 出土遺物(2)……………	53
図36	SD 4 出土遺物……………	55
図37	SD 5 出土遺物(1)……………	56
図38	SD 5 出土遺物(2)……………	57
図39	SD 6 出土遺物(1)……………	59
図40	SD 6 出土遺物(2)……………	60
図41	SD10・SD11・SD 9・ SD 2・SX 1・SX 2 出土遺物……………	62
図42	SX 4・SX 5 出土遺物……………	63
図43	SX 6～SX 8 出土遺物……………	65
図44	軒 平 瓦……………	71
図45	軒 丸 瓦……………	73

図46	平 瓦……………	74
図47	丸 瓦……………	75
図48	近世・近代の遺構……………	77
図49	SE 1～SE 4・ 灰褐色土出土遺物……………	78

図50 京都大学構内出土の

緑釉円塔……………	81
-----------	----

北白川追分町弥生時代遺跡の展開

図51	調査区の位置と関連地点……………	97
図52	上部包含層掘りさげ後の 地形……………	99
図53	東西方向の層位……………	99
図54	BA30 区出土縄文時代 後期・晩期土器……………	101
図55	BA30 区出土弥生時代 前期土器(1)……………	103
図56	BA30 区出土弥生時代 前期土器(2)……………	104
図57	BA30 区出土弥生時代 前期土器(3)……………	105
図58	BA30 区出土弥生時代 前期土器(4)……………	106
図59	BA30 区出土弥生時代 前期土器(5)……………	107
図60	BA30 区出土石器……………	108
図61	BE32 区・BE33 区・BD33 区 出土土器……………	111
図62	弥生時代前期の主要遺跡……………	115

表 目 次

表 1	出土土器の計測結果(1).....	66	表 4	京都大学構内遺跡のおもな調査		87
表 2	出土土器の計測結果(2).....	68	表 5	BA30区出土土器.....	109	
表 3	平瓦・丸瓦の分類別 出土点数	76	表 6	京都大学構内遺跡出土 弥生土器の編年.....	112	

第 I 部 1995年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 1995年度京都大学構内遺跡調査の概要

第 2 章 京都大学総合人間学部構内 AO22 区の発掘調査

第 3 章 京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査

第1章 1995年度京都大学構内遺跡調査の概要

山中一郎 清水芳裕 富井 眞

1 調査の経過

京都大学構内のほぼ全域には、縄文から近世にいたる各時代の遺跡が埋積している。このため、京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパス及び附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事に際して、予定地の埋蔵文化財の調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、発掘、試掘、立合にわけて実施している。1995年度には、以下の発掘調査4件、立合調査6件、資料整理2件を実施した。

発掘調査	総合人間学部校舎新営予定地（総合人間学部構内 AR25 区）	（発掘中，図版 1-238）
	病院地区外来診察施設棟新営予定地（病院構内 AG20 区）	（発掘中，図版 1-239）
	病院地区 MRI-CT 装置棟新営予定地（病院構内 AF20 区）	（発掘中，図版 1-240）
	文学部校舎新営予定地（本部構内 AX26 区）	（第3章，図版 1-241）
立合調査	北部構内給排水管敷設工事（北部構内 BD34 区）	（図版 1-242）
	工学部物理系校舎新営電気設備工事（本部構内 AW29 区）	（図版 1-243）
	ベンチャービジネス・ラボラトリー棟新営予定地（本部構内 AW29 区）	（図版 1-244）
	吉田地区基幹整備その他工事（北部構内 BC32 区）	（図版 1-245）
	ヘリウム回収管敷設工事（本部構内 AY26 区）	（図版 1-246）
	旧耳鼻咽喉科病棟取り壊し工事（病院構内 AF16 区）	（図版 1-247）
資料整理	人間・環境学研究科校舎新営予定地（総合人間学部構内 AO22 区）	（第2章，図版 1-220）
	文学部校舎新営予定地（本部構内 AX25 区）	（第3章，図版 1-230）

2 調査の成果

前節で掲げた調査のうち、1995年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、総合人間学部構内 AO22 区、本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査については、第2章、第3章でそれぞれ詳述している。

縄文時代の遺跡 総合人間学部構内 AO22 区の東辺で、注口土器を含む後期中葉の資料が残りの良い状態で得られた。この東方30mの地点では以前にも同様の時期の資料がまとまって採集されており、その関連が注意される。

弥生時代の遺跡 AO22 区で、前期末～中期初頭の洪水砂に覆われた水田遺構が検出された。同時に水田周辺の微地形も明らかにされ、すでに弥生時代前期の段階には自然地形を利用した完成度の高い水田造成技術が獲得されていたことがわかった。さらに、この

水田遺構の北半と南半とでは、区画のあり方、畦畔の規模、水田面の状態、といった点で著しい差異があることが確認された。初期水稻耕作の形態の多様性を示す貴重な資料を提供している。

古墳時代の遺跡 これまで中期の方形墳5基が確認されている総合人間学部構内で、新たに1基の方形墳がAO22区で検出された。同区では構内遺跡では初出となる形象埴輪も出土し、この古墳群は埴輪を有する墳墓を含んでいたことが事実となった。実態が不明瞭だった京都盆地東半部の古墳時代の様相を探るうえで、重要な成果である。

本部構内AX25・AX26区では、京都大学構内では資料がきわめて希薄な後期の遺構と遺物が発見された。完形の須恵器の蓋杯を伴う長方形の土坑2基がそれであり、当該期の埋葬行為の一端を示すものなのかもしれない。上述した京都盆地東半部の中期古墳群のその後の展開を考える手がかりとなろう。

古代・中世の遺跡 総合人間学部構内AO22区で、奈良時代の掘立柱建物・土器溜や、多数の方形土坑が検出されたほか、構内遺跡では初めて当該期の井戸が発見された。北接するAP22区では総柱の掘立柱建物の存在が知られており、古墳時代には墓域として機能していた空間が奈良時代に生活の場へと転化したことがうかがえる。

平安時代については、総合人間学部構内でこれまでも中期の梵鐘鑄造施設の存在が確認されていたが、AO22区でも鑄造土坑が4基検出され、この種の土坑は合計6基を数えるにいった。今回の調査でも同時期の寺院の痕跡は確認できなかったことから、定着的生産によって広範な需要に応じた工房があった、という従来の解釈の妥当性がいっそう高いものとなった。

鎌倉・室町時代の活動が構内の各所で活発だったことはこれまでの調査成果からも知られていたが、本部構内AX25・AX26区では、東西方向にはしる断面V字形のものを含む大溝群が検出された。旧平安京の洛中・洛外で中世に盛んに掘削された防御用の堀の、比較的早い時期のものとみなされよう。また、総合人間学部構内AO22区では遺構の分布状態によって、西から居住域、祭祀・葬送に関わる空間、非利用空間、白色砂採取などの生産活動域、というかたちの多様な土地利用の状況をうかがい知ることのできる情報を得た。

近世の遺跡 近世の遺構については、吉田キャンパス一帯で農耕関連の柵列や小さい溝が確認されている。今回の総合人間学部構内や本部構内での調査で多数確認された遺構群も、同様の性格と推測できる柵列などである。このあたりは、応仁の乱の以後数百年にわたってのどかな田園風景が広がっていたものと思われる。

第2章 京都大学総合人間学部構内 AO22 区の発掘調査

伊藤淳史

1 調査の概要

(1) 経緯と経過

本調査区は、総合人間学部構内の中央やや西寄りに位置する（図版1-220、図1）。ここに、大学院人間・環境学研究科の校舎の新営が計画されたため、発掘調査を実施した。面積は4080㎡、期間は1993年11月11日～94年9月22日。調査区周辺は、既往の調査によって、縄文時代から江戸時代の各時期にわたる密度の濃い遺跡のひろがり知られており、考古学的に重要度の高い空間と認識されてきた。とりわけ、今回の調査区の北側に位置する111地点（AP22区）では、弥生時代前期の流路、5世紀末～6世紀初頭の方形墳、奈良時代の掘立柱建物跡、平安時代中期の梵鐘鑄造遺構、鎌倉～室町時代の宅地や墓地に関連する遺構群など、豊富な成果が得られており、梵鐘鑄造遺構については埋め戻しにより保存処置が講じられている〔五十川・飛野84〕。このほか、東側の7地点では、縄文時代後期北白川上層式3期の基準資料と評価される土器群が採集されており〔藤岡73、泉80〕、西側の91地点でも、小面積ながら中世の良好な一括資料が得られている〔泉83〕。

今回の調査は、以上の成果から想定されてきた遺跡の重要性をあらためて裏付ける結果となり、各時期の多様な遺構と、整理箱440箱におよぶ遺物が出土した。遺跡は、厚い黄色砂層を間に挟んで、上層遺構群（弥生時代中期以降）と下層遺構群（同前期以前）に大別され、特筆すべき遺構としては、上層遺構群では平安時代中期の梵鐘鑄造遺構4基が、下層遺構群では弥生時代前期の水田遺構がある。前者については、AP22区出土の梵鐘鑄造遺構に南接する位置にあり、今回も埋め戻しにより現地での保存処置を講じている。

調査成果は、発掘期間中の1994年5月31日と8月3日に現地説明会を実施して一般に公開したほか、梵鐘鑄造遺構と水田遺構については概略を紹介している〔五十川94、伊藤95〕。出土資料の整理は、遺跡の重要性や遺物内容の豊富さに鑑みて、調査報告書の作成を企図しておこなってきた。現在基礎的な整理作業は終えた段階にあるが、検討にいましばらくの時間が必要であり、また紙幅の都合もあるため、ここではあくまで中間報告として全体の概略と主要な遺構遺物の紹介に絞っておこなう。調査成果の詳細ならびにその最終的な学術的評価については、刊行予定の発掘調査報告書に拠りたい。

(2) 先行立合調査の成果 (図1)

今回の発掘調査に先立つ1993年10月、実験排水路等移設の掘削工事にともない、調査区周囲の立合調査をおこなった。発掘調査と一体の事業として実施されたために報告の機会が無かったが、重要な知見が得られているため、ここに報告しておくことにしたい。

工事は、調査区の西および南側を幅約2～3m、深さ約2～2.5mで掘削するもので、おおむね全域で中世と近世の包含層が良好に確認され、深い部分では黄色砂層やその下の先史時代遺物包含層も確認できた。遺構として、発掘区内における中世の南北溝SD5や近世路面、弥生時代前期の流路SR1の延長のほかに、図1-▲地点より東側で検出された東西方向の溝が注目される。東へ僅かに振る方位で、幅2m前後、深さ1mあまりの規模。遺物は検出できなかったが、茶褐色土を埋土としており、中世の溝とみてよい。

東方の48b地点では、同様な規模や埋土をもつ東西溝SD1から12世紀～13世紀代の遺物が出土し、福勝院の北限との関係が指摘されている〔宇野・岡田79〕。このSD1は、位置や特徴からみて今回確認した東西溝につながる可能性が高い。旧字境界では、字走り矢倉と字一町が辻の境（現在は吉田二本松町と吉田近衛町の境）に相当し、この東西溝も、重要な土地境界を示す性格を帯びていたことが想定される。西への延長は立合調査では確認できていないが、同じく調査区西部を南北方向にはしる字窪と字走り矢倉の境が、中世以降の重要な土地境界となっていたと発掘によって確かめられており、それと交差する地点で終息している可能性が高い。

工事により東西溝の大半は滅失したとみられるが、一帯は現在に至るまで土地区画上の重要な空間でありつづけており、今後周辺での調査に十分な注意と配慮が望まれよう。

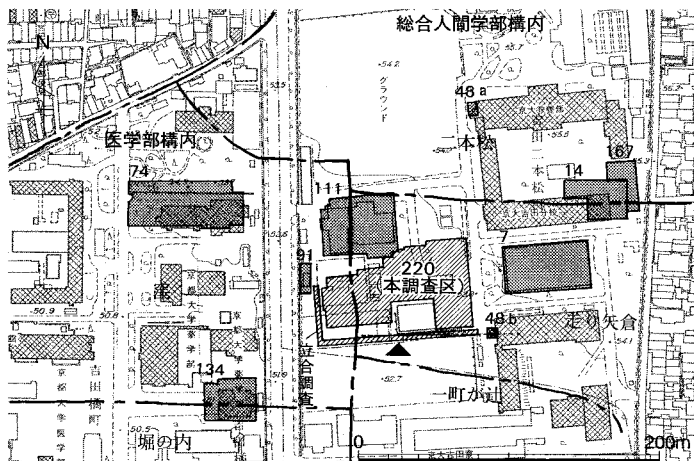


図1 関連調査地点と字境界 縮尺1/5000

2 層 位

東西が100mにおよぶ調査区を横断する形で、X=1340に沿って東西方向の土層観察用の畦を設定した。その南壁の層位を呈示する（図2）。

第1層は表土。平均して1mあまりの厚さがある。総合人間学部構内は、明治30（1897）年に、現在の本部構内から旧制第三高等学校が移転し整備された。この層はそれ以後の整地や攪乱にともなう層であり、機械力で除去した。

第2層の灰褐色土は、近世の遺物包含層。層厚は10～20cm程度で、18世紀後半～19世紀代の陶磁器類を含む。大半を表土とともに機械力で除去した。

第3層の茶褐色土は、古代・中世の遺物包含層。色調は暗いものから淡いものまであり、おおむね砂質である。13～14世紀の遺物を中心に、10～15世紀の幅のある遺物を含む。

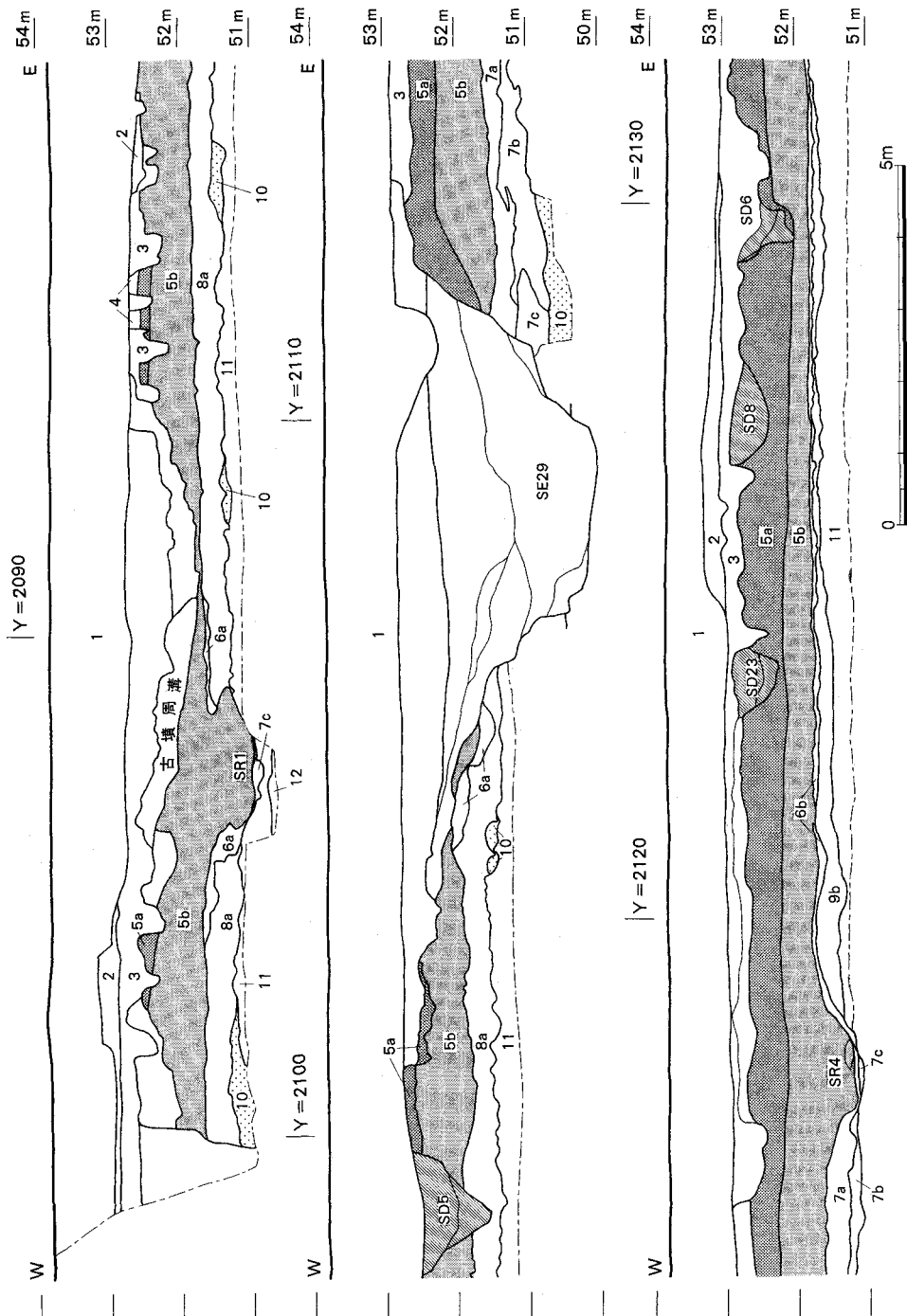
第4層の黒褐色土は、弥生時代中期～古代の遺物包含層。調査区西半を中心に、ほとんどが遺構の埋土として存在し、面的な広がりには乏しい。堅く締まった粘質土で、遺物包含量は少ないが、8世紀代を中心とし、一部に弥生時代中期～古墳時代のものもみられる。

第5層の黄色砂は、弥生時代前期末～中期初頭の間の一時期に比定される土石流堆積層で、吉田キャンパス一帯で鍵層となっている〔清水91〕。厚さ1～1.5mを測り、無遺物であるため機械力で除去した。粒子の粗い上位を5a層（黄色粗砂）、細かな下位を5b層（黄色細砂）に細別するが、時間差を示すものではない。5a層は、調査区東半では古代～中世に砂の採取の対象となり、あまり残らない。5b層は、下方ほど細かなシルト質となり、その下の第6～8層上面（弥生時代前期地表面）を保護するように覆う。

第6層は、灰色の砂質～シルト質土で、調査区西半から中央付近にかけての流路沿いや微高地の裾部などに薄く膜状に堆積しているが、流路沿いでは土堤状に厚くなる部分もある。縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物を微量含む。6a層（灰茶褐色砂質土）と6b層（黄灰色シルト質土）に細別するが、ともに雨水などによる自然の堆積として同性格の層と想定され、流路沿いは氾濫により自然堤防に類する厚い堆積となったものとみられる。

第7層は、調査区西半の流路SR1～SR4内の下半を埋積させている層で、7a層（青灰色シルト）、7b層（白色砂）、7c層（礫混り白色砂）がある。弥生時代前期の土器を含み、この時期に流路の埋積が進んだことを示している。

第8層は、黄色砂より下層で主体となる縄文時代後期～弥生時代前期の遺物包含層で、おおむね調査区全域で安定してみられるが、色調や土質の違いから、調査区西半域にひろがる8a層（暗茶褐色砂質土）と、中央微高地（Y=2140付近）以東にひろがる8b層（黒灰



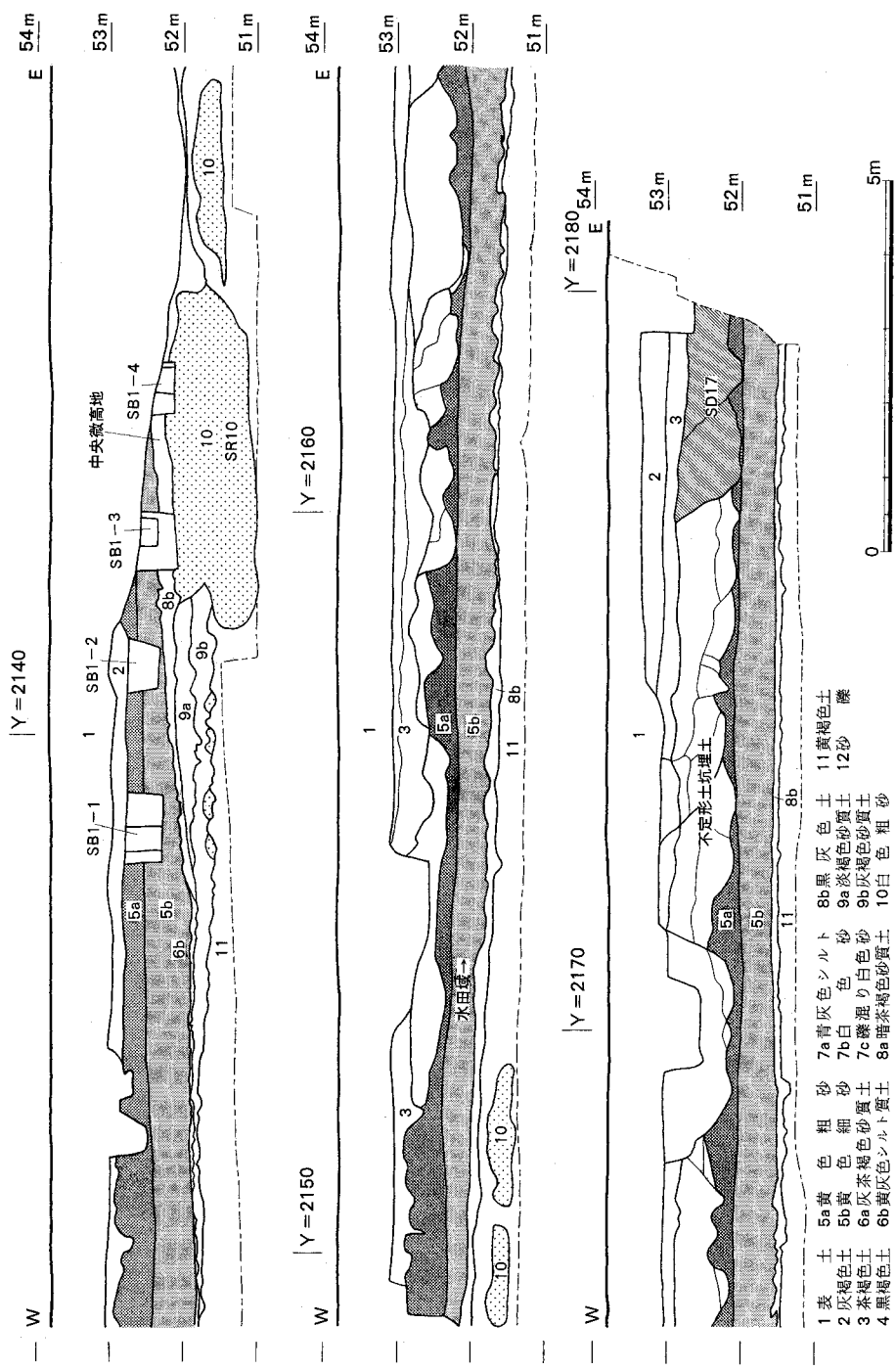


図2 東西方向の属位 縮尺1/100

色土)に細別される。8a層は、場所や上下により色調が黒褐色から淡茶褐色へと漸移的に変化し、厚みはあるものの遺物包含量は少なく、縄文時代後期前葉の遺物が目立ち、晩期および弥生時代前期は少ない。8b層は、中央微高地一帯では黒色系の砂質土壌で、晩期末の突帯文土器を中心に多量の遺物を含む。東へ向かうと灰色系の粘質土へと移行し、上面が弥生時代前期の水田耕作の対象面となっている。

第9層は、中央微高地の下層にみられる淡い色調の無遺物層で、9a層（淡褐色砂質土）から9b層（灰黄色砂質土）へと漸移的に変化して堆積する。縄文時代後期～晩期にかけて堆積した、上層の黒灰色土と下層の黄褐色土との間の漸移層的な性格の堆積とみてよい。

第10層は、白色の粗砂層で、中央微高地の形成要因となっているSR10の埋積層であるほか、第11層の上面や内部の随所にブロック状に存在する。層内には磨滅した土器の細片が散見される。縄文時代後期ごろの白川系の流路にともなう洪水堆積層とみなされる。

第11層は、おおむね調査区全域で安定して認められ、遺跡の基盤を形成している黄褐色土層である。1 mあまりの厚さがあり、その下は第12層の砂礫層であることを確認している。おもに西半はシルト質～砂質の土壌、東半は透水性の乏しい粘質土層となる。この違いが調査区一帯の土地条件を規定し、のちに詳述する弥生時代前期水田の範囲はおおむねこの粘質土層の広がりに対応している。調査区東辺では、層内から縄文時代後期中葉の残りのよい土器を得ており、この層の堆積時期を示すものとみられる。

3 遺 構

(1) 時期別遺構の概略（図版2，図3・4）

ここでは、それぞれ時期別に概略を示し、重要度の高い弥生時代前期の水田遺構と平安時代中期の鋳造関連遺構については、あらためて説明をおこなう。

弥生時代前期の遺構 黄色砂よりも下層で確認された遺構である。人為的なものとしては水田遺構と農耕具痕のみであるが、そのほか流路や微高地といった自然地形に関する情報も多く得られている。これらは、いずれも黄色砂層直下の8a・8b層上面で検出できるもので、土石流による埋没時点すなわち弥生時代前期末ごろの地表面の様子を、ほぼそのままととめているとみられる。

調査区西半の流路は、北側のAP22区で見つかったものの延長で、分岐や合流を繰り返しながら北北東から南南西へと流れる。幅・深さとも50cm程度の小さなものから、最も規模の大きなSR4のように、断面U字形で幅3 m以上、深さ2 m程度のものまである。

第8層を切って流れ、下層は弥生時代前期の土器を含む砂礫層や青灰色シルト（第7層）が埋積し、上層は黄色砂が埋めていることから、これらの流路は弥生時代前期に機能しており、ある程度埋積が進んでいたところで、前期末の土石流で周辺一帯と同時に一気に埋没したものとわかる。特徴から、基本的にはこの時期に扇状地内を流れていた自然流路と判断するが、水稻耕作をはじめとする周辺での諸活動とも密接にかかわっていただろう。

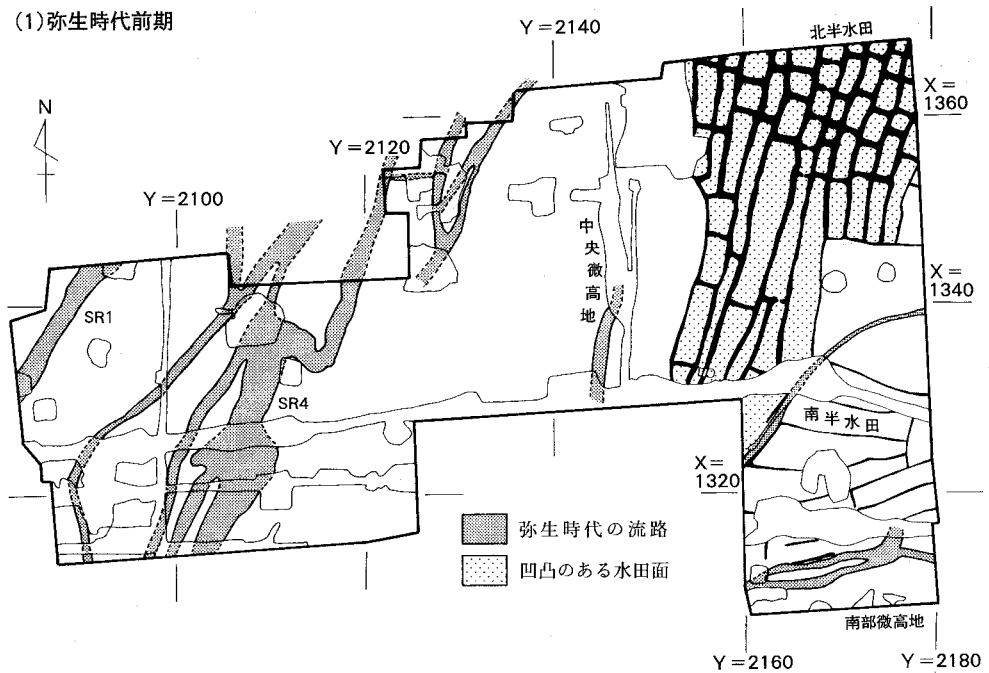
微高地は、Y=2140付近を南北にはしる「中央微高地」と、水田域の南端を画する「南部微高地」がある。中央微高地は、西部の流路域と東部の水田域を隔てる位置にあり、周囲との比高差は約1mを測る。遺物の出土はこの一帯に集中し（図5）、また西側斜面では農耕具痕がまともについて見つかることから（図版3-4）、通行や作業などの活動にとって重要な空間であったことがわかる。南部微高地は、水田との比高差約70cmで、南から北へ急激に下る。基盤の黄褐色土の高まりがそのまま微高地になっているもので、この部分は黄色砂や縄文・弥生時代遺物包含層も堆積しない。南側に東から西へと張り出す尾根状の地形が存在し、その北縁が調査区内に及んでいるものと考えられる。

弥生時代中期の遺構 この時期の遺構はSD19のみで、検出面での幅80cm、深さ30～40cm程度の断面U字形を呈し、黒褐色土を埋土とする。周囲の攪乱が著しく、直角に曲がるコーナー部分を含む延長6mあまりしか検出されていないが、溝底から僅かに浮いた状態で第Ⅲ様式後半の甕（I32）が逆位で、また高杯（I31）も杯部と脚部がやや離れながらも、それぞれ一括出土した。平面形や遺物の出土状態から方形周溝墓の一部分かともみられるが、周辺に同種の遺構がまったくみられないことが異例であり、結論は保留したい。

古墳時代の遺構 調査区西辺に一辺約10mの方形墳がある。北側のAP22区で同種の方形墳（1号墳～5号墳）が見つかり、今回のものを6号墳とした。後世の削平と攪乱が著しく、盛土や主体部は残っていなかったが、寸断されてわずかに残る周溝内やその周辺から、TK23～TK47型式に比定できる須恵器が出土している。この6号墳は、やや東に振れる周溝の方位から、既出の1・2号墳と群を成すとみられる。ほかに調査区内では、中央北辺のX=1360、Y=2140付近で当該期の遺物がややまともに出土している。そこでは京都大学構内遺跡では初見となる形象埴輪片数点が含まれており、近接して埴輪をともしう古墳が存在していることを示唆する結果として注目される。

奈良時代の遺構 掘立柱建物跡（SB1）、井戸（SE30）、土器溜1基、方形の土坑多数がある。いずれも、出土遺物から8世紀中葉ごろに比定される。掘立柱建物SB1は、柱穴が約1m四方、2間×3間で柱間はおおむね2mを測る。井戸SE30は、奈良時代の

(1) 弥生時代前期



(2) 弥生時代中期～平安時代中期

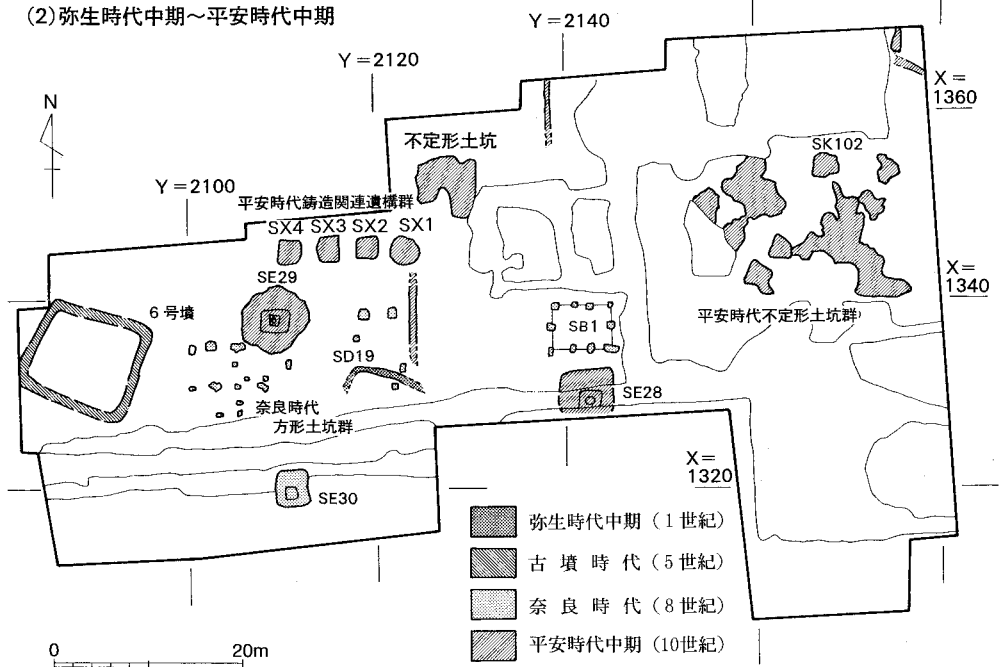
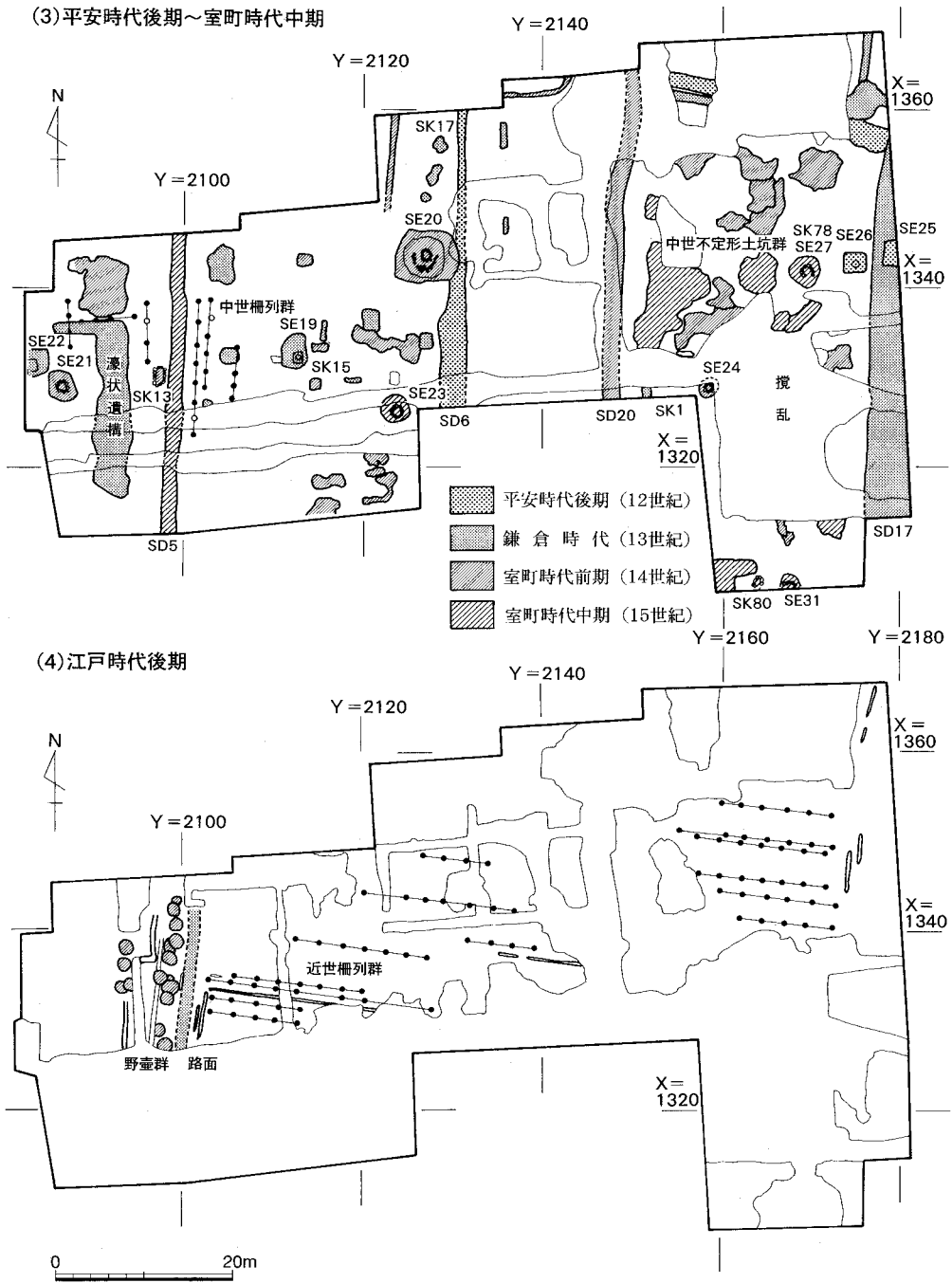


図3 主要遺構の配置(1) 縮尺1/800

遺 構



(4) 江戸時代後期

図4 主要遺構の配置(2) 縮尺1/800

井戸として京都大学構内遺跡で初見のもので、4 m×3 m程度の隅丸長方形の掘形をもち、検出面から深さは2 mあまりを測る（図版5-2）。有機物の遺存はなく内部構造は不明だが、不整形の水溜部を設けている。土器溜や方形土坑は、このSE30の北側一帯にまとまって存在する。方形土坑は1 m四方前後のもので、埋土には遺物をあまり含まず、掘立柱建物の柱穴となる可能性もあるが、並びは復元できなかった。

平安時代中期の遺構 梵鐘鑄造土坑4基（SX1～SX4）、井戸（SE28・SE29）のほか、小規模な南北溝や瓦溜、土器溜、不定形土坑がある。SE28は、一辺が5.5mの方形で垂直に下がる掘形、中央には円筒形の水溜部をもち、検出面からの深さは3 mあまりを測る。水溜から土馬が出土している。SE29は、直径約7 mの円形ですり鉢状に落ち込む掘形をもつ大型の井戸で、中央に方形の木枠と円筒形の水溜による下部構造をもち、検出面から深さ4 mあまりを測る（図版5-3）。10世紀前葉ごろの土師器を中心に多くの遺物が出土しているが、鑄造関連遺物の出土はなく、北側に位置するSX1～SX4との関係は不明である。調査区東半にまとまっている不定形土坑は、埋土中に10世紀代の遺物を含むもので、白色砂を採取した跡とみられるが、中世以降のものとかかなり錯綜しており、本来的な形状は定かにしがたい。

平安時代後期の遺構 おもな遺構は、井戸（SE25・SE26）、南北方向の溝（SD6）がある。SE25は、方形の掘形をもつが、大半が調査区外となる。SE26は、一辺3 m程度の隅丸方形の掘形をもつ井戸で、底部に円形の水溜部をもち、検出面からの深さ3 mあまりを測る。遺物の出土はきわめて少ない。SD6は、最大で幅2 m、深さ1 mあまりの規模をもつ。内部は2条に分かれる、掘り直しをしている可能性が高い。

鎌倉時代の遺構 おもな遺構は、井戸（SE19・SE22）、南北方向の溝（SD17）、濠状遺構のほか、13世紀代後半を中心に土器溜や小規模な溝・土坑が無数にある。この時期に帰属する井戸では、まだ石組み構造のものは出現していない。SE19は、一辺3.5m程度の不整形の掘形をもつ井戸で、底部に円形の水溜部をもち、検出面からの深さ約4 mを測る（図版5-4）。13世紀前葉の遺物が出土している。西半が調査区外となるSE22も、ほぼ同規模で特徴を同じくする。調査区東辺の南北溝SD17は、東側が調査区外となるが、少なくとも幅2 mを越える規模をもち、深さも1 m近くある。溝底は幾条にもわかれるため、何度か掘り直しされている可能性が高い。13世紀前葉の遺物が多く出土し、当時かなり重要度の高い溝であったと想定される。一方西部には、幅約4 m、深さ1.5m前後の濠状遺構がある。溝の北縁は西へと直角に折れ、細く浅くなって終わる。13世紀後葉の遺物

が出土している。このほか、大規模な土器溜として、13世紀前葉のSK1、後葉のSK17がある。SK1は、土坑内に土師器皿が充填されたかのような状態で出土し、南側の調査区外へも及ぶ（図版6-1）。SK17は、列状を成す3つの土器溜から成り、うち中央のSK17-2は掘り込みをともない最も多くの遺物を出土している（図版6-2）。

室町時代の遺構 おもなものとして、井戸6基（SE20・SE21・SE23・SE24・SE27・SE30）、南北溝2条（SD5・SD20）のほか、調査区東半に不定形土坑が多数あり、西半には内部に根石をもつ柱穴が密集し、一部は柵列状に並びが復元できる。また、配石、集石、土器溜は調査区中央の空白地帯を除いて全域で無数にある。この時期の井戸はいずれも石組み構造となり、深さは検出面より5mを越える。また15世紀代に下るものには、掘形がかなり小さくなる傾向が認められるほか、SE27のように、上面で大規模な集石と土器溜（SK78）をとまなうものがある（図版6-3）。南北溝は、いずれも幅・深さとも1.5m程度と規模は小さくなるが、断面が鋭いV字形を呈するようになる。不定形土坑は白色砂を採取した跡で、各時期にわたっており、調査区東半のほか、西半の南部にもみられる。以上のほか、この時期には墓葬に係する遺構の存在が注意され、方形の土坑内から備前産の陶器すり鉢が伏せた状態で埋納されたSK15（図版6-4）、配石の内部に土師器小皿等が納められたSK13（同5）、石造物からの転用とみられる板石や台石を組み込んだ配石SK80（同6）、などがある。

江戸時代の遺構 茶褐色土の上面で確認される遺構。北側のAP22区と同様に、調査区西辺で南北に列状に連なる野壺群と路面が見つまっているほかは、ほぼ全域で小柱穴が無数と小溝が検出された。出土遺物は18世紀後葉以降を中心とする。野壺群は桶杵製のものが中心で、相互の切り合いが著しい。路面は遺存状況がきわめて悪く、礫を敷いて叩き締めた部分が僅かに残る。小柱穴は、一辺15～20cm程度の方形のものが中心で、およそ2.3～2.4m間隔でやや方位を東に振る東西方向に並びが確認できる。収穫物乾燥用の柵列とみられ、江戸時代の調査区一帯の農村的景観を彷彿とさせる。

(2) 弥生時代前期の水田遺構（巻首図版、図版3、図5・6）

今回確認した水田遺構は、面としては黒灰色土上面の1面のみで、調査区東半の1500m²あまりを占め、西側の一部と南側を微高地によって画されているほかは調査区外へ続いている。攪乱による欠失部分を除けば、埋没時の状態をほぼとどめた非常に良好な遺存状態にあった。畦畔の形状や方向性、それに田面の状況のまったく異なる2種類の水田が互いに接して出土し、それぞれを「北半水田」、「南半水田」と呼ぶほか、各水田区画は北から

順に①～⑦までの番号を付した。なお、水田範囲内の黒灰色土層については、16箇所で層を上中下に分けて試料を採取し、プラント・オパール分析を実施した。上層ではほとんどの地点で良好にイネ科のオパールがみられたほか、一部の地点では中層からも検出されている。これらの結果の詳細とその分析は、報告書においておこなう。

地形環境 水田域の標高は、最高51.986m（水田①）、最低51.402m（水田③⑧）、現地表面から最深約2mを測る。全体としては北北東から南南西へと下る浅い谷状の地形であり、そのなかに、北半では西側の中央微高地から東への傾斜、南半では南部微高地から北への傾斜が卓越している。この浅谷地形は、縄文後期における黄褐色土の堆積によって形成されたもので、高野川系や白川系の流路による自然堤防状の微高地の生成にともない扇端部の各所に形成された、小規模な後背低地のひとつであった、とみられる。

北半水田 図4の梨地部分の範囲。田面に著しい凹凸がみられることを最大の特徴とし、畦畔の規模も大きく、区画のあり方も南半とはまったく異なる。

畦畔は、北北東－南南西方向に斜面の等高地をはしる南北畦畔が軸となり、その間をあみだくじ状に東西畦畔でつなぐ。相互の規模や形状に差はなく、断面半円形で幅30cm高さ15cm程度の堅固なものである。区画は、最小が面積2.4m²（水田③⑥）で、10m²以下のものが

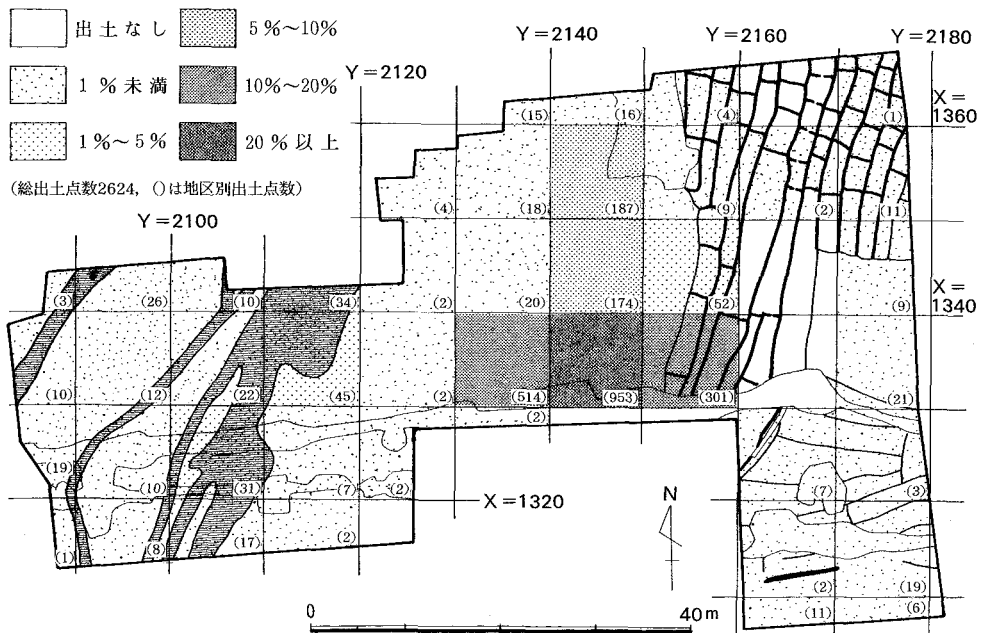


図5 地区別遺物出土頻度（第6～8層） 縮尺1/800

遺 構

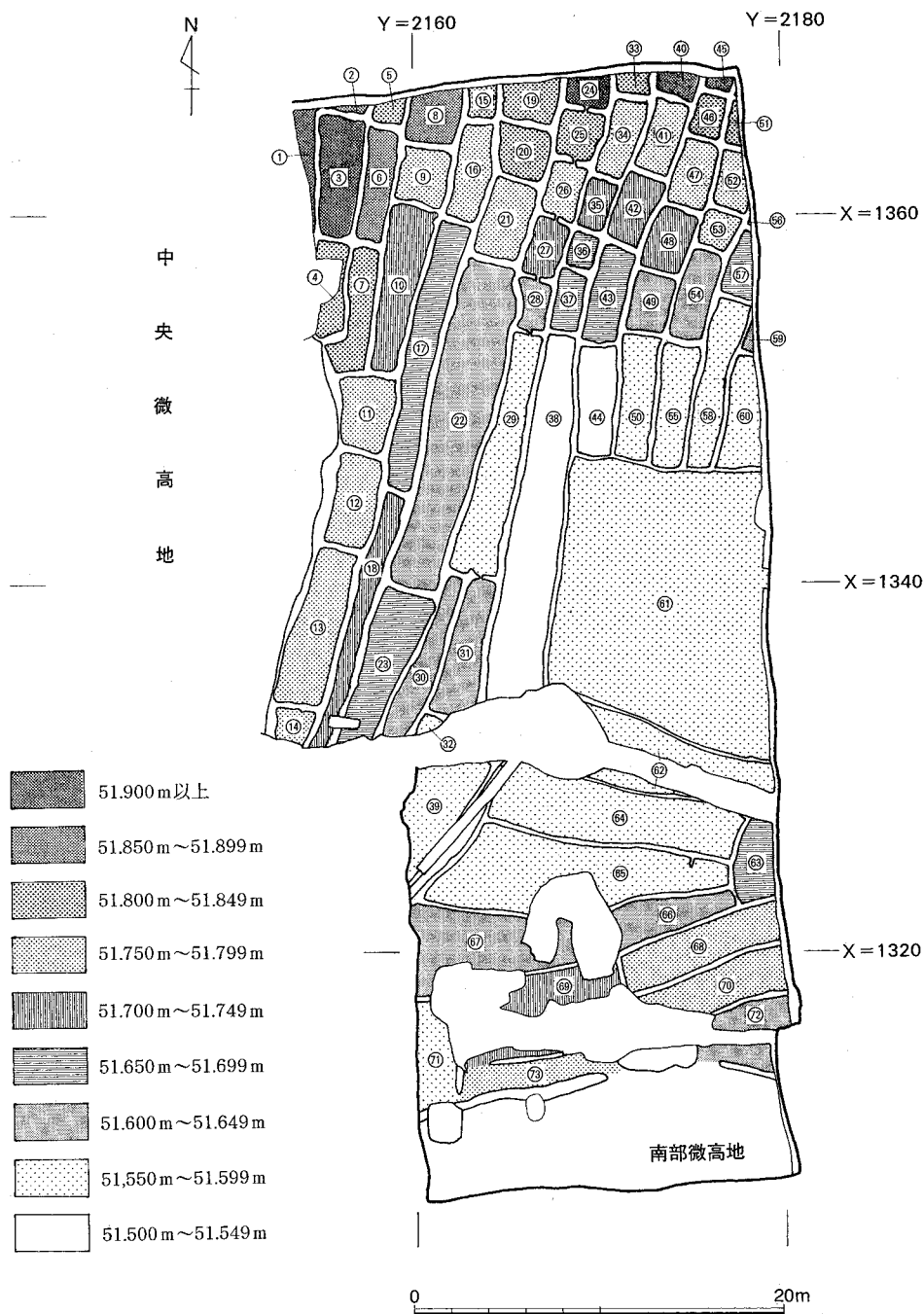


図6 各水田区画の平均標高 縮尺1/400

主体となる典型的な小区画水田であるが、形は不揃いで、等高地を確保するために細長い短冊状の区画が卓越している。また、水田②④～水田③②の南北方向の並びにのみ、東西畦畔を途切れさせた水口が設けてある。水田面の凹凸は高低差が10～15cm程度におよび、凸部の頂点が畦畔の高さを凌ぐ部分もある。形状や並びにはまったく規則性がうかがえないが、畦畔に沿って幅15cm程度の浅い溝状の窪みがめぐり、凹凸はその内側の水田面のみにある。

南半水田 水田⑤⑨～水田⑦③が相当する。水田面は平坦で、畦畔の規模や区画も異なる。

畦畔は、北半水田との境界になっているものも含めて、断面三角形で幅10cm高さ5cm程度のこぶりなものである。区画は、東西方向に細長い形態が基本となり、10～20m²程度と北半水田よりひとまわり大きめとなるほか、傾斜に乏しい水田⑥①は150m²を越える広さのまま残される。水口は認められないが、南部微高地との境には、水流調節のためかともみられる土堤状の高まりが設けられている。

なお、この南半水田は、北半水田と境を接しながら西側の調査区外へと続いている。北半水田の南北畦畔も、南方では方位を東へ振る傾向が認められる。したがって、西南方一帯では、東北東～西南西を軸とする区画の水田が広がっている可能性が高いといえよう。

水田遺構の時期 水田遺構は、土石流にともなう黄色砂によってほぼ一瞬のうちに全体が埋没したものとみられる。現時点では、京都大学構内遺跡において、この黄色砂より下層からは弥生時代前期新段階までの土器しか出土しておらず、櫛描文を施した中期に比定される土器の出土例はない。よって、土石流の発生はおおむね弥生時代前期末のことであり、水田が機能していた時期の下限はそこに求められる。

一方、この地で水田が営まれた上限については、明確に決定づける資料はないものの、隣接する中央微高地上で縄文時代晩期末の船橋式・長原式の土器が多く出土しており、一帯での活動の活発化がそうした時期にさかのぼることを示唆している。また、耕土層である黒灰色土層の中位から掘り込む細い南北溝も検出されており（図版3-5）、晩期にさかのぼる形で、粗放な形にせよ耕作が開始されていた可能性を指摘しておきたい。

(3) 平安時代中期の鋳造関連遺構（図版4、図7）

梵鐘鋳造土坑 SX1～SX4 調査区中央北縁で4基の梵鐘鋳造土坑 SX1～SX4を検出している。いずれも、掘形の平面形は一辺約2.5mの隅丸方形、深さは約1m、ほぼ東西方向に等間隔に並ぶ。土坑内には、破損した炉壁が大量に埋積しており、底面の中央部には東西方向の溝状の落ち込みがみられ、四隅にも柱穴が検出される場合が多い。総じて北側の AP22 区で検出された梵鐘鋳造土坑 SK245・SK257〔五十川・飛野84〕と比較して

遺 構

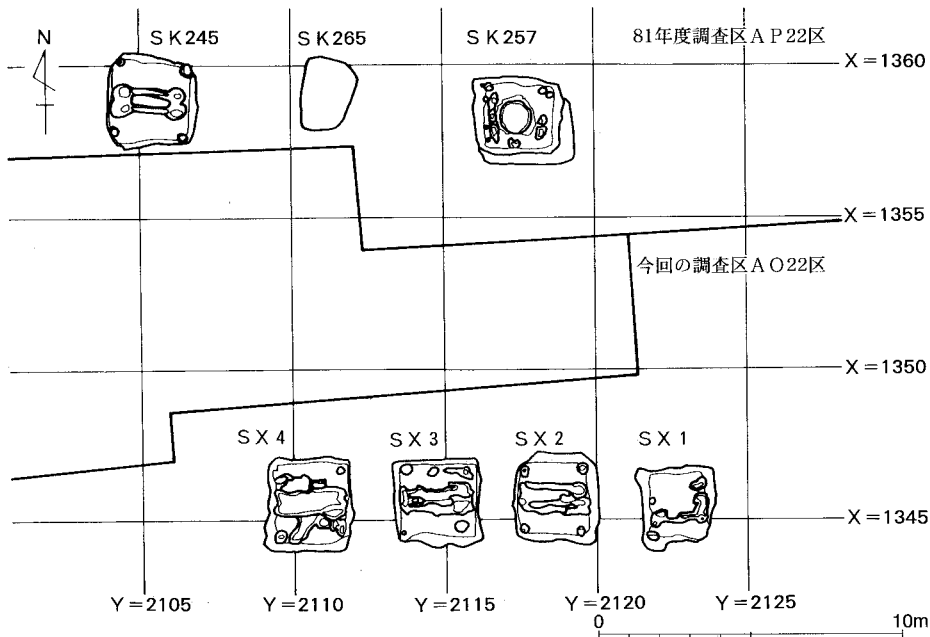


図7 平安時代鑄造関連遺構の配置 縮尺1/250

遺存状況が良くなく、^{じょうばん}定盤等の施設は残っていなかったが、それらと同様の形態を示すものと推測されよう。すなわち、中央にみられる東西の溝状の落ち込みは、湯入れ時に溶湯からの圧力によって鑄型が動くのを防ぐために設置する掛木の痕跡で、下部に丸太材を置いていたとみられる。また、四隅にみられる柱穴は、梵鐘を吊り上げる構架材の柱の存在を示すものであろう。こうした構造物に使用されていたものと思われる大型の^{かすかり}鑊が、SX 4の底面から出土している。

なお、土坑底面の遺存状況はいずれも大差なかったが、SX 1の上面には、粘土によって底面と側面を形成し、その表面が赤く焼成された窯状の構築物が遺存していた。これは、鑄造土坑としてのSX 1が廃棄されて半ば埋積したところに、木炭や鑄型などを焼成するための窯が設けられたのではないかと考えられる。したがって、これら4基の鑄造土坑すべてがまったく同時に操業していたものではないことが知られるが、掘形が真東西にはば並び、推定される掛木の方角も一致していることから、一定の時間幅のなかでの一連の作業過程によって形成され、操業していたものとみてよからう。

不定形土坑 上記のSX 1の北東には、同時期とみられる不定形土坑がある。深さ2 m以上を測り、基盤層である黄褐色粘質土を垂直に掘り込んでいることから、それを採取し

た跡だろう。同質の粘土が SX 1 上層の窯状遺構の壁体にも使用されていることから、鑄造作業に必要な粘土の採掘坑という重要な性格をもつ遺構であったと想定される。

現在のところ、SX 1～SX 4 出土遺物のなかに良好な鑄型を確認していないが、炉壁や銅滓などが大量に出土しており、梵鐘を中心とする青銅鑄物が主たる製品であったことは間違いない。また、炉壁などとともに出土している土器は多くはないが、おおむね10世紀前葉ごろに比定される型式的特徴を備え、AP22 区の鑄造関連遺構と同様な年代観でとらえられる。すなわち、今回と AP22 区の鑄造関連遺構は、一体の遺構群としてほぼ同じところに鑄物生産をおこなっていたと考えられ、平安時代中期の大型鑄物生産工房としては例をみない大規模なものであることが明らかとなったといえよう。なお、今回の梵鐘鑄造土坑 SX 2～SX 4 については、埋め戻しのうえ現地に保存の処置を講じている。

4 遺 物

出土遺物は、縄文時代中期末以降江戸時代に至る各時代にわたり、土器類を中心に、石器・石製品、銭貨や釘などの金属製品をはじめ、轆羽口や炉壁など鑄造関連の各種遺物を含み多岐にわたる。ここでは、土器資料で、できるだけ量的にまとまった遺構からの一括出土品を中心に選択した。

(1) 縄文・弥生時代の遺物 (図版 7・8, 図 8～13)

縄文時代後期の遺物 (I 1～I 4) 下層の確認のため東西畦 (X=1340) に沿って基盤である黄褐色土を幅 1 m で断ち割り調査したところ、調査区東辺の 2 ヶ所の層中から残りの良い土器がまとまって出土した。地点は Y=2160 付近 (I 2～I 4) と 2175 付近 (I 1) である。生活面などの特別な痕跡はみられず、均質な黄褐色の粘質土層中位で検出された状況にあることから、遺構というよりも黄褐色土の堆積過程で近接した場所から流入した資料である可能性が高い。北白川上層式 3 期の資料がまとまって採集されている東方約 30 m の 7 地点との関連が注意されよう〔藤岡 73, 泉 80〕。

I 1 は、同一個体と認定できる a～f の破片がまとまって出土した。口縁と底部を欠いていて器形の全体はうかがいにくい。文様は、a の破片によれば、5～6 条の横走沈線文帯を縦位線によって区切りした横長の方形区画文を組み合わせるモチーフで、横走沈線の条数を違えてクランク状を成している部分がある。沈線文は、細い篋先を強く押し引きする部分があり、施文後に、非常に節の細かな LR 縄文を方形区画内に充填する。色調はやや赤みを帯びた黄白色を基調とし、胎土・焼成とも非常に良好な精製品で、外面だけでな

遺 物

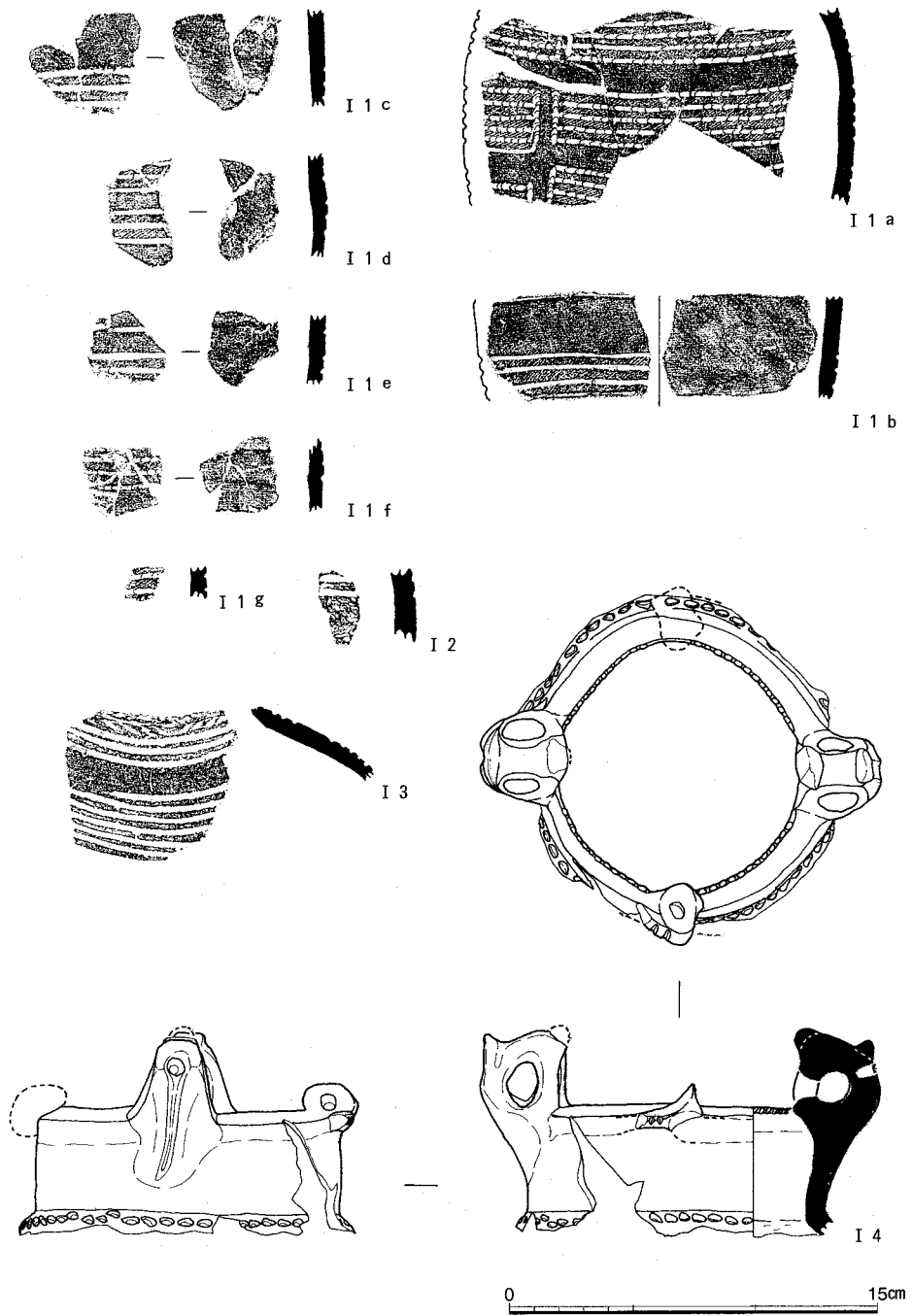


図8 黄褐色土出土遺物 縮尺1/3

く内面も篋磨きによって平滑に仕上げる。モチーフは北白川上層式3期に、施文技法は一乗寺K式にそれぞれつながる要素をもった、中間的様相を示す資料といえようか。

I 4 は、注口土器の頸部から上の部分。表面は黄白色を呈するが、断面は黒色。胎土は精良で、内外面とも丁寧に撫でて仕上げるほか、僅かに残る頸部の屈曲部内面は横位の削痕もみられる。口縁端部が内折する器形で、互いに向き合う1対の環状把手と、それと直交する軸線上に円形のボタン状突起が1対貼り付けられたようだが、ひとつは剥落して痕跡のみ残る。突起の側面観は山形を呈し、これにつながる状態で、外側を刻む紐状の貼付突帯が一部残る。剥落痕から、本来は屈曲部沿いにこの突帯が一周していたものとみられる。本例は、西田泰民の分類と編年に従うと、関東地方の加曾利B 1 式後半期に主流となる5 類の「有頸肩部張出し型」に比定される〔西田92〕。よって、通例用いられている編年の平行関係からみて、おおむねI 1 と同時期の資料とみて良からう。

I 2 は、LR 縄文を地文とし、横位の篋描沈線がみられる土器片。灰色で砂粒を多く含む胎土である。I 3 は、多条の横走沈線文帯をもち、上端に斜方向の短い沈線がめぐる。砂粒を多く含む胎土で、黄白色を呈する。文様や推定される傾きからみて、I 4 と同様な注口土器の、胴部上半に相当する部分の破片とみられる。

縄文時代晩期・弥生時代前期の遺物（I 5 ～ I 27） 第8層の黒灰色土および調査区西半の流路内からの出土品である。地区別に説明する。

I 5 ～ I 10 は、水田域内の黒灰色土層中からの出土。図化出来たのはこれだけにとどまる。I 5 ・ I 6 は突帯文土器の口縁で、丸く収めた端部に接して断面三角形の突帯が付き、D 字状の刻みを施す。I 7 は深鉢胴部で、かなり垂れ下がった不安定な形状の突帯をもち、刻みは小さなO 字状である。I 8 ～ I 10 は遠賀川式土器。I 8 は底部の小片。I 9 は壺の頸部で、小ぶりの断面三角形突帯を複数条めぐらすもの。I 10 は壺の胴部で、削り出し突帯とその上面に一条までの沈線が確認できる。

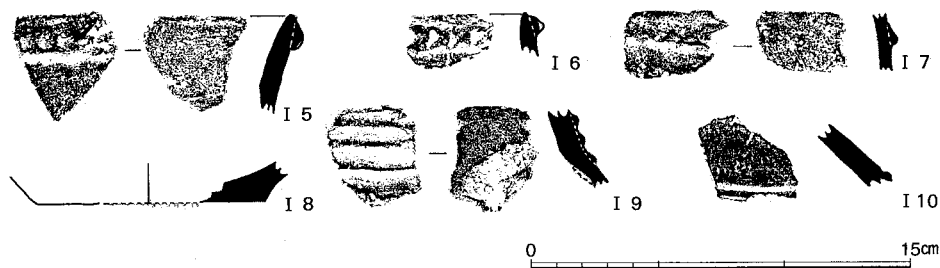


図9 水田域黒灰色土出土遺物 縮尺1/3

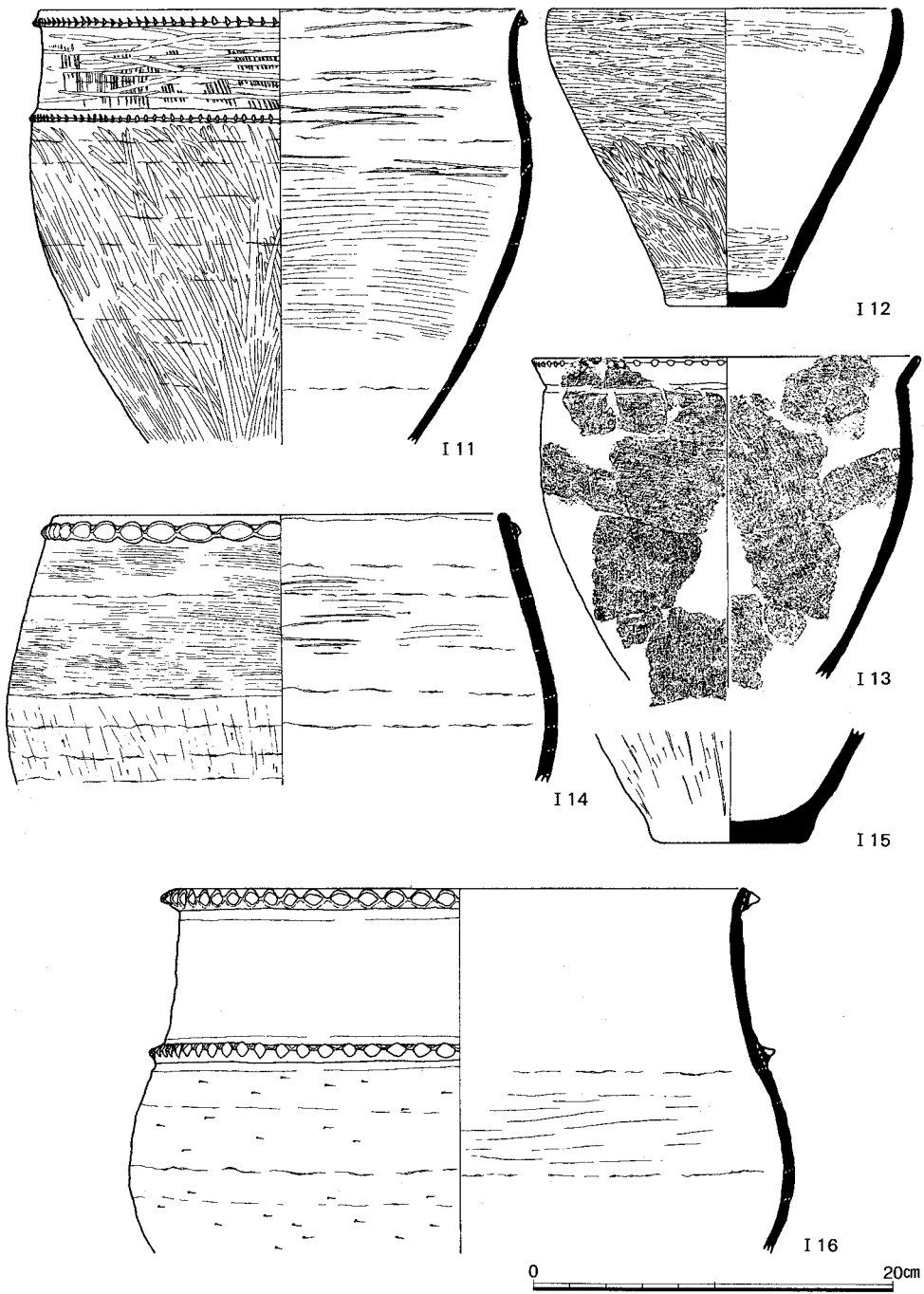


图10 中央微高地黑灰色土出土遺物(1) 縮尺1/4

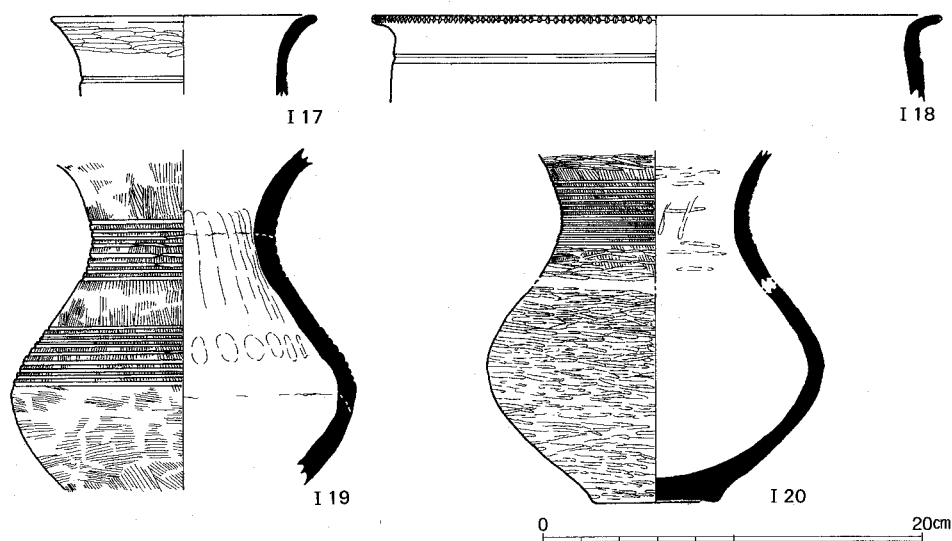


図11 中央微高地黒灰色土出土遺物(2) 縮尺1/4

I 11～I 20は、中央微高地の黒灰色土出土。I 11～I 13は1ヶ所でまとまって出土した。I 11は2条の刻目突帯文深鉢で、刻みは非常に細かなD字状である。外面を篋削りと篋磨きの折衷的な手法で仕上げる。I 12は口縁が僅かに内湾する器形の鉢。色調は赤褐色を基調とし、外面は全面篋磨き調整され無文だが、上半に煤が厚く付着する。I 13は、口縁が「く」字状に短く外反する甕形土器。口唇部には布目のあるO字状の刻みが施され、頸部には不安定な浅い沈線が1条めぐる。外面は浅く細密な条痕調整で、この種の甕に通有な刷毛目調整とは異なる。砂粒を多量に含む胎土で暗褐色を呈する。器形や装飾は遠賀川式土器の甕の特徴をもつが、それ以外に縄文土器的な要素が認められる折衷的な性格の土器といえる。I 14は1条の刻目突帯文深鉢。口縁はやや内傾し、端部からやや下がった位置に、指頭による横長のO字状押捺を施した突帯をもつ。外面は、頸部が横位の浅い条痕調整で、胴部は下から上へ軽く削り上げる。I 15の底部は、外面を縦に削り上げるもので、I 14と胎土や色調が類似し、同一個体の可能性が高い。I 16は、やや胴部の張る形態の2条の刻目突帯文深鉢。大ぶりで丈高のしっかりした突帯でO字状に押捺する。I 17～I 20は遠賀川式土器。I 17は頸部に1条までの沈線が確認できる壺の口縁。薄手でやや粗雑なつくりである。I 18は甕の口縁で、頸部に1条の篋描沈線をもつ。口縁部周辺の強い横撫でが沈線の上側に及び、弱い段状を成す。I 19・I 20は、多条の篋描沈線文帯を頸部や胴部に施す壺。I 19は沈線も太く外面の刷毛調整がそのまま残された粗いつくりだが、I 20

遺 物

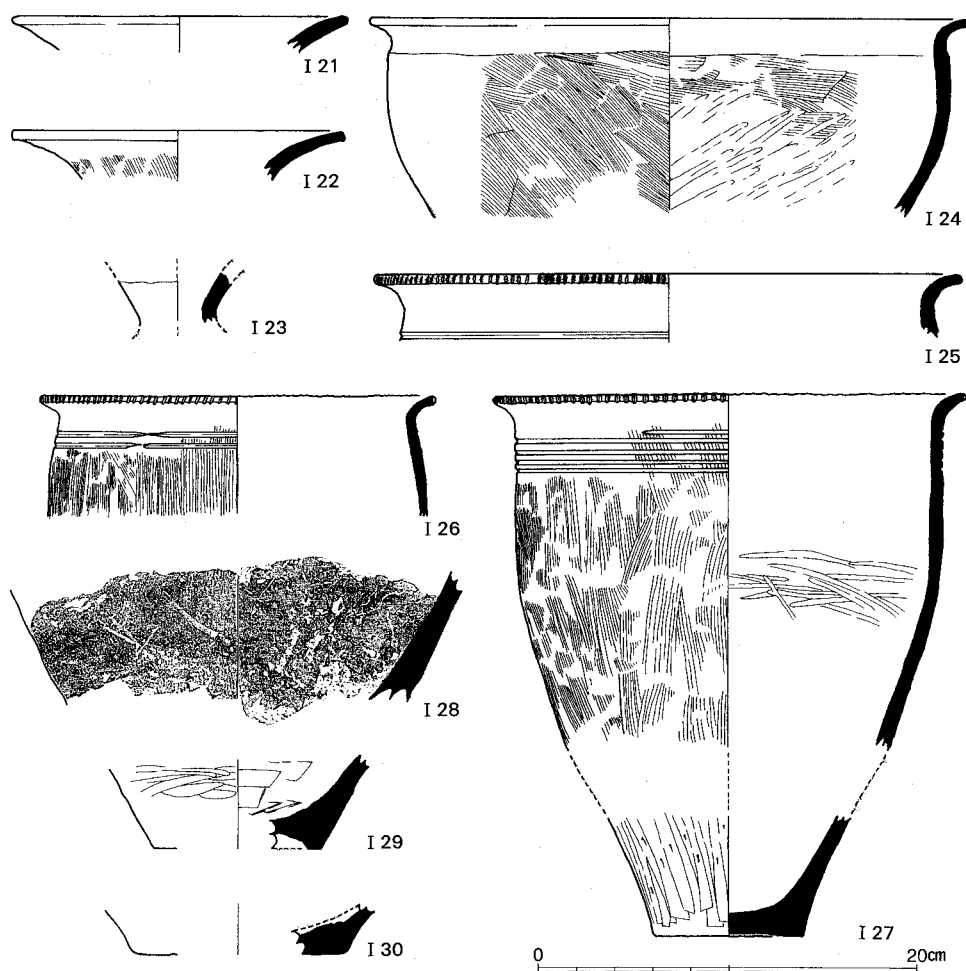


図12 流路出土遺物 縮尺1/4

は細く浅い繊細な沈線が密に施され、施文部以外が全面丁寧に研磨されている。

I 21～I 30は調査区西半の流路出土。I 21がSR1，それ以外はSR4出土で，いずれも遠賀川式土器。I 23は小型の異形品で，図上で上にした破面は擬口縁となる。器台形を呈するものかとみられるが，類例を知らない。I 27の甕は，胎土中に赤色くさり礫を多量に含み，底部付近を下から上へ削り上げる調整をしている点がやや特徴的である。

以上のほか，中央微高地からは晩期中葉の滋賀里Ⅲb式が微量出土しているが，それ以外には口唇端面を刻む特徴をもつものはみられず，船橋式と長原式が出土資料の中心となっているといえる。弥生時代前期の土器は，中～新段階のもので，流路内からまとまって

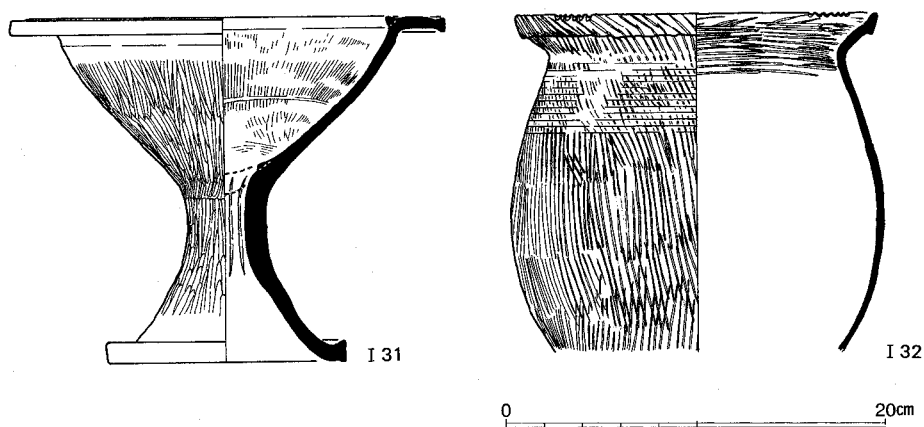


図13 弥生時代中期の遺物（SD19 出土） 縮尺1/4

出土しているほかに、水田域や中央微高地でも出土しているものの、量はきわめて少ない。

弥生時代中期の遺物（I 31・I 32） 黄色砂上面の遺構である SD19 からの一括出土品のみ。I 31は高杯で、杯部の円盤充填部が剥離して欠失する。外面は縦位の篋磨きが精緻にされるが、杯部の内面は刷毛調整が消されずに残る。脚部の内面はしぼり痕がそのまま残り、端部が横撫でされるのみで、篋削りはない。I 32は一般に「近江型」と呼ばれる系統の甕で、口縁が斜め上方に立ち上がる弱い受け口状を呈し、端部には6個1単位の刻みが4ヶ所に施される。外面および口縁部内面は、結束が緩く先端が鋭い工具による粗い刷毛調整で、頸部には、その上に重ねて浅くかすれ気味の12条の櫛描直線文がめぐる。器形や調整の特徴から、ともに第Ⅲ様式後半の凹線文出現期前後の時期に比定されよう。

(2) 古代の遺物（図版8，図14～17）

奈良時代の遺物（I 33～I 46） I 33～I 39が SE30，それ以外が黒褐色土からの出土。I 33～I 36・I 40～I 44は須恵器杯と杯蓋。I 37～I 39・I 45・I 46は土師器で、杯（I 37）、椀（I 38）、甕（I 39）、鍋（I 45・I 46）の各種がある。I 37は、内面に1段の斜方向の暗文をもつ。I 39の甕は、器壁がかなり厚手で、内外面とも粗く刷毛調整するが、I 45・I 46の鍋は、薄手で細かい刷毛調整をし、内面下半に叩きの当て具痕跡とみられる同心円文が残る。このほか、ここに示していないが、外面に「麻呂」と読める墨書のある土師器杯の底部破片があるほか、砂粒を多量に含む胎土で厚手の器壁をもち、内面に布目痕をもつものとそうでないものの2種の製塩土器が、多く出土している。以上の土器は、土師器杯類などの特徴から、おおむね平城宮Ⅲ期（8世紀中葉）ごろに比定される。

遺 物

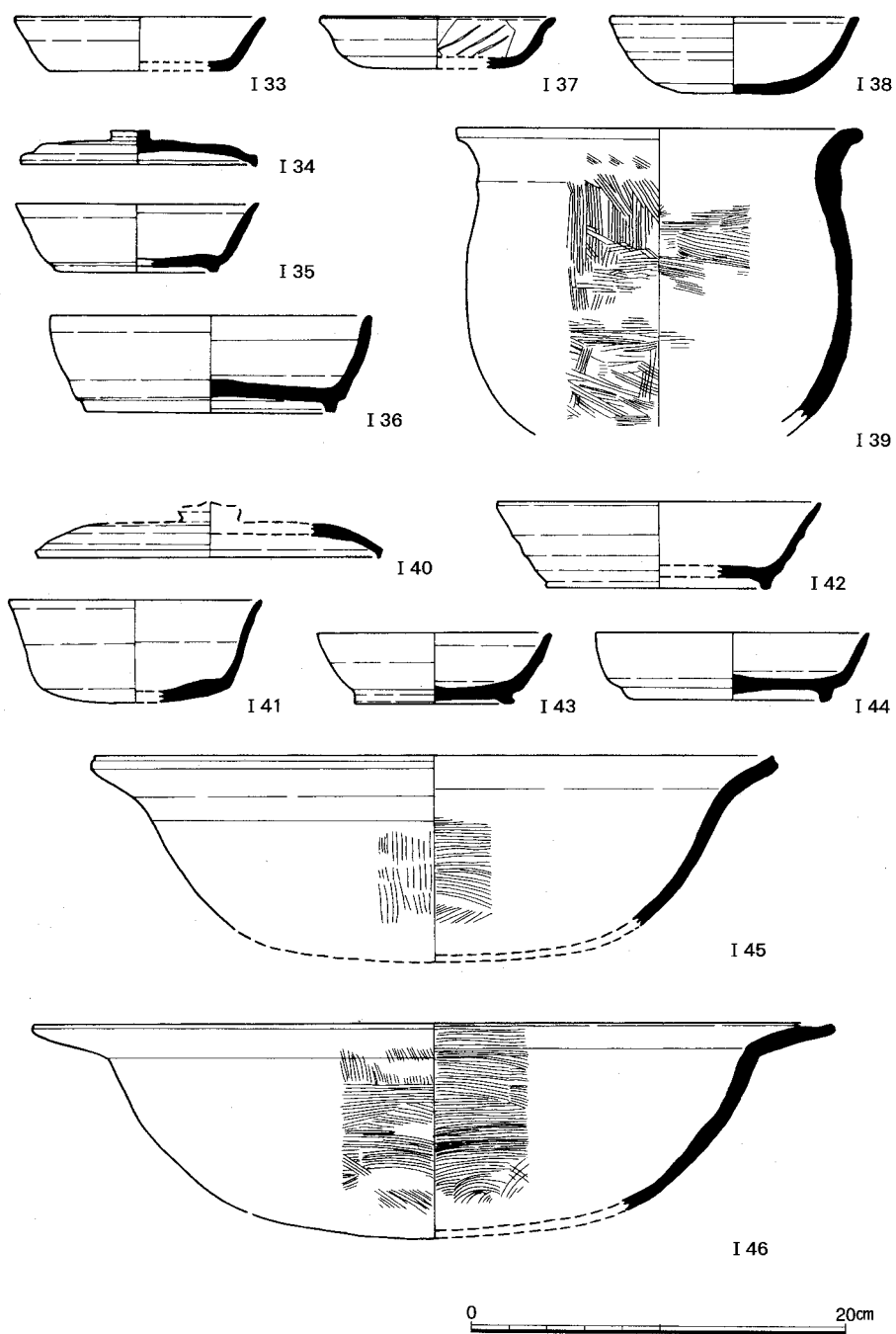


図14 SE30 出土遺物 (I 33～I 36須恵器, I 37～I 39土師器),
黒褐色土出土遺物 (I 40～I 44須恵器, I 45・I 46土師器)

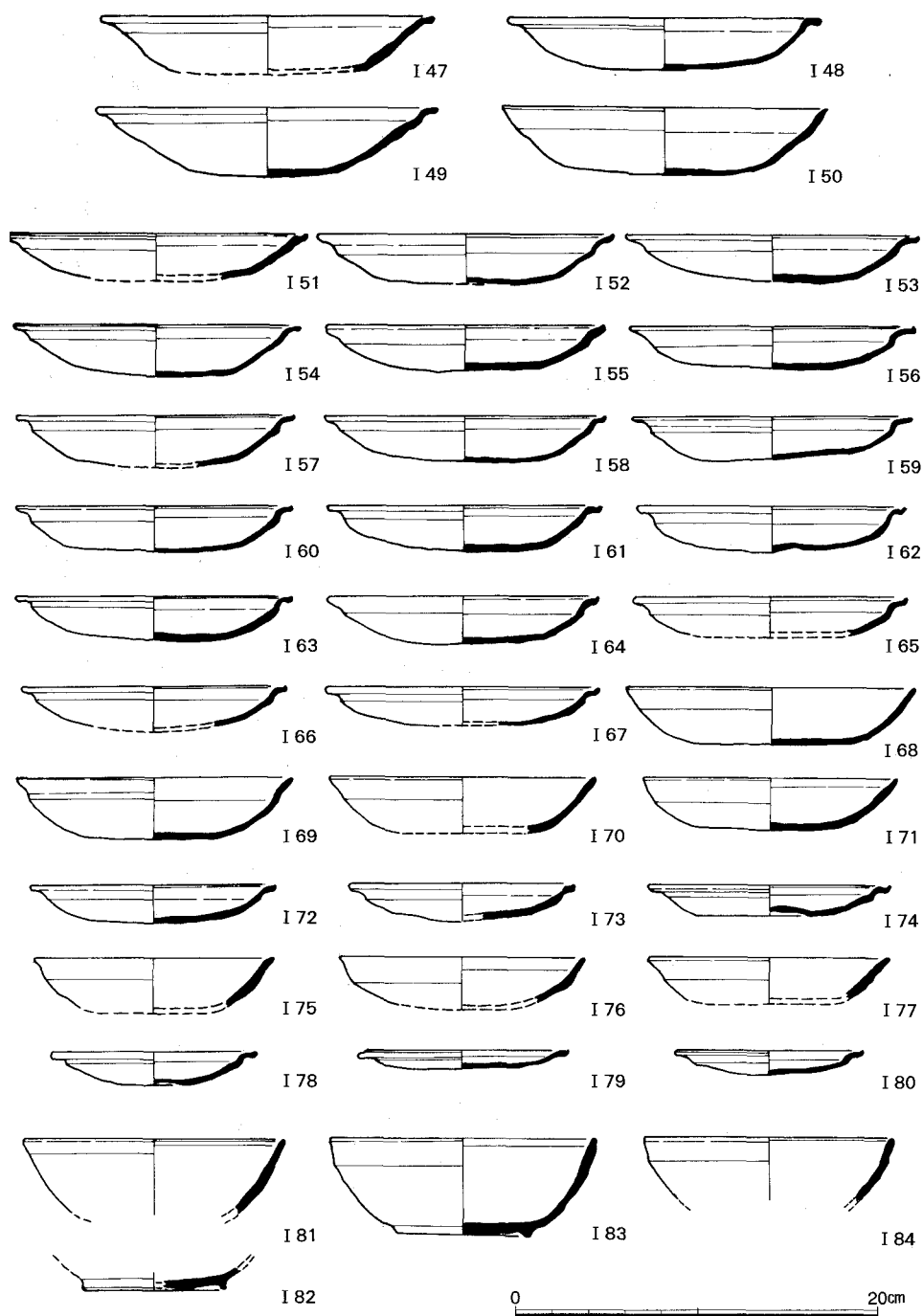


図15 SE29 出土遺物(1) (I 47～I 80土師器, I 81～I 84黒色土器)

遺 物

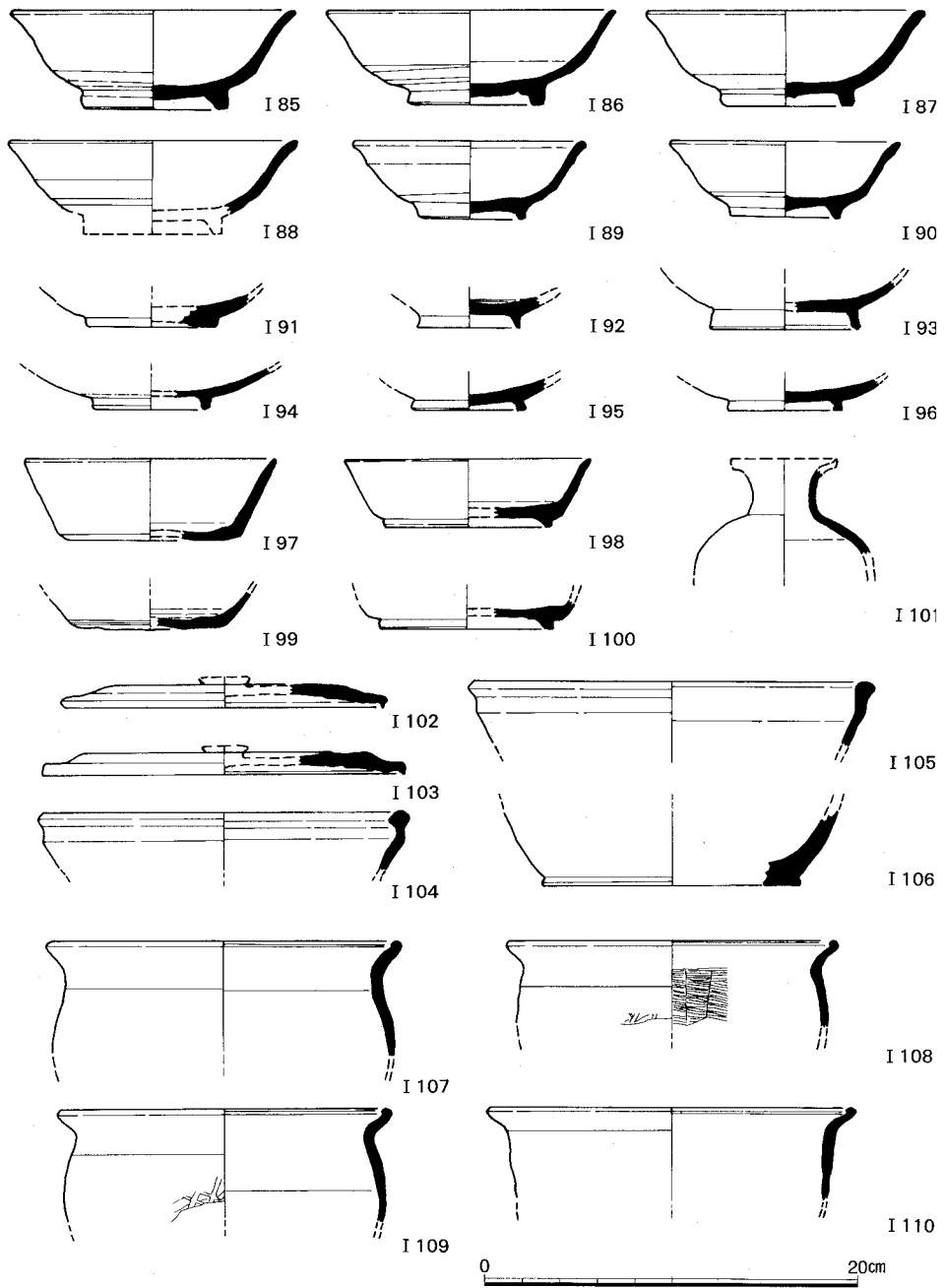


図16 SE29 出土遺物(2) (I 85~I 90白色土器, I 91~I 93緑釉陶器,
I 94~I 96灰釉陶器, I 97~I 106須恵器, I 107~I 110土師器)

平安時代の遺物（I 47～I 116） 量的にまとまっている SE29 出土遺物を中心に示す。I 47～I 80は土師器の杯・椀類。薄手の器壁で、口縁が短く外反する「て」字状口縁手法 B₂類が中心であるが、I 50のように外反の弱い B₁類が若干混じる。調整はいずれも撫でによる e 手法である。法量的には、14～16cm程度のものが主体となりつつ、19cm前後と 11cm程度のものも一定量含む。I 81～I 84は黒色土器で、いずれも内面のみ黒色処理する A 類。I 85～I 90は白色土器で、やや厚手の器壁で口縁端部が短く外反する椀形を呈する。高台から体部の下半までは回転斲削りし、緩やかな稜をもってたちあがる。I 91～I 93は緑釉陶器、I 94～I 96は灰釉陶器、I 97～I 106は須恵器。これらは量的に乏しく、破片も小さい。I 107～I 110は、土師器の甕。いずれも口径18cm程度で、短く上方へ巻き込むような口縁端部をもつ。以上の資料は、若干の年代幅をもちながらもおおむね平安時代中期、10世紀前半代に収まる年代観で捉えられよう。

I 111～I 116は、梵鐘鑄造土坑からの出土遺物。I 111・I 112・I 114の土師器は、「て」字状口縁 B₁類。I 115は黒色土器 A 類の椀で、外面に「堂」と読めるような墨書がある。これらも平安時代中期で、10世紀前葉ごろに比定できよう。

(3) 中世の遺物（図版 9・10、図18～25）

鎌倉時代の遺物（I 117～I 240） 13世紀前葉ごろの土器溜 SK 1，同後葉ごろの土器溜 SK17-2，14世紀前葉ごろの墓壇 SK15 の出土遺物を呈示する。

I 117～I 165は S K 1 出土遺物。口縁部計測法で487個体の遺物が出土しているが、うち99.5%を土師器の皿類が占める。超大型の皿（I 117～I 120）が一定量含まれることが注目される。大型の皿 A I（I 121～I 144），小型の皿 A II（I 145～I 163）ともに、1段

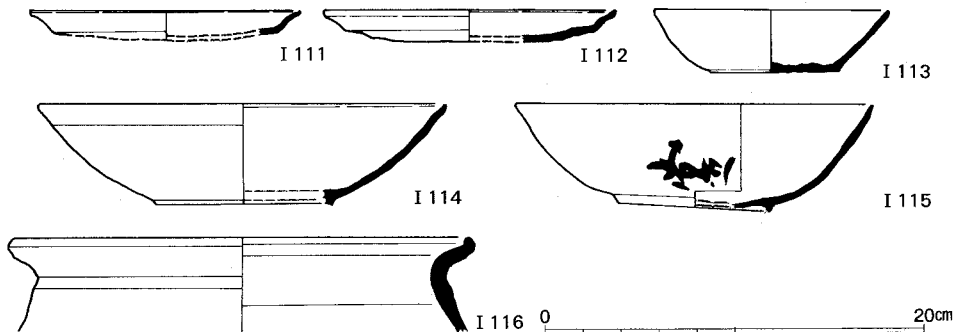


図17 SX 3 出土遺物（I 111・I 112土師器，I 113須恵器），
SX 4 出土遺物（I 114土師器），SX 1 出土遺物（I 115黒色土器，I 116土師器）

遺 物

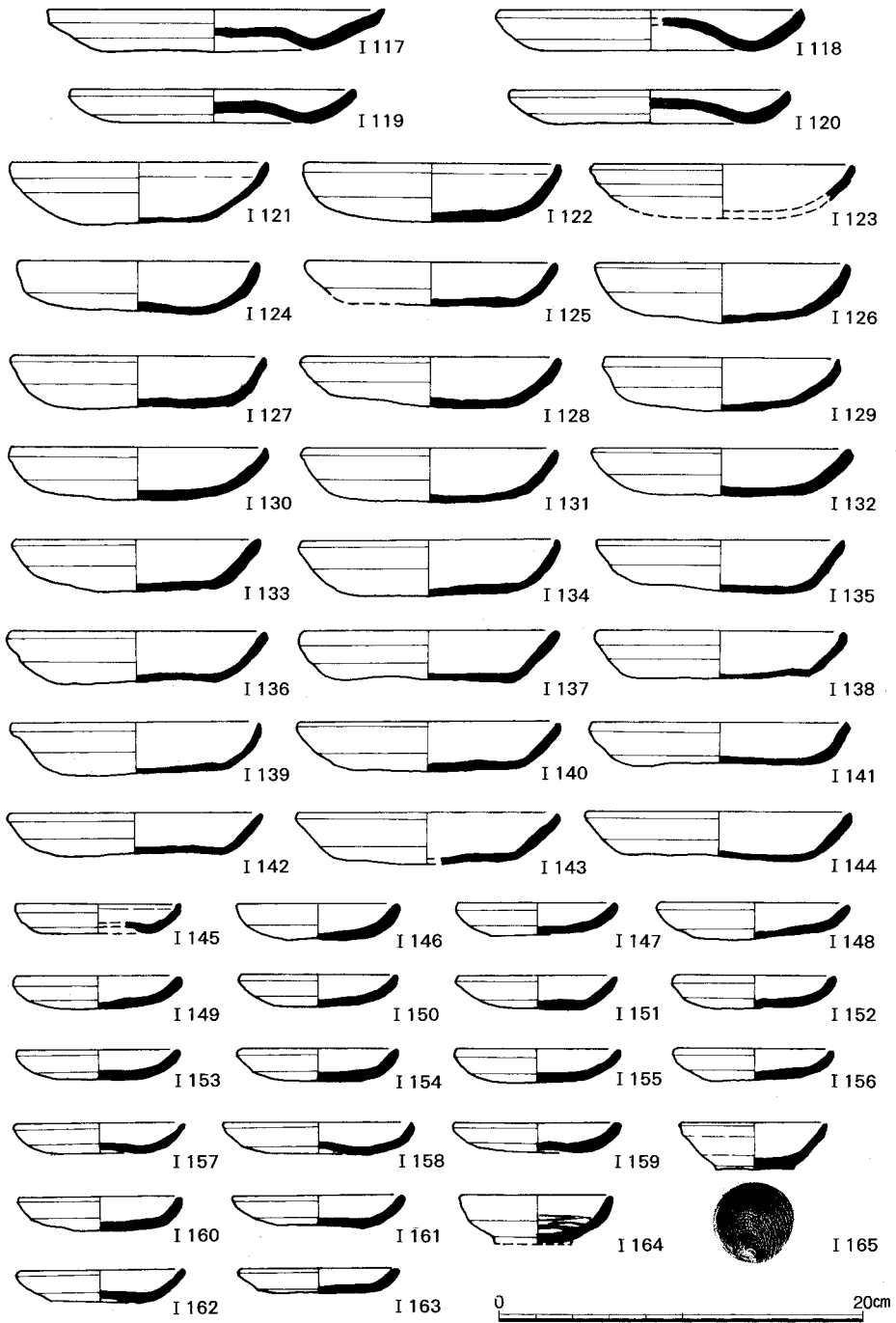


図18 SK 1 出土遺物 (I 117～I 163土師器, I 164瓦器, I 165灰釉系陶器)

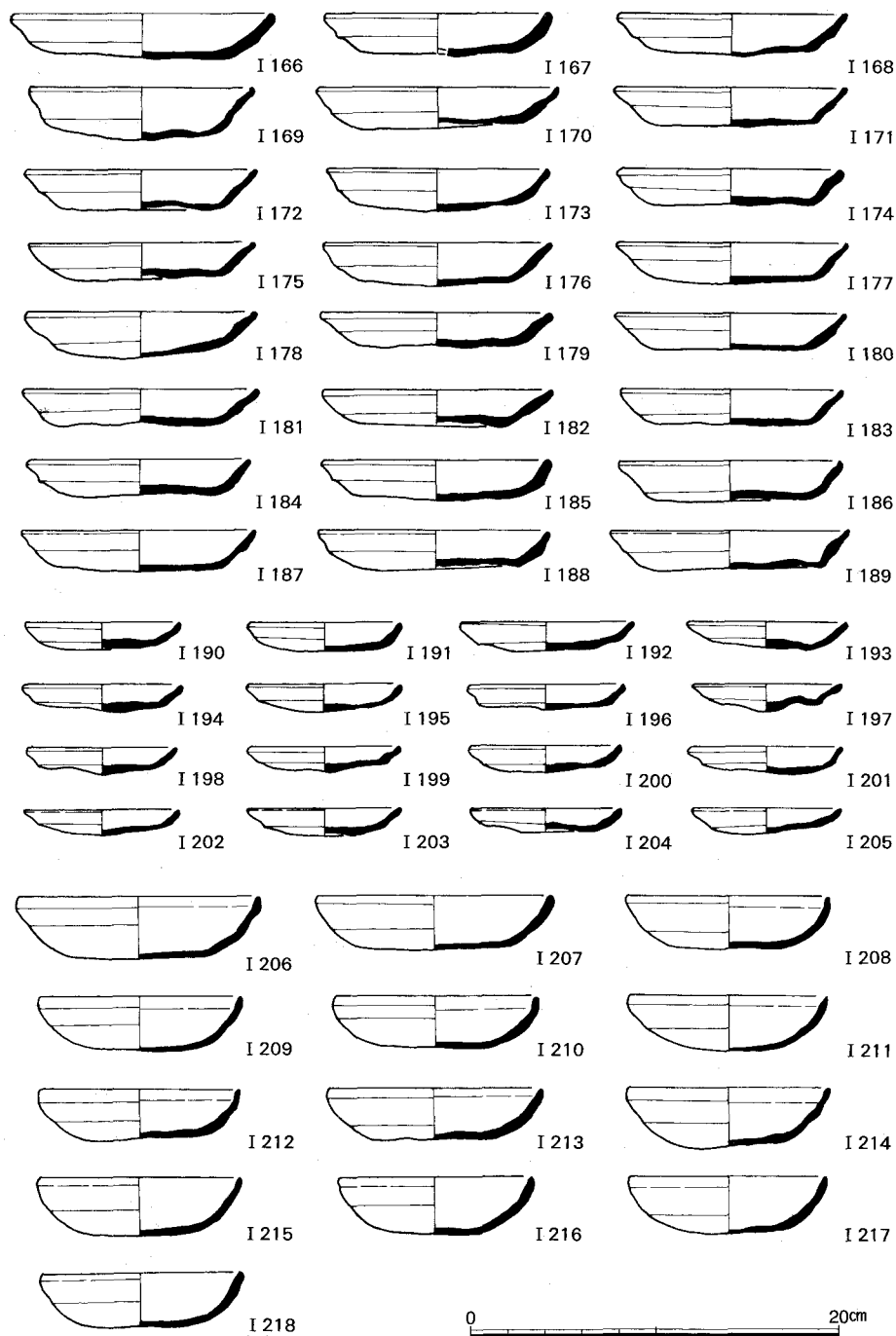


図19 SK17-2 出土遺物(1) (I 166～I 218土師器)

遺 物

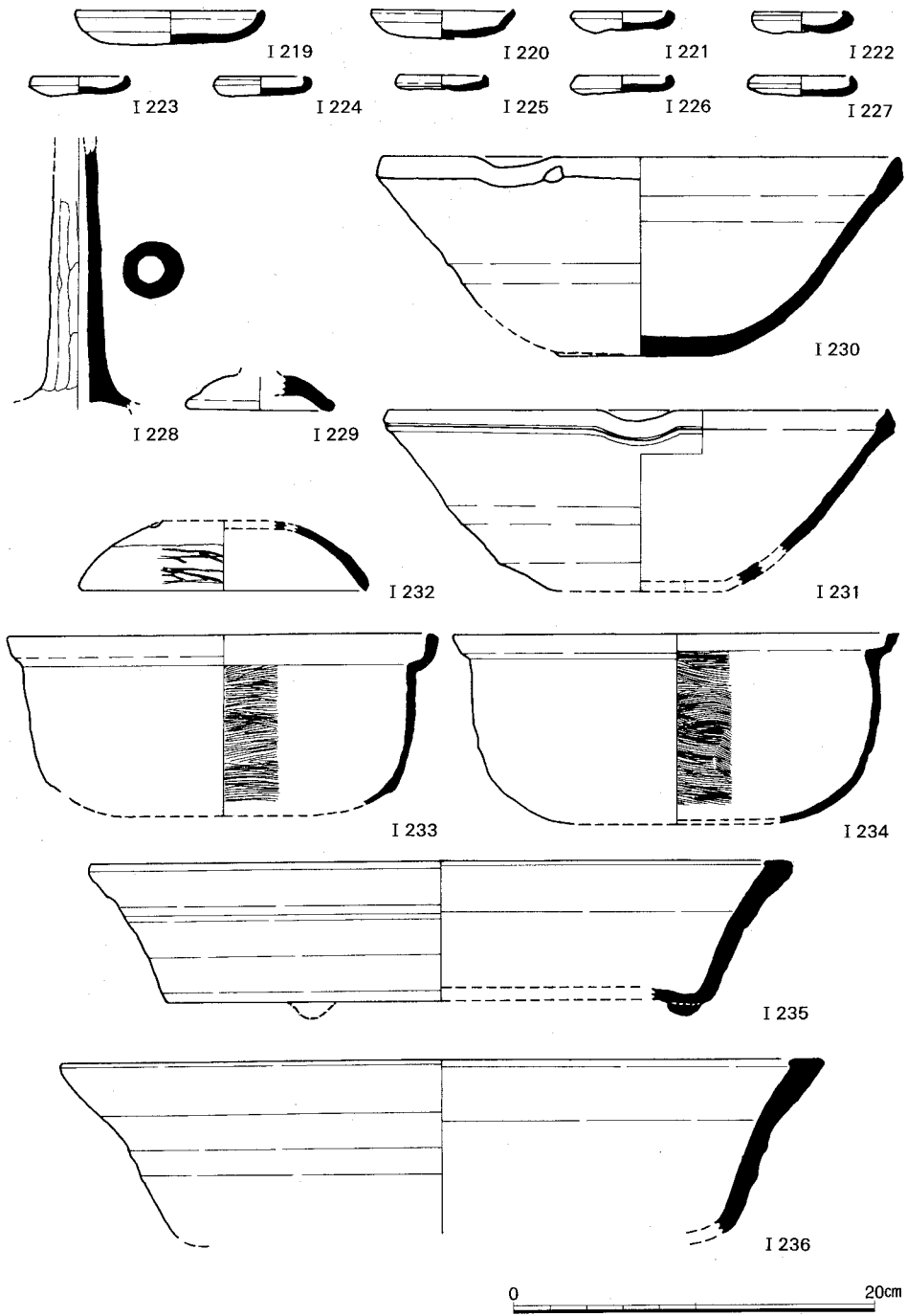


図20 SK17-2 出土遺物(2) (I 219～I 229土師器, I 230・I 231須恵器, I 232～I 236瓦器)

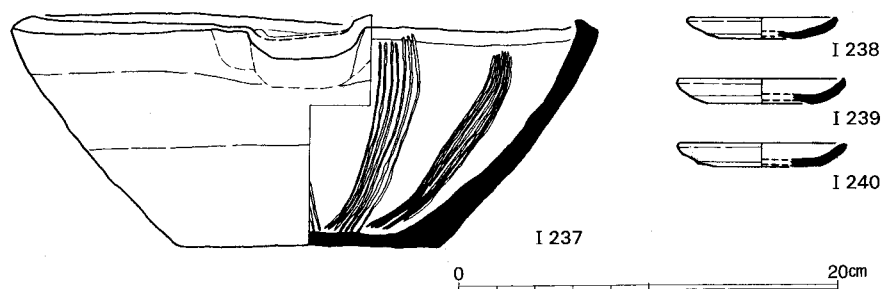


図21 SK15 出土遺物（I 237備前，I 238～I 240土師器）

撫で面取り手法D₄類とD₅類が主体となり，2段撫で手法C₄類・C₅類（I 121～I 123・I 145）が僅かに混じる。また，I 134・I 135・I 143・I 144・I 158・I 159は，灰白色を呈するが，器形・手法とも他の赤褐色の皿類とまったく変わるところがない。この段階では，灰白色を呈する土師器の一群が固有の器形として分化していなかったことがわかる。

I 166～I 236はSK17-2 出土遺物。口縁部計測法で366.5個体の遺物が出土しており，うち98.7%が土師器。なかでも赤褐色の皿A I（I 166～I 189）と皿A II（I 190～I 205）があわせて322.9個体と主体を占め，灰白色の碗（I 206～I 218）26個体と，同じ灰白色の皿や高杯類が若干ともなう。赤褐色の皿では，1段撫で面取り手法D₅類・D₆類がおよそ8割を占めるが，器壁の薄い1段撫で素縁手法E₁類（I 187～I 189・I 202～I 205）も2割程度存在している。このほかには，東播系の須恵器すり鉢（I 230・I 231），瓦器の鍋や盤（I 233～I 236）などがある。I 232は瓦器の蓋状製品。頂部に焼成前の穿孔があるが，用途は不明である。

I 237～I 240はSK15 出土遺物。I 237は，完形で伏せて埋納されていた陶器すり鉢。口縁端部は外傾する面をもち，上方に僅かに肥厚する。赤褐色の堅牢な焼成で，内面に7条の櫛描線による放射状おろし目を施す。器形やおろし目の特徴から，備前焼Ⅲ期（14世紀前葉）の製品に比定される〔間壁91〕。I 238～I 240は，埋土中から出土した土師器皿A IIで，いずれもE₁類であり，すり鉢の年代観と矛盾しない。

室町時代の遺物（I 241～I 400） 15世紀前葉ごろの土器溜 SK78，井戸 SE24 出土遺物を呈示する。

I 241～I 319はSK78 出土遺物。口縁部計測法で768.2個体の遺物が出土しており，うち土師器皿・碗類が88.5%を占める。それ以外では，瓦器の鍋・羽釜類のほか，東播系の須恵器，灰釉系陶器やその系譜を引く古瀬戸の各器種が含まれるなど多種類にわたるため，

他の遺構に較べると、相対的に土師器の占める割合が低下する。土師器では、赤褐色の皿や（I 241～I 248・I 268～I 295・I 305～I 310）、灰白色の椀・皿類（I 249～I 267・I 296～I 304）がある。このなかでは、超大型の皿（I 241～I 248）が19.7個体と一定量含まれている点が注目される。同種の土器は、143地点（AN20区）での14世紀中葉の井戸SE2から出土しており、賀茂別雷神社（上賀茂社）で使用される神饌の容器オオヤツカサ土器と酷似している〔五十川86〕。このほか赤褐色の皿では、小型の皿AⅡ（I 281～I 295）が411.5個体と全体の半数以上を占め、大型の皿AⅠ（I 268～I 280）も162.9個体を数える。総じて薄手の粗雑なつくりで、1段撫で素縁手法E₄類が主体となるが、I 293～I 295の小皿は厚手のしっかりとしたつくりで系譜が異なる。またI 305～I 307は径6cm未満の超小型品で、厚手で深い丸底を呈する特異品。I 308～I 310は薄手で粗雑なつくりの受皿。灰白色の系統の土師器では、大型の皿A（I 249～I 267）が58.3個体を数える。法量に11～18cmの幅があり、桃白色を呈することを特徴とする。口縁部が外側に直線的に開く器形で、端部が短く外反するF₂類とF₃類がほぼ等量ずつある。I 296～I 304の小型の椀AⅡは、いわゆる凹み底小椀で、19.7個体と多くはない。I 312・I 313は灰釉系陶器。薄い黄緑色の釉がかかるいわゆる古瀬戸である。I 314～I 319は瓦器。うちI 317の羽釜は小型の特異なもので、器壁は厚く、胴部下半の外表面は粗く手持ち篋削りされているとともに、使用にともなう煤の付着が著しい。I 319は、いわゆる奈良火鉢の口縁から胴部。肩部に連続する方形のスタンプ文を施す。

I 320～I 400はSE24出土遺物。口縁部計測法で160.5個体の遺物が出土している。うち土師器の皿・椀類が97.7%を占め、SK78よりも比率が高くなるが、内容的にはほぼ同じといえる。土師器では、赤褐色系が主体を占め、超大型の皿（I 320～I 326）を一定量含むほか、大型の皿AⅠ（I 344～I 360）、小型の皿AⅡ（I 361～I 380）が中心となり、別系譜とみられるI 379・I 380を除くとほとんどがE₄類である。灰白色系では、法量的に幅のある大型の皿（I 327～I 343）、小型の凹み底小椀（I 381～I 393）がある。I 395は灰釉系陶器の花瓶。黒色の天目で、胴部には花文とみられる装飾がある。I 396は灰釉系陶器で、鍋の把手部分。黄緑色の釉のかかる、いわゆる古瀬戸。I 397～I 400は瓦器。I 397・I 398の鍋は、口縁が短く鐔状に外折し、胴部から底部へ稜をもたずに移行する。I 399・I 400の羽釜は、鐔より上部の口縁が長く伸びる。いずれも中世後半の器形として典型的な特徴を備えていると言えよう。

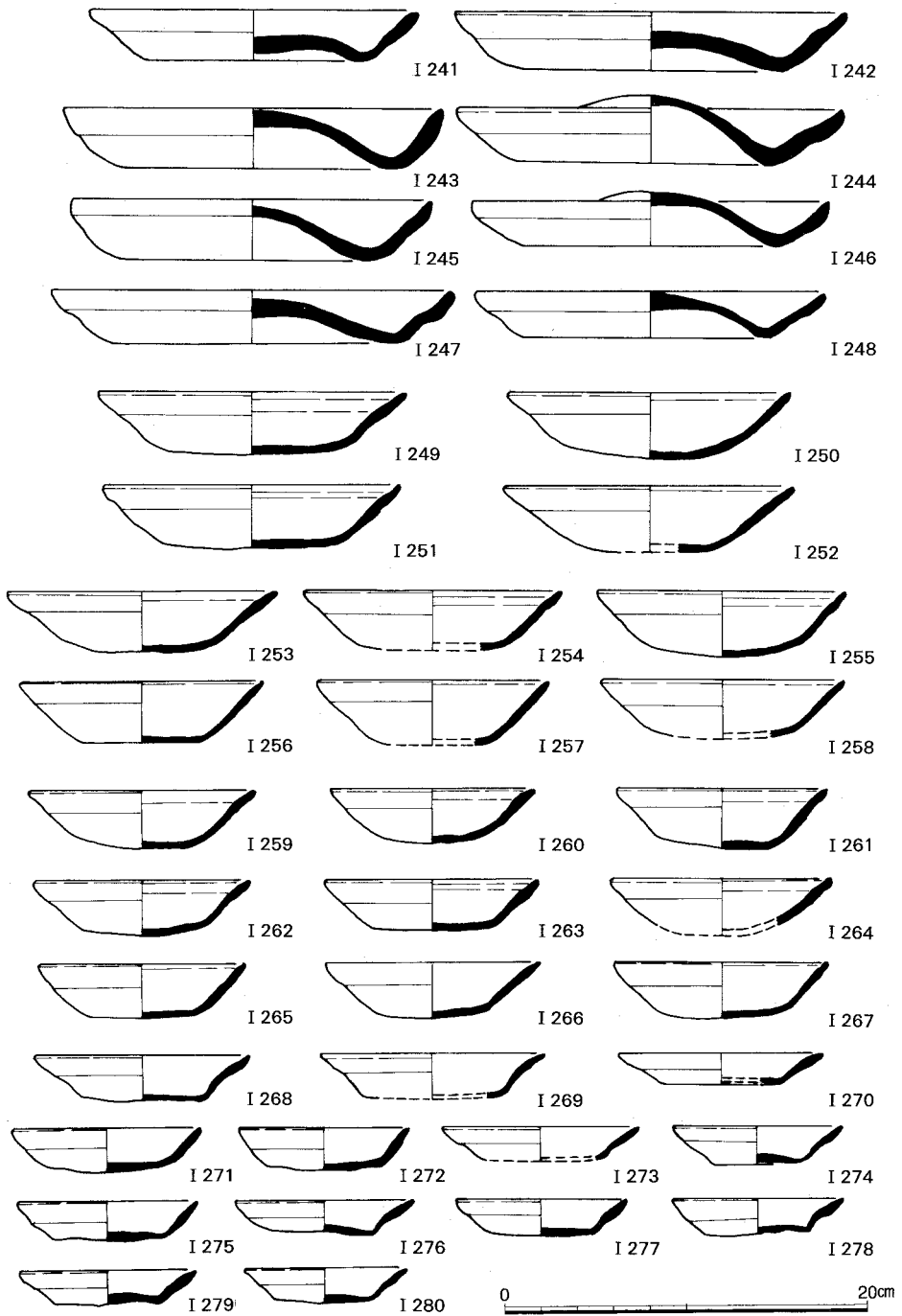


図22 SK78 出土遺物(1) (I 241～I 280 土師器)

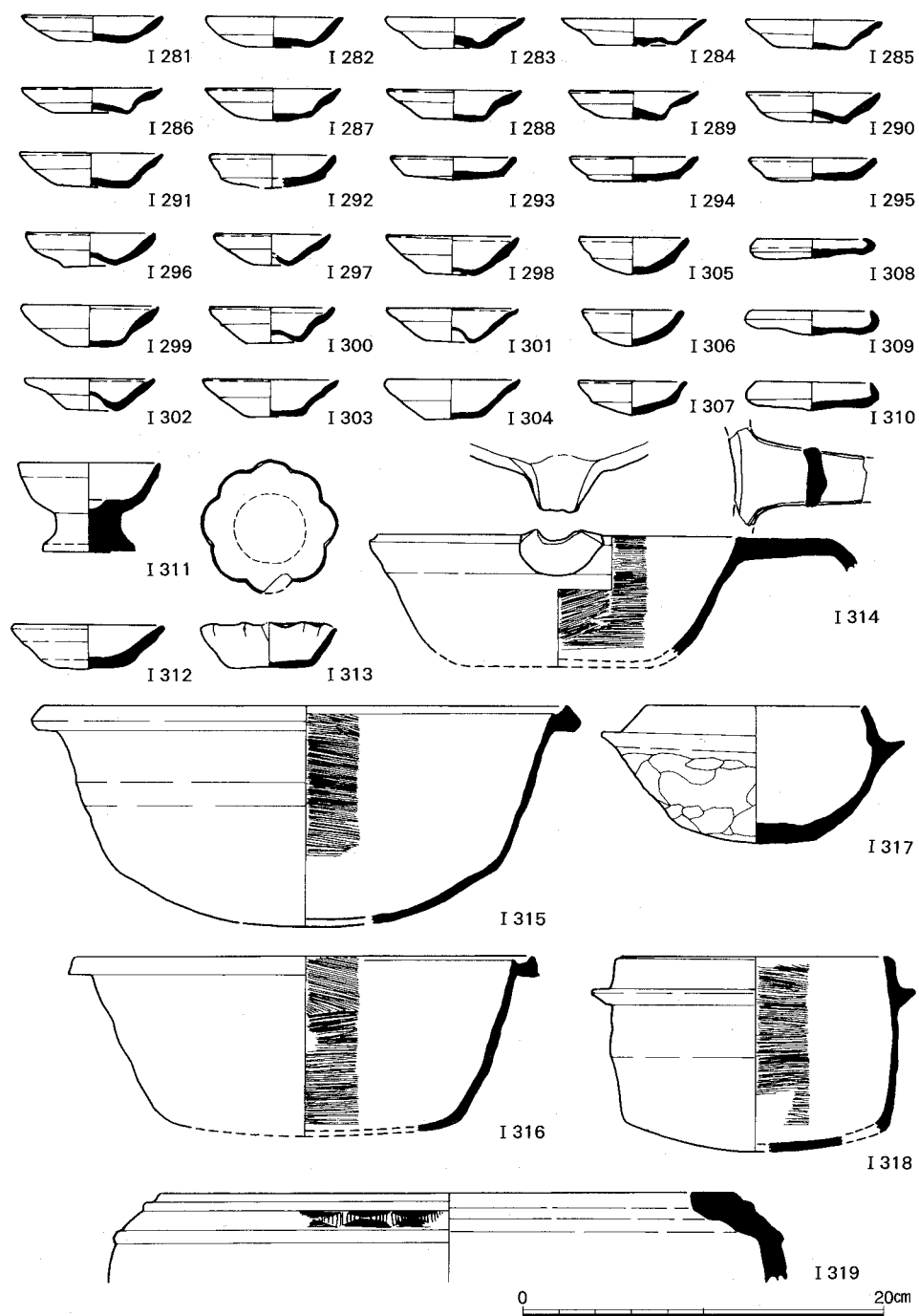


図23 SK78出土遺物(2) (I 281~I 310土師器, I 311~I 313灰釉系陶器, I 314~I 319瓦器)

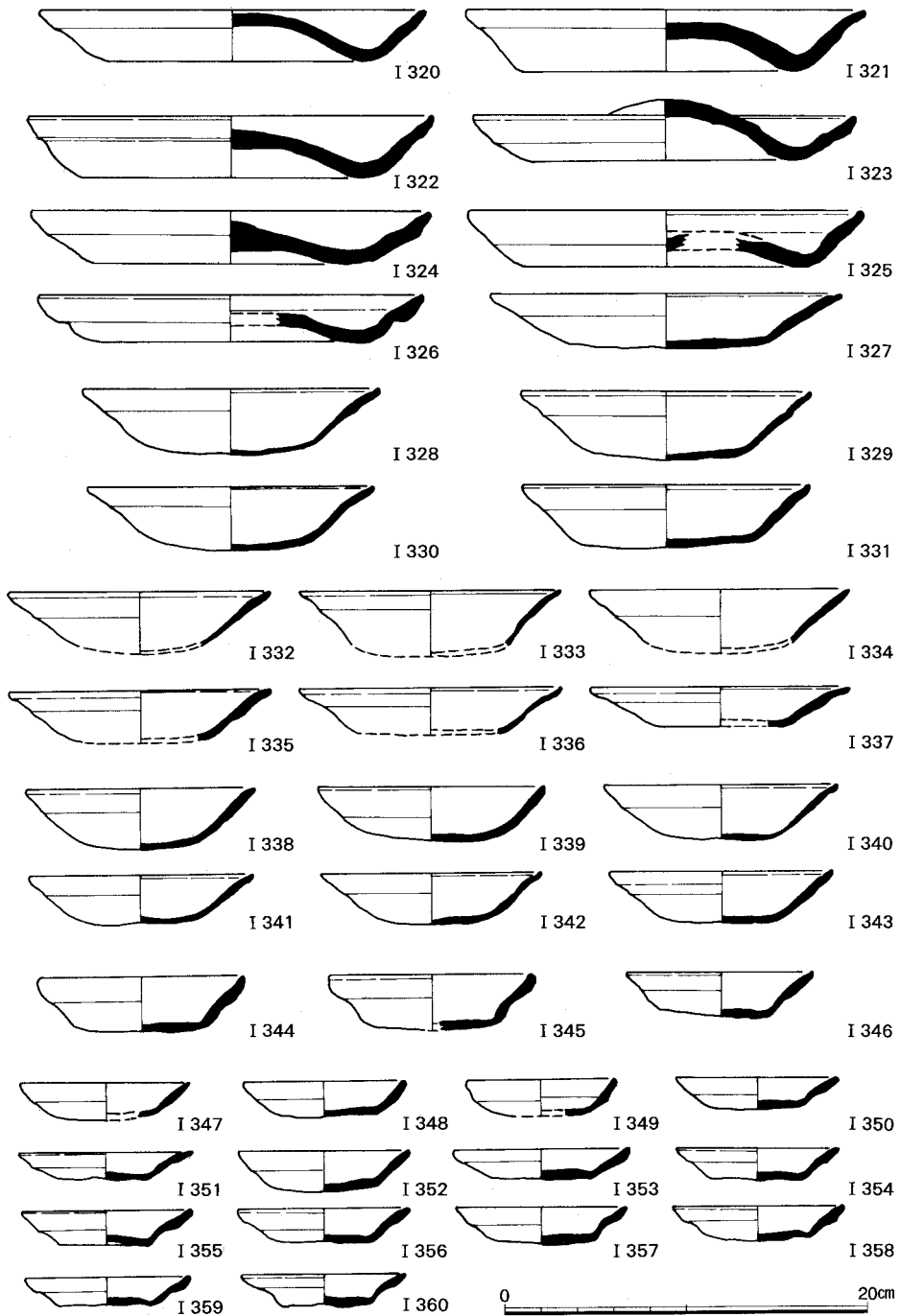


図24 SE24 出土遺物(1) (I 320~I 360土師器)

遺 物

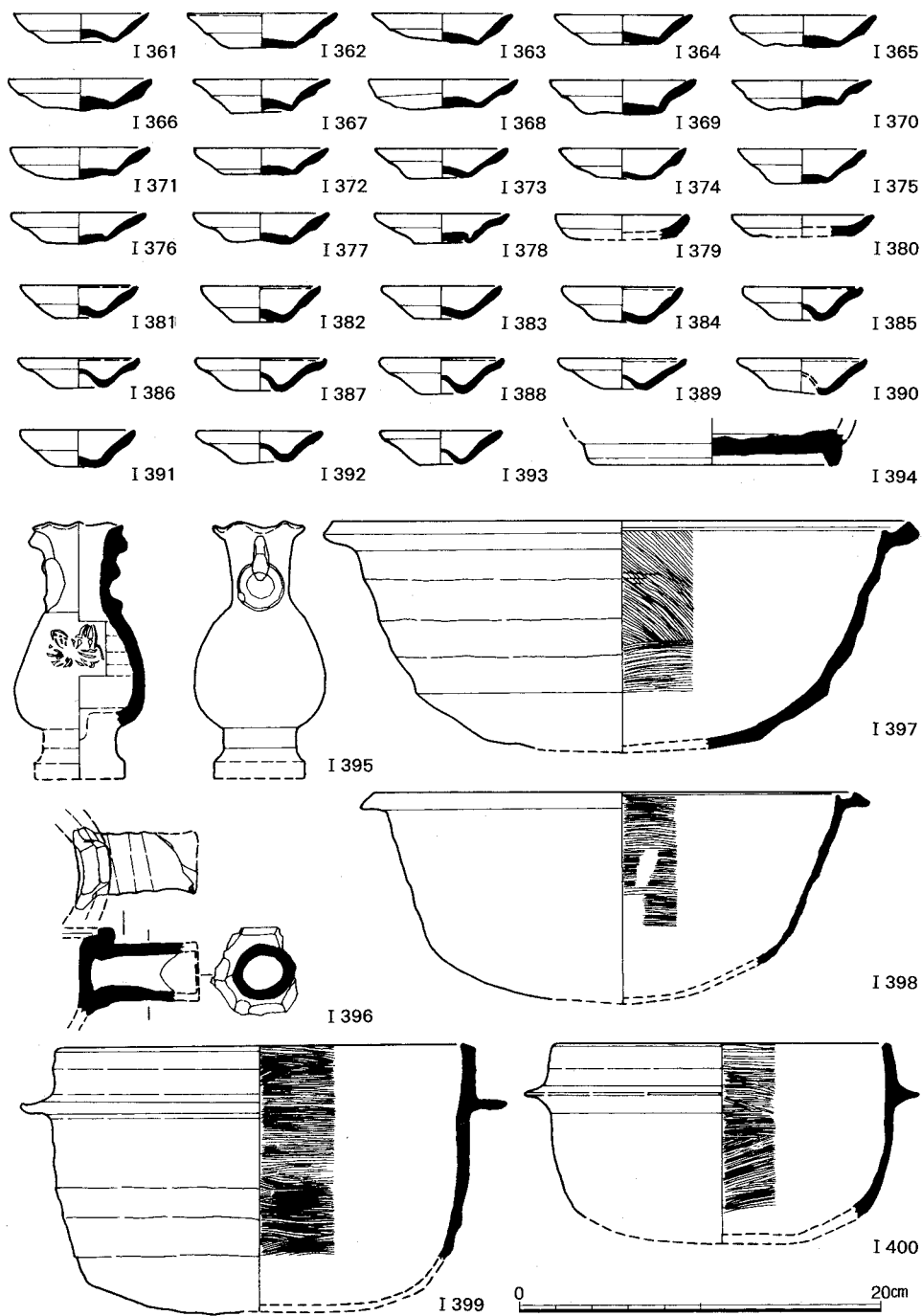


図25 SE24出土遺物(2) (I 361~ I 394土師器, I 395・I 396灰釉系陶器, I 397~ I 400瓦器)

5 小 結

今回の調査成果はきわめて多岐にわたっている。あくまで暫定的なものであるが、調査成果の意義と課題をここで簡潔にまとめておくことにしたい。

縄文・弥生時代の遺跡 洪水砂に覆われてほぼ完全に遺存していた弥生時代前期の水田遺構と周辺の微地形を明らかにできたことが、最大の成果である。地形環境を巧みに活かした完成度の高い小区画水田造成技術のありようを、当時の姿をとどめた水田遺構から、きわめて具体的に知ることが出来た。一方で、明らかに特徴の異なる北半水田と南半水田が存在する理由、北半水田面に見られる地表面の凹凸の意味、水田として機能した時期の上限など、残された課題も多い。また、水田は調査区外に及んでおり、水利施設などの関連遺構が存在している可能性も高いため、今後の調査にあたっては十分な配慮が望まれよう。このほか、まとまって出土している縄文時代後期～弥生時代前期の土器資料は、従来北部構内（北白川追分町遺跡）の資料を中心としてきた当該時期の編年研究を補い、かつ、ひろく比叡山西南麓の先史時代遺跡群の動態を検討する上でも、重要な情報を提供している。縄文時代から弥生時代へと継続して活動の場となっている比叡山西南麓において、水稻農耕の受容がどのような背景をもち、また変化をもたらしたのかを、遺跡群の詳細な動態から明らかにすることも、今後の課題となろう。

古墳時代の遺跡 今回の調査では、調査区西辺で、かなり破壊された5世紀末～6世紀の方形墳1基のみしか検出されなかったが、北側のAP22区の成果とあわせると、この時期の方形墳は総計6基となった。一帯での遺物の出土状況から、未発見の古墳が存在している可能性も高く、所在地名をとって「吉田二本松古墳群」と仮称することにしたい。また今回の調査では、形象埴輪の破片がわずかながら出土しており、埴輪をともなう古墳の存在が示唆された。古墳群の性格を考える上で重要な知見であるとともに、実態の不明な鴨東における古墳時代の様相を探る上でも、貴重な成果が得られたといえよう。

奈良時代の遺跡 今回は井戸や掘立柱建物、方形土坑群など多くの遺構と、比較的まとまった遺物が出土している。111地点（AP22区）の掘立柱建物1棟とあわせ、調査区一帯が、8世紀中葉ごろの活動の場となっていたことがあらためて確認された。同時期の資料は、約300m北東にある本部構内AT27区の竪穴住居跡SB1・SB2からまとまって出土している〔五十川81〕。今回と一連の遺跡として捉え得るのか、別の単位を想定すべきか、現状では判断しがたいけれども、出土遺物の点では、鍋を含む器種組成や製塩土器の出土といった共通点が多い。とりわけ、都城以外では出土することが稀な製塩土器がと

もに多く出土している点や、墨書土器が含まれている点は、活動の主体となった集団や遺跡の性格を考えるうえで注意されよう。

平安時代の遺跡 9～10世紀頃の梵鐘鑄造土坑は、今回のSX1～SX4の発見により、AP22区のものとおわせて総計6基に及ぶことになった。鑄造関連遺跡として大規模なものであることは間違いなく、その経営主体や作業形態など、遺跡の性格の解明が問題となろう。梵鐘鑄造にかかわる遺構や遺物は、全国で40以上の遺跡で確認されているが、古代のものとしては、鑄造土坑がひとつの遺跡で2基を越えるものはみられない。大型鑄物の生産にあたっては、鑄造工人在寺院などの需要者の近辺に出向いて仮設の作業場を設け鑄造をおこなう「出吹き」の形態をとることがあり、近接して寺院が存在して梵鐘の供給先を容易に推定することが出来る場合が多い。しかし、今回の調査区周辺では、6基もの鑄造土坑が並びながら、同時代の寺院が近辺に存在した痕跡は現在のところ無く、出吹きによるものとは考えにくい。平安京やその周辺の寺院などの広範な需要に応じる工房であった可能性が高く、類例のない貴重な資料を提供していると言えよう。調査区内ではこのほかに、近い時期の遺構として、井戸、土取りや砂取りにともなう不定形土坑、小規模な土器溜や瓦溜などが見つかっているが、梵鐘鑄造土坑との関連性は、土取り穴に若干想定されるほかはまったく不明である。工房としての空間の復元と、それを活かした保存修景も今後の課題となろう。

鎌倉・室町時代の遺跡 東西に長い調査区で、南北方向の溝をおおむね境として遺跡の性格が大きく異なることが判明した。調査区中央のSD6とSD20に挟まれて遺構の空白地帯があり、その東側は14～15世紀代の白色砂の採取遺構、その西側は13～14世紀代の墓壇や土器溜、さらにその西のSD5周辺から西方は、柱穴が密集し、13～14世紀代を中心として遺構相互の切り合いが著しい。このように、ピークとなる時期はやや違えながらも、西から順に、居住を中心とする空間、墓域や祭祀にかかわる空間、非利用空間、砂の採取など生産活動の空間が並んでいることがわかり、中世における調査区一帯の土地の利用状況や景観の変遷を知るうえで、重要な知見が得られたといえよう。

西側の医学部構内も含めたこの地一帯の中世遺構の造営者については、かねてより藤原北家勧修寺流の人々を中心に想定されてきた。しかし、残念ながら今回も、それを明確に裏付ける直接の資料は得られなかった。今回の調査区は、北側のAP22区に較べると、邸宅関連の遺構は遺存が悪く、規模も小さい傾向にある。また墓壇とみられる遺構の密度も粗くなっており、やや周辺的な様相を呈してきている。すなわちこれらに関しては、調査

区の北～西方が中心的な空間と想定できよう。一方、調査区東部の南半を中心として15世紀代に下る遺構が検出されており、調査地点の南側一帯では、こうした時期を中心とする遺跡が展開している可能性があらたに生じてきたといえる。14世紀中葉における勧修寺家の氏長者吉田定房の吉野退転から16世紀の文献記事にあらわれる吉田構〔浜崎83〕の構築に至るまでの調査区一帯の変遷については、現在のところ不明な点が多いが、今後徐々に明らかになってくるものと予想される。

なお、今回は、上述の中世遺構を中心として多量の一括出土遺物があり、12～15世紀代の土師器を中心とした中世土器編年の再検討を可能にするデータを得ている。これら全容の呈示と分析は、報告書においておこなうことにしたい。

江戸時代の遺跡 ほぼ全面が農耕関連の柵列遺構で覆われ、路面と野壺の存在から、大根やかぶらなどの商品作物の生産を中心とした、多肥性の畑作がおこなわれていたと想定できる。15世紀中葉以降の遺構・遺物が極端に減少することより、おそらく応仁の乱による荒廃を契機として農地となり、近世を通じてのどかな景観へと変貌していったのであろう。上述したように、16世紀代になると吉田の構に関する文献記事が多数みられるようになるが、こうした時期以降の集落は、近世の吉田社家町、すなわち現在の吉田二本松町を中心とする住宅地帯と重複しているものと考えられよう。

今回の発掘調査は、五十川伸矢と伊藤淳史が担当し、資料整理は、主として古墳時代以降を五十川が、縄文・弥生時代を伊藤が担当しておこなっている。末筆ながら、調査と整理を通じて多数にわたる関係各位に多大なる御助力をいただいたことを御礼申し上げるとともに、今後ひきつづいての御協力をお願い申しあげる次第である。

第3章 京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査

古賀秀策

1 調査の概要

調査地区は京都大学本部構内のほぼ中央に位置し、吉田山西麓の北白川扇状地の扇央にあたる（図版1-230・241）。

ここに文学部校舎の新営が予定されたため、これまでの周辺地区の調査成果を勘案して、新営予定地内の発掘調査を実施した。発掘調査はAX25区（230地点）の1314m²を1995年3月7日から6月7日まで、AX26区（241地点）の627m²を1996年1月22日から3月15日までにわたっておこなった。2つの調査区は東西に隣接しているため、前者を西調査区、後者を東調査区と呼び、この章であわせて報告する。

本部構内ではこれまでの調査で、弥生時代前期の流路（219地点）、奈良時代の竪穴住居（75地点）、中世の建物（214地点）・土壙墓（75地点）・土器溜（90・110地点）・砂取穴（214地点）・濠（214地点）・白川道（168地点）、近世の白川道（57・90・181地点）などが見つかっている。絵図などからは幕末期に尾張藩邸の存在したことが知られている。また、1993年度実施の本調査区の西に隣接する地区（218地点）の調査では、縄文時代後期の多量の遺物を発見したほか、中世の井戸・集石土坑・集石・溝などの遺構や近代の建物跡を検出している。したがって、今回の調査も縄文時代から近代にいたる遺跡の存在が予想されていた。

調査の結果、西調査区の北側と東調査区の多くの部分を前身建物基礎によって大きく破壊されていたものの、古墳時代の土坑、中世の溝・土坑・土器溜や近世の野壺、近代の井戸・建物跡などの遺構を発見した。出土した遺物は縄文時代から近世にわたり、西調査区で整理箱40箱、東調査区で14箱をかぞえた。

2 層 位

現地表面の標高は58.3～59.6mをはかり、北東から南西へなだらかに傾斜する。基本的な堆積は、上から順に表土（第1層）、灰褐色土（第2層）、茶褐色土（第3層）、黄色砂（第5層）、暗褐色土（第6層）である。

灰褐色土は近世の遺物包含層で、後世の削平を免れた西調査区前身建物の中庭部分のみ薄く残っていた。茶褐色土は古墳時代から中世の遺物包含層で、上層から13世紀前半を

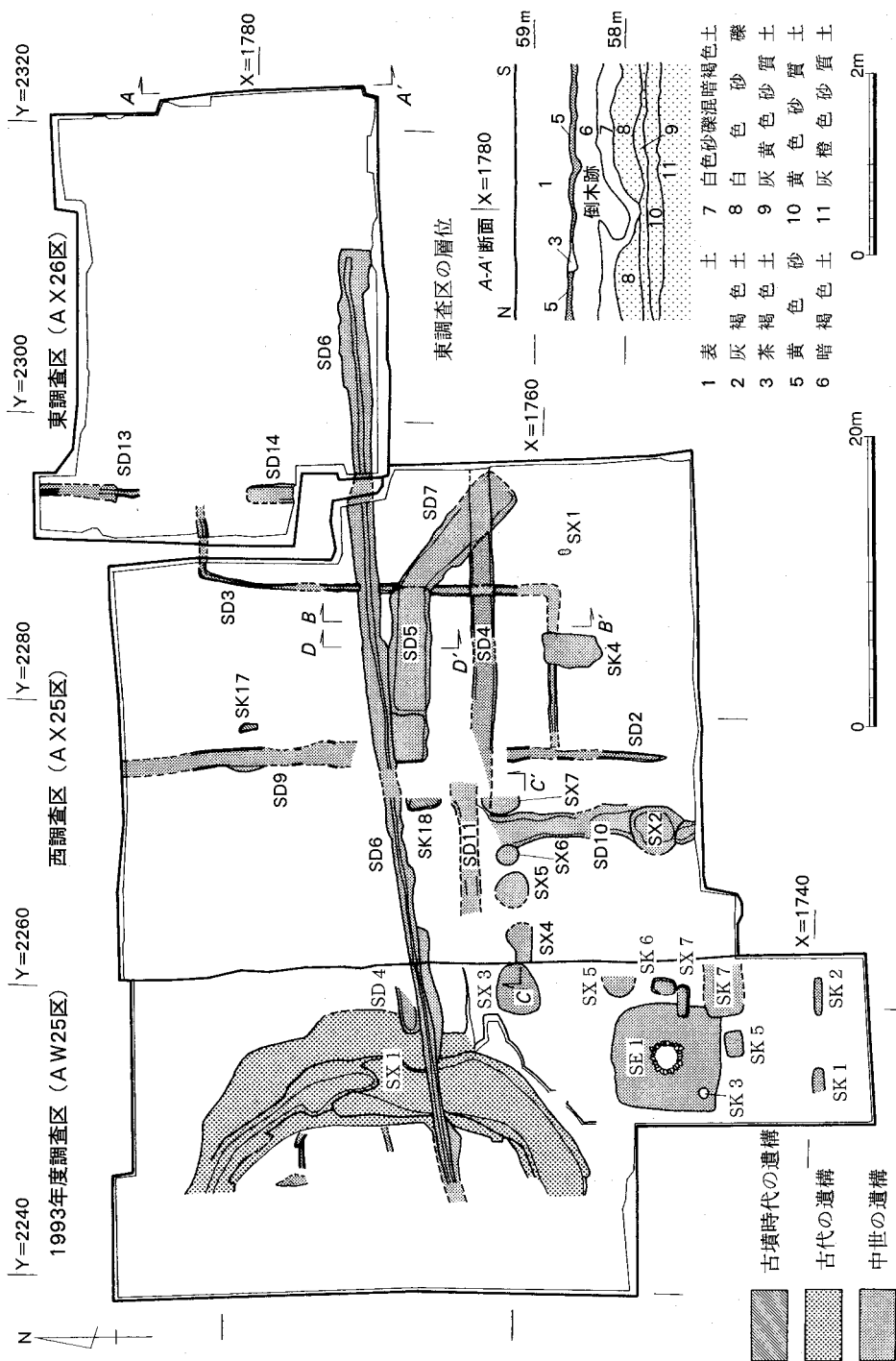


図26 古墳時代～中世の遺構 (縮尺1/500) と東調査区の層位 (縮尺1/80)

中心とした遺物が出土し、下層からは7世紀後葉～9世紀の遺物が出土する。

黄色砂は弥生前期末から中期初頭の洪水層で、これまでの周辺地域の調査で京都大学吉田キャンパスの一帯に広く堆積していることが明らかになっている。本調査区での黄色砂の堆積は薄く6～10cmほどで、堆積の場所も西調査区の西側の一部と北辺、東調査区の東辺などの周辺部にかぎられており、調査区中央部には認められなかった。

暗褐色土は西に隣接する218地点で縄文後期を中心とする土器が多量に発見された層に連続する層であるが、本調査区での出土量はわずかであった。

第8層以下は無遺物層で、砂層と砂礫層との互層をなす。

3 先史時代の遺跡

(1) 遺 構 (図版12-2, 図27)

先史時代の遺構には、自然流路SR1と倒木跡がある。

自然流路SR1は暗褐色土より下の層位確認のための深掘り断面で発見した。X=1760, Y=2270付近で、幅約3m深さは約1mをはかる。流れの方向は砂粒の向きから北から南とわかるが、時期は不明である。

倒木跡は、暗褐色土の下面で、東西調査区の全面で多数検出した。平面は径約1～2mの不整円形で、上下の土層が一部逆転していることが特徴である。

(2) 遺 物 (図版13, 図28・29)

暗褐色土層中からは縄文後期を中心とした70点の土器を取り上げた。また、上層の歴史時代の土層中にも縄文土器と石器1点が含まれていた。

隣接する調査区218地点では、縄文後期を中心とした土器が1200点近く出土した。出土地点は北西隅部に集中しており、ここから南あるいは東にうつるにしたがい密度は低くなる傾向を示すことから、縄文時代の遺跡はここから北側あるいは西側へ広がるとされている〔千葉ほか97〕。今回出土した縄文土器は、同じ後期を中心としたものにまとまるが、出土点数は少なく、出土の密度も西調査区から東調査区にかけて低くなり、遺跡の中心が北ないしは西にあるという推測を肯定する結果となった。

暗褐色土出土土器 (Ⅱ1～Ⅱ18) Ⅱ1とⅡ2は縄文中期の資料である。Ⅱ1は船元Ⅰ式深鉢の波状口縁の頂部。口縁は外面を肥厚させて環状の口唇を形づくり、外端に刻目をいれる。外面は隆帯上に押引爪形文を刻み、内面は口縁部の直下に刻目をもつ渦状隆帯を貼りつける。Ⅱ2は里木Ⅱ式深鉢の胴部。撚糸文の地文をもつ。

先史時代の遺跡

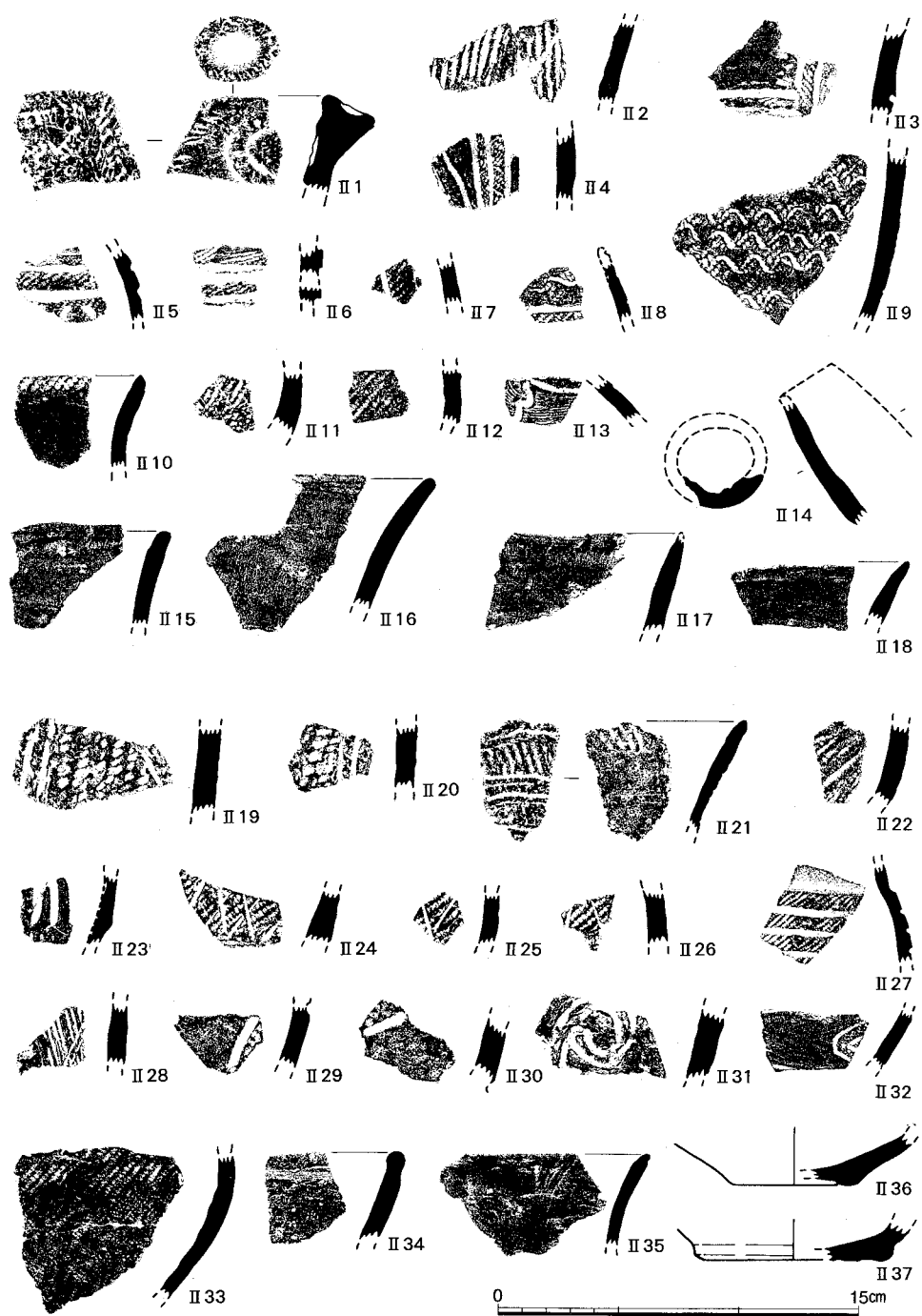


図28 暗褐色土出土土器 (II 1 ~ II 18縄文土器), 上層遺構出土土器 (II 19 ~ II 37縄文土器) 縮尺1/3

Ⅱ 3～Ⅱ 18は後期前葉～中葉の縄文土器である。Ⅱ 3は深鉢の胴部。内外面を丁寧に篋削りしたあとに、縦・横の沈線を加え、沈線間に縄文を充填する。沈線は縦が横に先行する。Ⅱ 4は深鉢の胴部。3条の沈線に2段左撚縄文を充填する。Ⅱ 5は深鉢の胴部の上部。横方向の2条の沈線のすぐ下に沈線と同じ原形で山形列点文を刻み、2段左撚縄文を加える。Ⅱ 6とⅡ 7は深鉢の胴部小片。いずれも沈線をほどこしたあと、2段左撚縄文を加える。Ⅱ 8とⅡ 9は同一個体で、結節縄文を地文とする深鉢である。Ⅱ 8は内湾する口縁部の直下の部分とおもわれ、横走る2条の沈線間に1帯の結節縄文をほどこす。Ⅱ 9は胴部下部で、横方向に上から1帯、3帯、1帯の結節縄文をほどこす。Ⅱ 10は弱く外反する深鉢口縁部。外面端部に2段左撚の縄文をほどこす。Ⅱ 11とⅡ 12は縄文地の土器。Ⅱ 13は横方向の条線文の地文に、横方向の1条の沈線と縦方向で部分的に区切る沈線を加えた土器片。文様から注口土器の注口脇の体部と推測する。Ⅱ 14は注口土器の注口部下面。先がややすばまる外径約4 cmの注口に復元できよう。外面は縦方向に磨きをほどこし、内面は縦方向の溝状に撫で調整を加える。Ⅱ 15～Ⅱ 18は無文の深鉢の口縁部。いずれもやや外反する形状を示す。

上層遺構出土土器（Ⅱ 19～Ⅱ 37） Ⅱ 19～Ⅱ 22は中期の縄文土器である。Ⅱ 19とⅡ 20は船元Ⅲ式の同一個体の土器。いずれも縄文地に半截竹管で平行沈線を描く。沈線の間隔は約5 mmをはかる。SD 7から出土した。Ⅱ 21とⅡ 22は里木Ⅱ式の土器で、SK31から出土した。Ⅱ 21は深鉢の口縁部。外面は撚糸文を地文とし半截竹管により平行沈線をほどこすが、沈線の間隔は約3 mmと狭い。平行沈線は口縁直下が波状文であるほかは直線文である。内面にも撚糸文をほどこす。Ⅱ 22は地文が撚糸文である深鉢の胴部である。

後期の縄文土器としてはⅡ 23～Ⅱ 37がある。Ⅱ 23は縁帯文深鉢の口縁。稜より上に縦弧線をえがき、下に縦沈線をほどこす。SK30から出土した。Ⅱ 24～Ⅱ 26は同一個体とおもわれる土器。地文の縄文の上に斜格子沈線を加える。それぞれSK30、灰褐色土、SX 1から出土した。Ⅱ 27は横走る多条沈線をほどこし、沈線間に縄文を充填した土器。攪乱からの採集。Ⅱ 28は半截竹管により斜位条線を密に引く。平行条線の間隔は約1.5 mmとせまい。SK18出土。Ⅱ 29とⅡ 30は同一個体とおもわれる深鉢胴部片。弧状沈線の区画内を縄文で充填する。SK 6とSK18の出土である。Ⅱ 31とⅡ 32はともに沈線渦文をもつ深鉢胴部下部で、SD 6と茶褐色土から出土した。Ⅱ 32は渦文内に縄文を充填する。Ⅱ 33は縄文地の深鉢胴部。SX 9出土。Ⅱ 34とⅡ 35は無文の深鉢口縁部で、SD 6から出土した。いずれも外面を削り、内面を撫でにより仕上げる。Ⅱ 36とⅡ 37は深鉢の底部でいずれも平底で

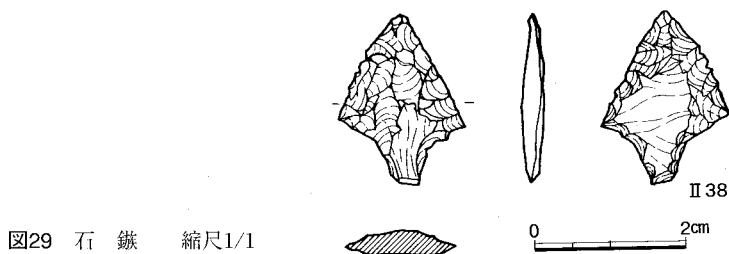


図29 石 鏃 縮尺1/1

ある。II 36は底面から外反しつつ立ち上がるが、II 37はほぼ90° に立ち上がりすぐに外側に開く形状を示す。表土と茶褐色土から採集した。

石 器 (II 38) 東調査区のSD 6出土の石鏃。サヌカイト製で、長さ2.2cm、重さは0.7 gをはかり、茎部先端を欠失する。形態からみて縄文晩期頃のものとおもわれる。

4 古墳時代～中世の遺跡

(1) 遺 構 (図26・30・31)

古墳時代の土坑 SK17 と SK18 は、西調査区の茶褐色土層中位で発見した土坑である。SK17は南側を SK18は東側を攪乱で切られているが、それぞれ幅60cm、長さ1.3m、深さ12cmと幅80cm、長さ2.2m、深さ28cmを検出した。隅丸長方形平面とみられる堀形のそれぞれ東端と西端からは、完形の須恵器蓋杯がそれぞれ1組と2組出土し、とくにSK17では杯身と杯蓋が重なって遺存していた。規模や遺物の出土状況から、墓であった可能性が高いと考えている。遺物から古墳時代終末期の7世紀前半ごろの遺構とおもわれる。

中世の溝群 SD 2～SD 7 と SD 9～SD11 およびSD13・SD14は暗褐色土上面で検出した溝である。埋土はいずれも上層の茶褐色土を中心としたもので、砂が混じるものもある。

SD 3は東調査区から西調査区東半にまたがり、クランク状に屈曲してはしる溝で、総延長約40mを検出した。東西端は攪乱に切られていて不明であるが、西端は中世の南北方向のSD 2以西には続かず、東端は中世のSD13とSD14を結ぶ位置付近で止まる。幅は約70cmと狭いが断面U字形のしっかりとした掘り込みで、深さは最大で43cmをはかる。底面には北から南にわずかに勾配がついているが、水流の跡は認められない。土師器皿を中心とした遺物が出土した。

SD 5とSD 7はSD 3を切って「く」字形に折れてはしる溝である。東西方向のSD 5が約45° 方向を振るSD 7におくれて掘られているが、埋土の状況や出土遺物などからは

は同時期のものとみてよい。ともに幅2.8mで深さは1mを越える断面逆台形状の大型の溝であるが、SD5の西側3分の1は底面が一段高く30cmほど浅くなっている。SD5西端とSD7東端は壁状にたちあがり、隅丸方形に収まる。SD5からは土師器のほか瓦器の椀・皿が出土し、SD7からは鉢形の土師器と瓦器鍋・羽釜がまとまって出土した。

SD4は溝SD3とSD7を切り、溝SD5と平行にはしる溝。西端は攪乱に切られて不明であり、東は発掘区外へと続いている。断面逆台形状で、幅約1.5m深さ約50cmをはかる。出土した遺物のうち、底部に糸切り痕をもつ大小の完形土師器が注目される。

SD6は東調査区から西調査区を横切り218地点にわたる、検出長60m余におよぼほぼまっすぐな溝。西端は攪乱に切られており不明。東はY=2310付近で止まるが、ここで屈曲して南に続く可能性もある。幅約2mで検出面からの深さは1.7mにもおよび、断面は鋭いV字形を示す。底面の標高は西にいくほど高く、東西端間で約50cmのレベル差をはかる。埋土からは土師器のほか瓦器の鍋や羽釜がまとまって出土し、瓦類も多量に出土した。

SD10とSD11は西調査区南西部で検出した溝。攪乱に多くを切られており規模は不明な点が多い。ともに幅約1.5mをはかるが、検出面からの深さは20～30cmと浅い。遺物は土師器皿が少量出土した。

SD2とSD9は、西調査区のそれぞれ南半と北半で検出した南北方向の溝である。両者は一つの直線上に位置するが、SD6とSD4間では検出がなく連続する溝ではない。SD9の北側は調査区外へと続き、SD2の南は後世の削平により不明である。SD9は断面U字形のしっかりとした掘り込みで、幅1.2m検出面からの深さ40cmをはかり、SD2は幅50cmで深さ20cmと浅い。ともに埋土から土師器を中心とした遺物が少量出土した。

SD13とSD14は東調査区西辺で検出した南北方向の溝である。ともにしっかりとした

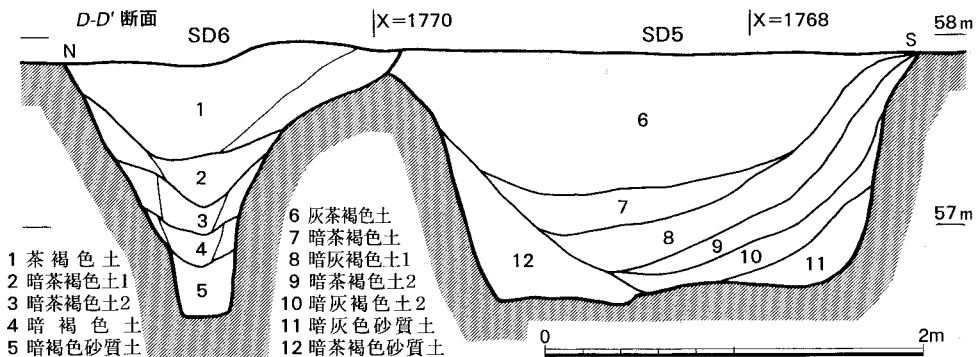


図30 SD5・SD6断面図 縮尺1/40

掘り込みの断面U字形の溝で、幅は1m深さはそれぞれ90cmと50cmをはかる。両溝は一つの直線上に位置し、南北端は調査区外へと延びるが、間は検出がなく途切れている。いずれも埋土からは土師器が少量出土した。

中世の土器溜 西調査区東南部のSX1のほかは、土器溜遺構は西調査区西南部に集中する。このうち溝SD10を切って掘り込むSX2は平面不整円形の掘形をもち、径3.5m検出面からの深さは40cmをはかる。埋土からは土師器皿の完形品が複数個出土した。祭祀に関する遺構とおもわれる。

そのほかの土器溜SX4～SX7はいずれもはっきりとした掘形をもたず、土師器の碗・皿を中心とした遺物がまぎらって出土するほか瓦類の出土も多い。またこのあたり一帯は茶褐色土層が周囲より一段低く落ち込んで堆積しているなかに密に遺物が包含されており、土器溜SX8として取りあげた。これらの遺構は隣接する218地点の土坑SX3やSX5と一連のものとおもわれるが、遺構の性格は不明である。

以上の土器溜遺構は、出土する遺物から13世紀後半の年代が与えられよう。

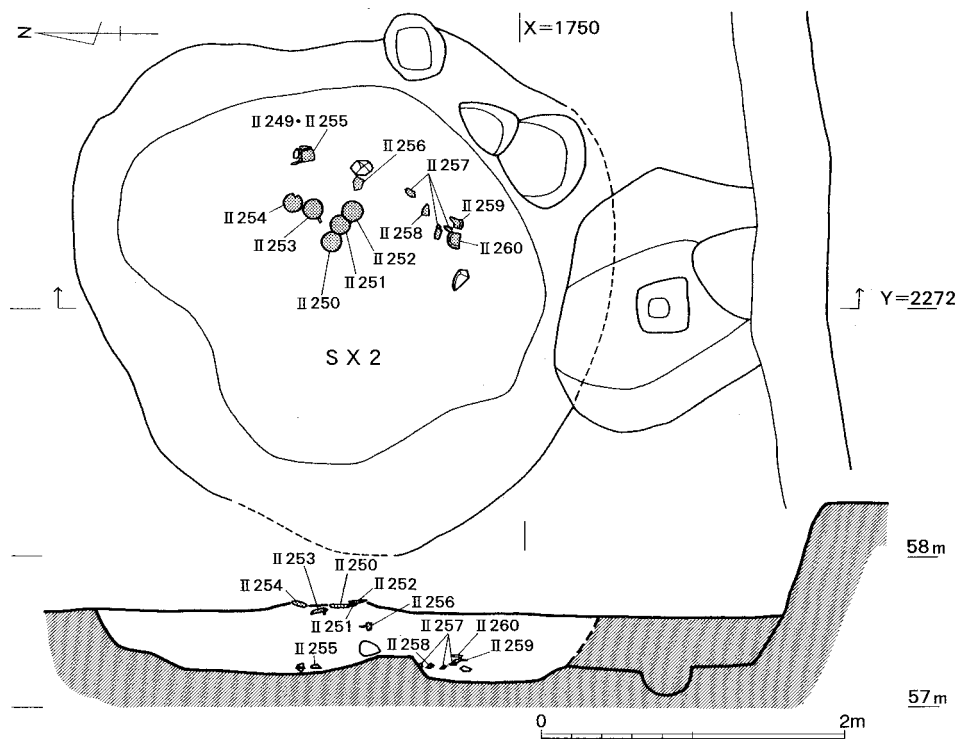


図31 土器溜 SX2 縮尺1/50

(2) 遺物 (図版15~20, 図32~43, 表1・2)

以下, 古代・中世の土器・陶磁器の基本的な分類は, 平城宮〔奈文研76〕や京都大学構内遺跡〔京大埋文研81a〕における分類を踏襲し, 遺物の年代観については『平安京提要』(1994年) および小森俊寛・上村憲章の編年〔小森・上村96〕を参考にした。比較的まとまった量の遺物が出土した遺構については, 口縁部が1/12以上残存している資料を選択し, 口縁部計測法により土器の種類別の比率と土師器の口縁部形態別の出土頻度とを算出し, 項末に付した(表1・2)。また, 遺物のうち瓦類に関しては次項でまとめて述べた。

古墳時代の遺物 (Ⅱ39~Ⅱ46) 古墳時代の遺物には土坑 SK17 と SK18 から出土した須恵器蓋杯のほか, 中世の遺構から出土した須恵器長頸壺がある。Ⅱ39~Ⅱ44は須恵器杯身と杯蓋。杯蓋は天井部外面に小ぶりの宝珠形つまみがつき, 内面のかえりは長く口縁端部より下方にのびる。杯Aの底部は篋削りしたあと未調整のままで, 口縁部はやや外反する。Ⅱ45とⅡ46は須恵器長頸壺。前者はかるく張った体部肩に1条, 頸部に2条2対の沈線をもち, 後者は頸部に2条1対の沈線をほどこす。いずれも口縁部はわずかに外反しつつまっすぐに立ち上がり, 口縁端部を丸く収める。内面には頸部と体部の接合の跡が明瞭に認められる。これらの遺物は TK209 から TK217 までのものであり〔田辺66〕, 7世紀前半の年代に収まるであろう。

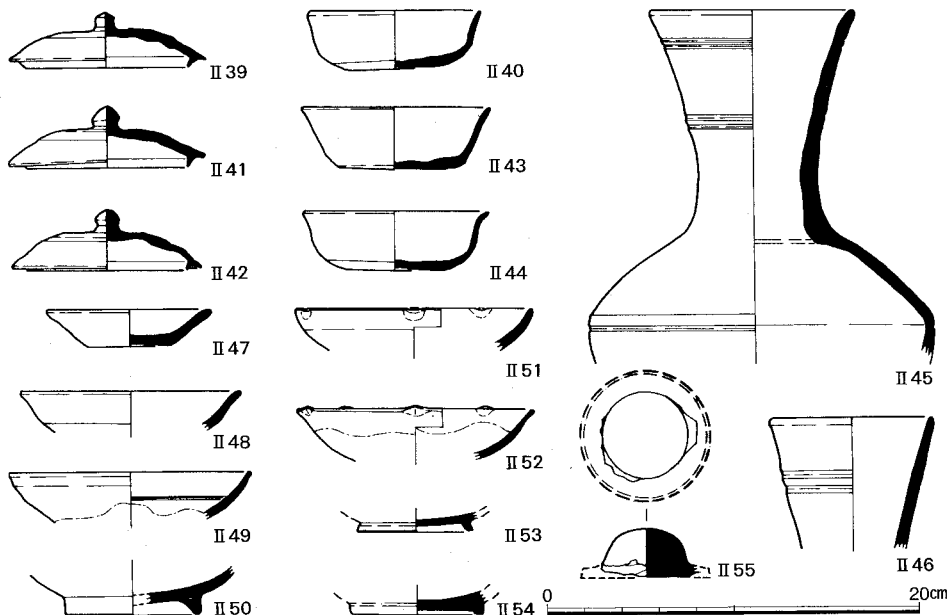


図32 SK17出土遺物 (Ⅱ39・Ⅱ40須恵器), SK18出土遺物 (Ⅱ41~Ⅱ44須恵器)
上層遺構出土物 (Ⅱ45・Ⅱ46須恵器, Ⅱ47~Ⅱ52灰釉陶器, Ⅱ53~Ⅱ55緑釉陶器)

古代の遺物（Ⅱ47～Ⅱ55） 掲示した古代の遺物は、中世遺構から出土したものである。Ⅱ47～Ⅱ52は灰釉陶器。Ⅱ47は小型の皿。底部外面には回転糸切り痕がのこり、釉は内面のみかかる。Ⅱ48とⅡ49は碗の口縁部。後者は口縁端部をつまんで外反させる。Ⅱ50は碗の底部で、断面三角形のしっかりした高台を貼りつける。Ⅱ51とⅡ52は輪花碗の口縁部。Ⅱ53とⅡ54は緑釉陶器の底部。前者の高台は外反気味に開き、高台内面の釉を省略する。後者は蛇の目高台を削りだし、釉は全面にかかる。いずれも釉調は淡黄緑色である。これらは10世紀ごろの資料であろう。

中世の溝SD9からは饅頭形の緑釉円塔（Ⅱ55）が出土した。鐔の大半を欠失し、伏鉢は扁平な半球状を示す。胎土は精良で軟質。表面は丁寧に調整されるが伏鉢下部に型作りを示す細かい布目痕が残る。全体に磨耗しておりわずかに残る釉は淡黄緑色を呈する。大治3（1128）年白川法皇が供養した18万余基の円塔に比定されるものである〔西田25〕。

SD3出土遺物（Ⅱ56～Ⅱ72） Ⅱ56～Ⅱ69は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ56～Ⅱ63が皿AⅡ，Ⅱ65～Ⅱ69は皿AⅠで、口径はそれぞれ10cmと14cmにピークがある。Ⅱ56・Ⅱ57・

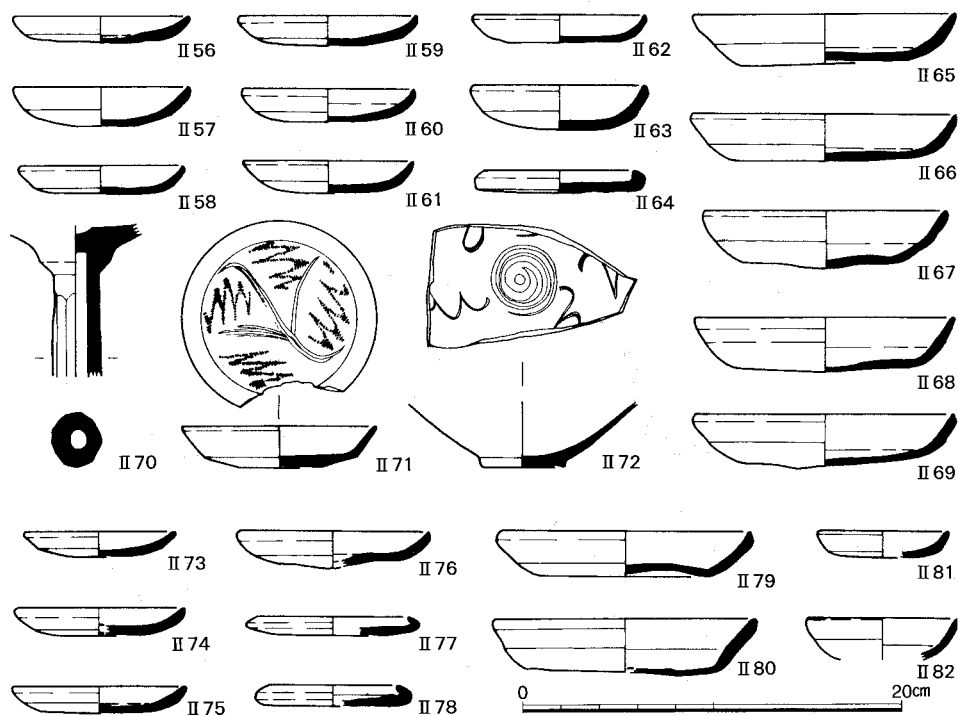


図33 SD3出土遺物（Ⅱ56～Ⅱ69土師器，Ⅱ70白色土器，Ⅱ71青磁，Ⅱ72青白磁），SK4出土遺物（Ⅱ73～Ⅱ82土師器）

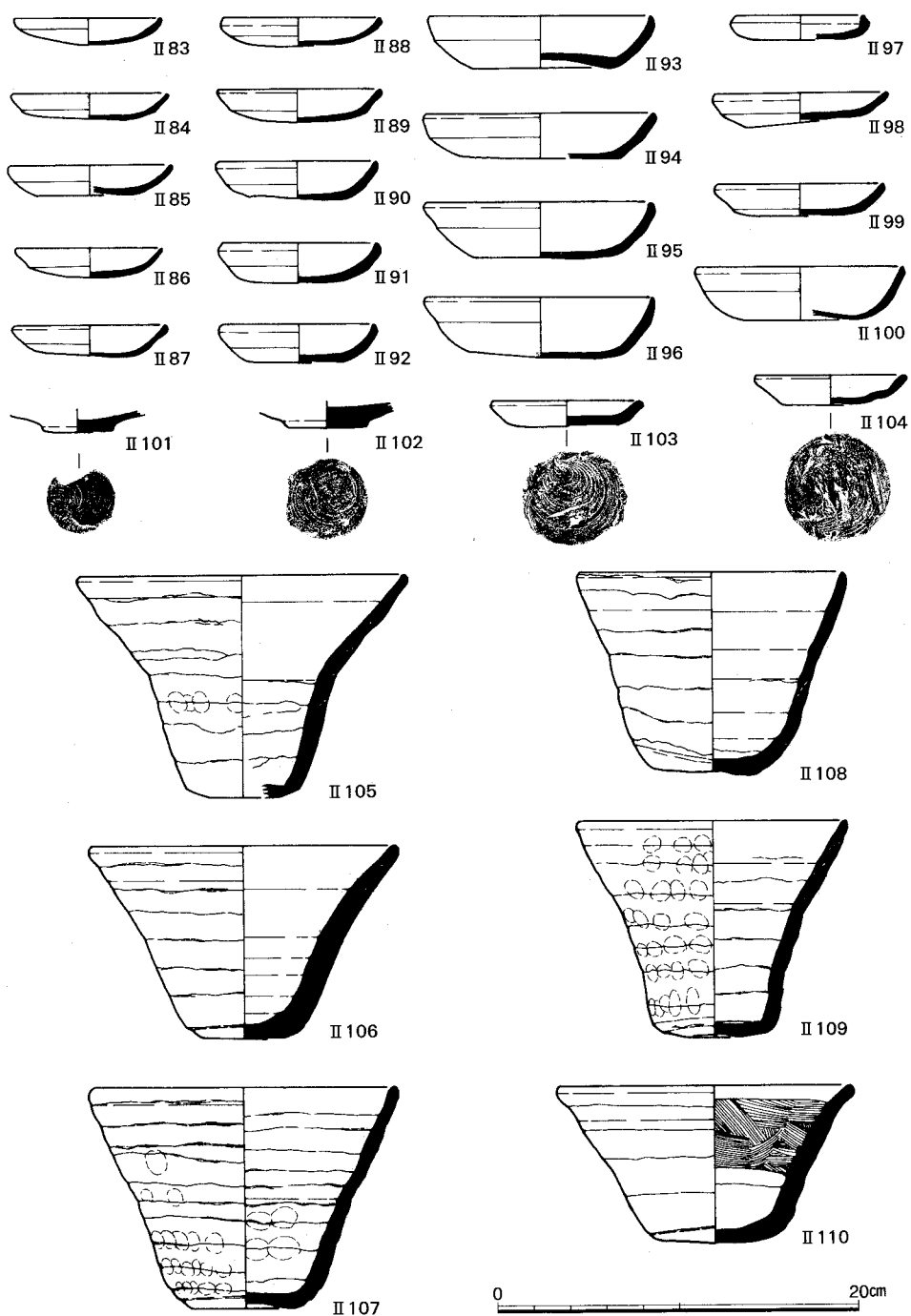


図34 SD 7 出土遺物(1) (II 83～II 110土師器)

古墳時代～中世の遺跡

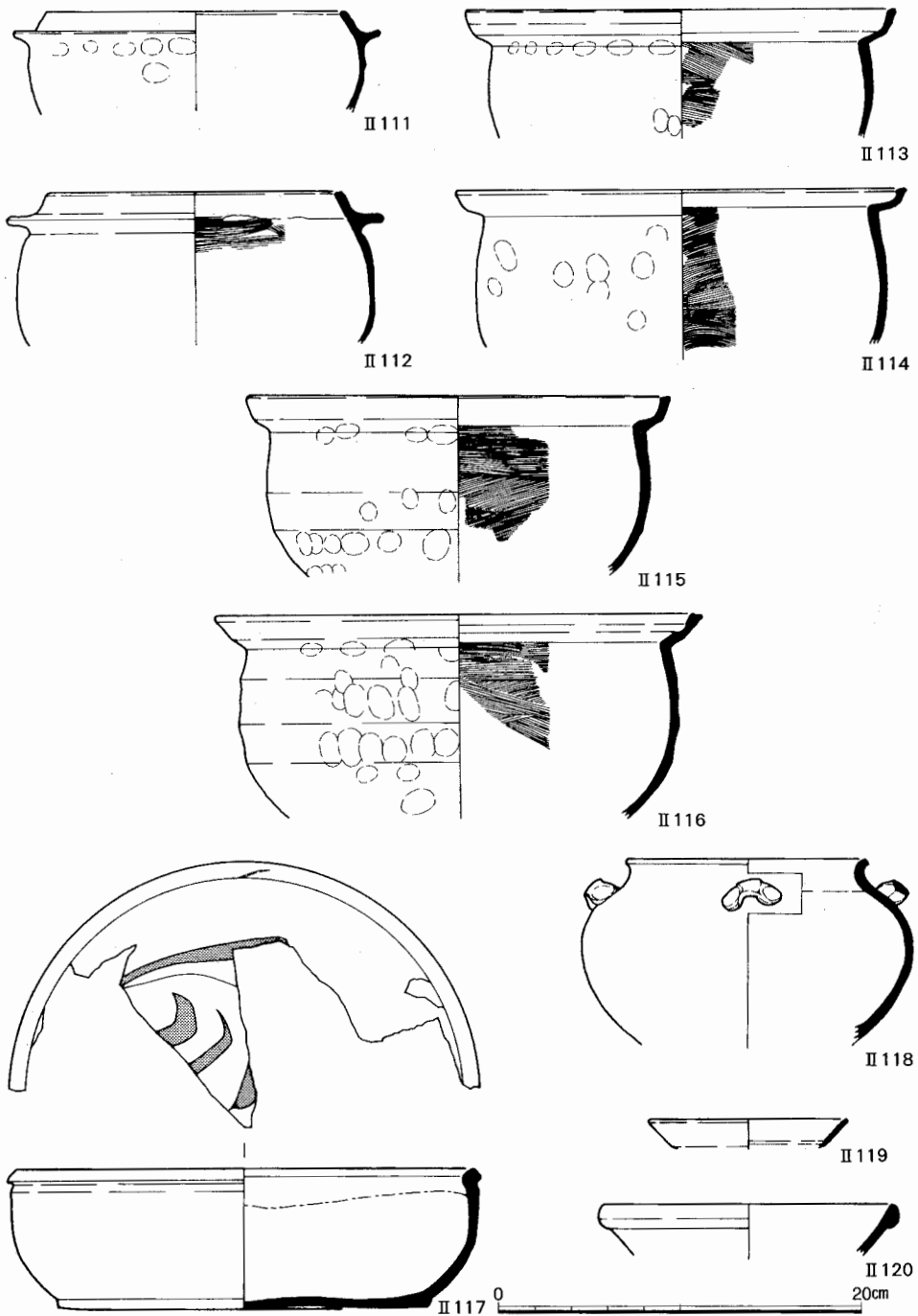


図35 SD 7 出土遺物(2) (II 111～II 116瓦器, II 117黄釉陶器, II 118褐釉陶器, II 119青磁, II 120白磁)

Ⅱ65が素縁手法のD₃類で、その他は口縁端部に面取りをほどこす手法のD₄類とD₅類にあたる。Ⅱ70は白色土器の高杯。外面を細かく面取りした脚部は円筒形の芯を用いた成形による。杯部は段を介して脚部と接合され、内面中央に小さなくぼみをもつ。Ⅱ71は同安窯系の青磁小皿。体部中位で屈曲し、内面に篋による片彫りと櫛によるジグザグ文様をもつ。全面施釉ののち底部の釉を掻き取る。Ⅱ72は青白磁の椀。内面中央に篋による片彫りの渦巻き状文様をもち、高台底面は無釉である。これらは12世紀後葉ごろの資料であろう。

SK 4 出土遺物 (Ⅱ73～Ⅱ82) Ⅱ73～Ⅱ80は赤褐色の土師器皿である。Ⅱ73～Ⅱ76は皿AⅡ。一段撫でて口縁端部に面取りをほどこし器形が丸みをおびるD₄類。Ⅱ79とⅡ80は皿AⅠで、器形が直線的なD₅類にあたる。Ⅱ77とⅡ78は受皿。Ⅱ81とⅡ82は灰白色を呈する小型の皿である。これらも12世紀後葉ごろのものとおもわれる。

SD 7 出土遺物 (Ⅱ83～Ⅱ120) Ⅱ83～Ⅱ110は土師器。Ⅱ83～Ⅱ92は赤褐色を呈する皿AⅡ。Ⅱ83～Ⅱ85がD₃類、Ⅱ86～Ⅱ89がD₄類、そのほかはD₅類で、口径は9cmにピークがある。Ⅱ93～Ⅱ96は赤褐色の皿AⅠ。すべてD₅類で13cmにピークがある。Ⅱ97～Ⅱ100は灰白色を呈する椀と皿である。Ⅱ101とⅡ102は灰白色を呈し、回転糸切り痕を残す底部。Ⅱ103とⅡ104も灰白色を呈するが、産地不明の皿。底部に回転糸切り痕を残し、内面には刷毛目調整痕をもつ。Ⅱ105～Ⅱ110は粘土紐を積み上げて成形した鉢形の土師器で、一般に塩壺と呼ばれているもの。体部半ばで屈曲して口縁が広がるものが多く、口縁部外面と内面を撫でて仕上げる。Ⅱ110は器高も低く、内面は刷毛による調整を加えている。類例が110地点と143地点の調査で報告されている〔五十川83, 五十川・宮本88〕。

Ⅱ111～Ⅱ116は瓦器。Ⅱ111とⅡ112は羽釜で、そのほかは鍋である。いずれも体部が丸みを帯びた器形を示す。Ⅱ117は黄釉陶器の盤。体部は軽く内湾し、口縁端部は断面菱形の玉縁状をなす。内面下半にのみに施釉され淡緑黄色を呈し、見込みには鉄釉で文様が描かれる。胎土は砂混じりで、堅く須恵質に焼成されている。Ⅱ118は体部肩に耳をもつ褐釉陶器の壺。四耳壺に復元した。口縁部は外反し端部を丸く収める。Ⅱ119は体部半ばで屈曲する器形の青磁皿の口縁部。Ⅱ120は白磁椀の口縁部。口縁端部は玉縁状に収める。

以上の遺物は、13世紀前半の年代に収まるものであろう。

SD 4 出土遺物 (Ⅱ121～Ⅱ149) SD 4 からは中世の遺構中もっとも多い126個体の遺物が出土した。このほとんどを京都産の土師器が占めるのは他の中世遺構と傾向を同じくするが、SD 4 では回転台成形による搬入土師器の割合がとくに高く、約10%を占める。

Ⅱ121～Ⅱ146は土師器。このうちⅡ121～Ⅱ130は赤褐色の皿。Ⅱ121～Ⅱ123は皿AⅡで、

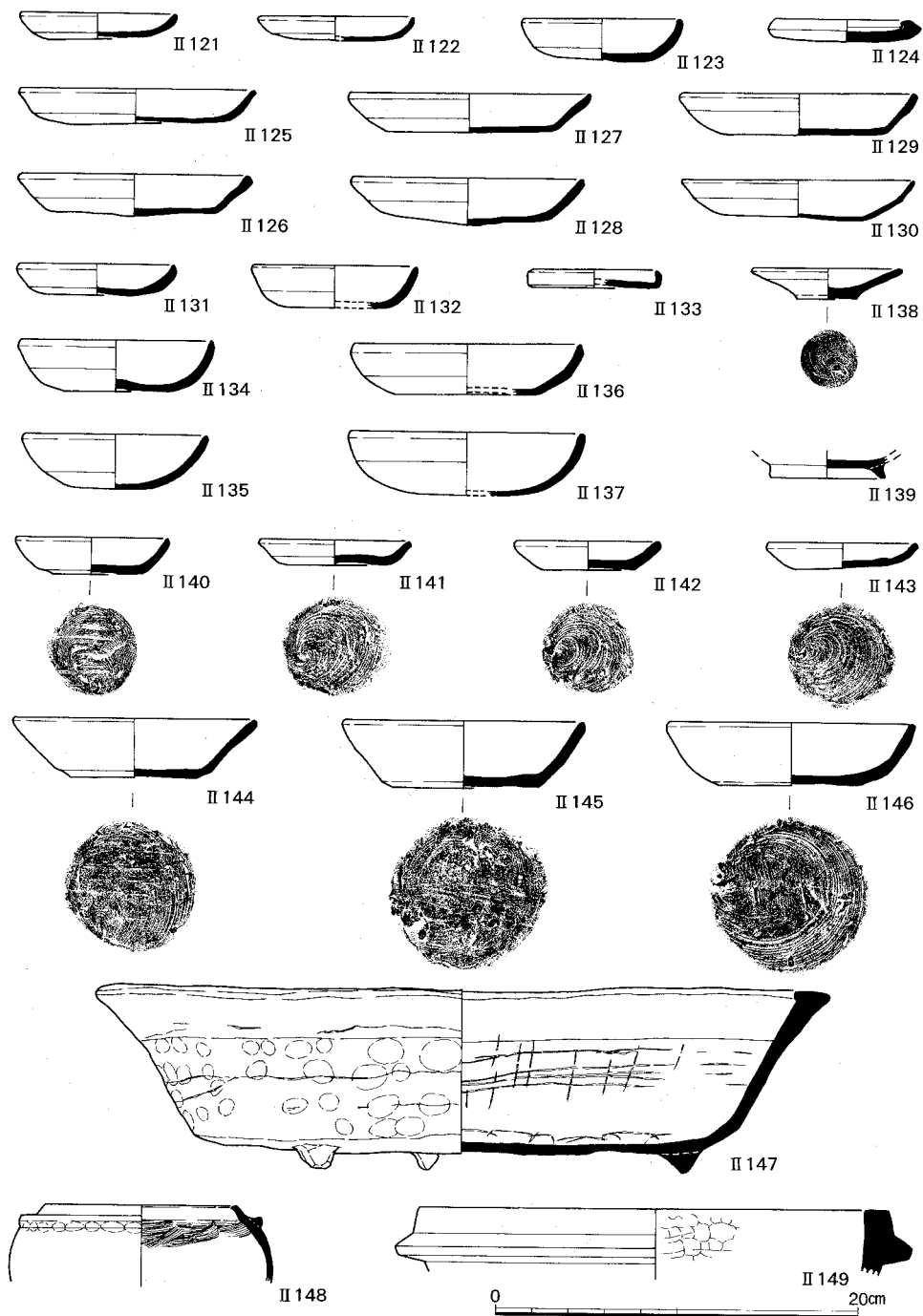


図36 SD 4 出土遺物 (II 121～II 146土師器, II 147・II 148瓦器, II 149石鍋)

口径のピークは 9 cm にある。D₅ 類の II 123 以外は D₄ 類である。II 124 は受皿。II 125 ～ II 130 は皿 A I で、ピークは 13 cm にある。II 125 が D₄ 類、II 126 ～ II 128 が D₅ 類、II 129 と II 130 は D₅ 類と同様な特徴をもつが器壁が薄い D₆ 類にあたる。II 131 ～ II 138 は灰白色を呈する椀と皿。II 131 は皿 A II、II 132 は椀 A II で、ともに D₅ 類。椀 A II の口径は 9 cm にピークがある。II 133 は受皿。II 134 ～ II 137 は椀 A I で口径のピークは 13 cm にある。いずれも D₅ 類に属する。II 138 は底部外面に回転糸切り痕をもつ皿。

II 139 は一般に早島式土器と呼ばれる吉備系土師器椀の底部。胎土は 3 mm 大の石英砂粒を含むもので、黄白色を呈するが、外面は煤の付着が多く黒色化している。II 140 ～ II 146 は底部外面に回転糸切り痕をもつ産地不明の土師器。II 140 と II 144 および II 145 は加えて板目の圧痕も残す。器形には小型の皿 (II 140 ～ II 143) と一回り大きい杯 (II 144 ～ II 146) の 2 種あり、前者は口径 8 ～ 9 cm 器高約 1.5 cm、後者は口径 13 ～ 14 cm 器高約 3.5 cm を中心とする。胎土は 5 mm の砂粒を含む粗いもので、色調は黄白色あるいは灰白色を呈し、内外面を撫で調整する。同様なものが中世の他の遺構および隣接する 218 地点からも出土しており、完形を多く含む土器が一括で出土する共通の傾向をもつ。

II 147 は瓦器盤。体部は底部から屈曲して外反気味に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。II 148 は小型の瓦器羽釜。丸みを帯びた器形で鰐が短く、三足釜である可能性もある。

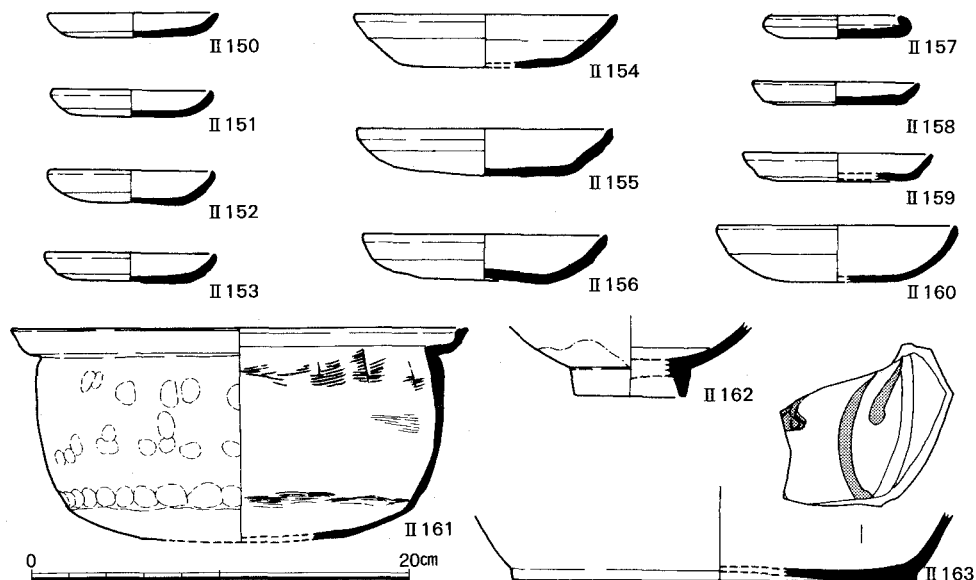


図37 SD 5 出土遺物(1) (II 150～II 160土師器, II 161瓦器, II 162白磁, II 163黄釉陶器)

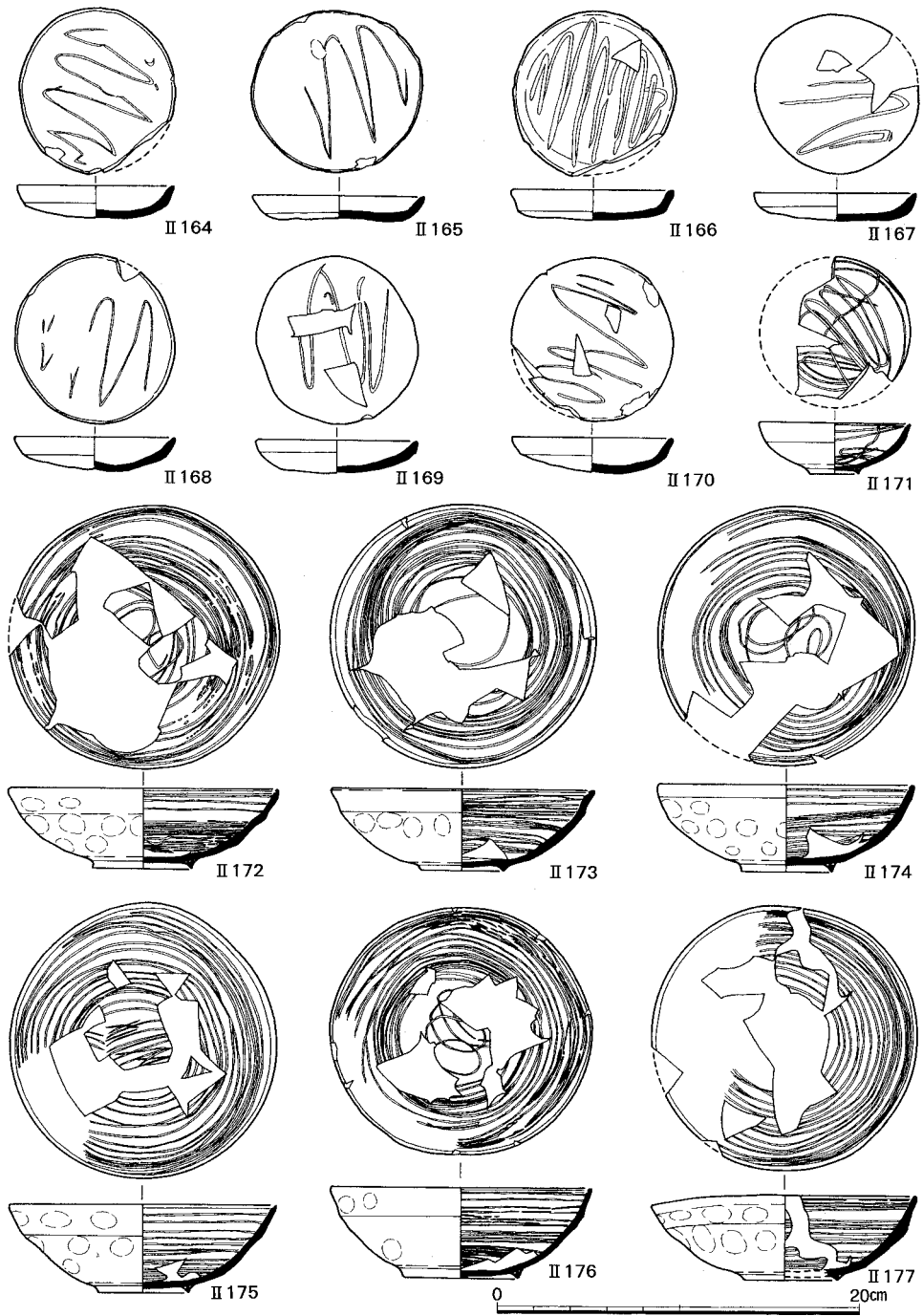


図38 SD 5 出土遺物(2) (II 164～II 177瓦器)

Ⅱ149は石鍋の口縁部で、滑石製である。

これらの遺物は13世紀前半ごろの資料であろう。

SD 5 出土遺物 (Ⅱ150～Ⅱ177) SD 5 からは76個体の遺物が出土したが、このうち20%を瓦器が占めており、他の中世遺構の器種構成と異なる。

Ⅱ150～Ⅱ160は土師器である。このうちⅡ150～Ⅱ156は赤褐色を呈す皿。Ⅱ150～Ⅱ153は皿AⅡで、9cmに口径のピークがある。Ⅱ154～Ⅱ156は皿AⅠで、ピークは14cmにある。Ⅱ150がD₃類、Ⅱ155がD₅類、そのほかはD₄類である。Ⅱ157～Ⅱ160は灰白色を呈する碗と皿。Ⅱ157は受皿。Ⅱ158とⅡ159は皿AⅡ。Ⅱ160は碗AⅠである。これらは13世紀前半ごろの資料である。

Ⅱ162は白磁碗の底部。高台は細く高く直立し、釉は省略される。Ⅱ163は黄釉陶器の盤。見込みに鉄絵の文様が描かれる。Ⅱ161とⅡ164～Ⅱ177は瓦器。Ⅱ161は鍋。口縁の2段の屈曲が鋭く、京都大学構内出土の煮沸土器をまとめた浜崎一志の編年によれば、13世紀前半ごろに比定できる〔浜崎84〕。Ⅱ164～Ⅱ170は皿。Ⅱ171は小型の碗。いずれも内面にジグザグ状の暗文が描かれる。皿は口径9cmを中心とし、器高は1.5～2cmである。Ⅱ172～Ⅱ177は碗。内面には連結輪状の篋磨きがほどこされ、外面の篋磨きは省略される。口径14.5～15cm、器高4.5～5cmの範囲に収まる。口縁部内面には沈線が刻まれ、高台は断面三角形の小さなものである。これらは、橋本久和のいう楠葉型瓦器碗のⅢ-1期に相当し、13世紀前半ごろの年代が与えられよう〔橋本92〕。

SD 6 出土遺物 (Ⅱ178～Ⅱ218) SD 6 もSD 5 と同様に出土遺物の器種構成に瓦器の占める割合が多いが、SD 5 出土の瓦器が碗・皿中心であったのに対し、SD 6 は鍋・釜を中心とする。土器以外では瓦類が多量に出土したが、瓦については項を改めて述べる。

Ⅱ178～Ⅱ207は土師器。Ⅱ178～Ⅱ191は赤褐色を呈する皿。このうちⅡ178～Ⅱ184は皿AⅡで、口径のピークは9cmにある。Ⅱ186～Ⅱ191は皿AⅠでピークは13cmにある。Ⅱ178がD₃類、Ⅱ179～Ⅱ182とⅡ186がD₄類、Ⅱ183・Ⅱ184とⅡ187～Ⅱ189がD₅類で、Ⅱ190とⅡ191がD₆類である。Ⅱ185は受皿。Ⅱ192～Ⅱ203は灰白色を呈する碗と皿。Ⅱ192～Ⅱ195は皿AⅡ類。Ⅱ196とⅡ197は碗AⅡ類で、口縁のピークは8cmにある。Ⅱ197は内外面に横方向の篋磨きをほどこしてあり、瓦器の小碗である可能性もある。Ⅱ198は受皿。Ⅱ199は皿AⅠ。Ⅱ200～Ⅱ203は碗AⅠで、13cmに口径のピークがある。これらの灰白色の碗・皿はD₅類に属する。以上の土師器は13世紀中葉ごろの資料であろう。

Ⅱ204～Ⅱ207は底部外面に回転糸切り痕と板目圧痕をもつ産地不明の土師器で、灰白色

を呈する。SD 4 のⅡ140～Ⅱ146と同種である。ここでも、口径が14cm前後の杯（Ⅱ204・Ⅱ205）と約8.5cmの皿（Ⅱ206・Ⅱ207）の2種の器形がある。

Ⅱ208～Ⅱ213は瓦器。Ⅱ208とⅡ209は羽釜。ともに体部は丸みを帯び、口縁部は内傾する。Ⅱ210～Ⅱ213は鍋。Ⅱ210～Ⅱ212は体部に丸みがあり、口縁部の2段の屈曲があまく蓋受けの部分も傾斜しており、12世紀後半ごろの資料であろう。これらより新しい13世紀前半ごろの器形を示すのがⅡ213で、口縁部の屈曲は鋭く蓋受け部分も水平である〔浜崎84〕。鍋・羽釜とも内面を刷毛調整し、外面は指押さえ調整で煤が多量に付着する。

Ⅱ214は黄釉陶器の盤。体部は内湾し、口縁端部のみ外反肥厚し玉縁状をなす。Ⅱ215は灰釉系陶器の底部。内面は施釉され淡黄白色を呈する。Ⅱ216とⅡ217は白磁。Ⅱ216は口縁部が弱く外反する小皿。見込み底部の釉を輪状に掻き取り、外面は露胎である。Ⅱ217は端部が玉縁をなす碗の口縁部。Ⅱ218は鉄製の刀子。一端に握り部分とおもわれる木片が付着する。

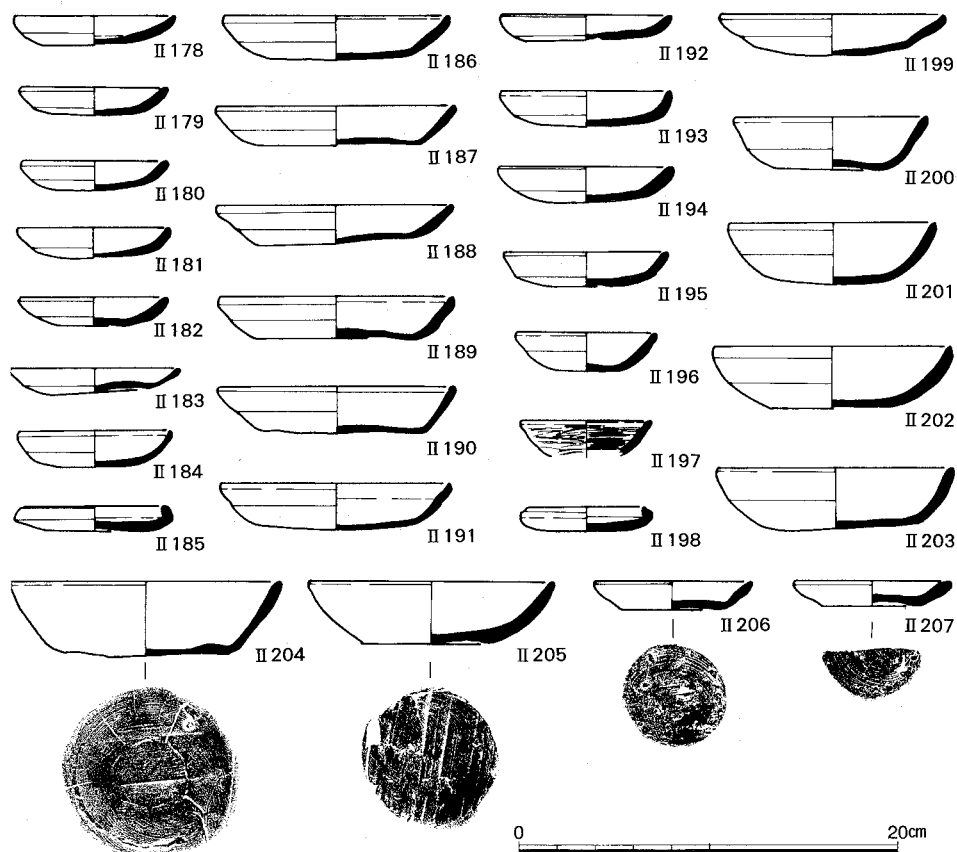


図39 SD 6 出土遺物(1) (Ⅱ178～Ⅱ207土師器)

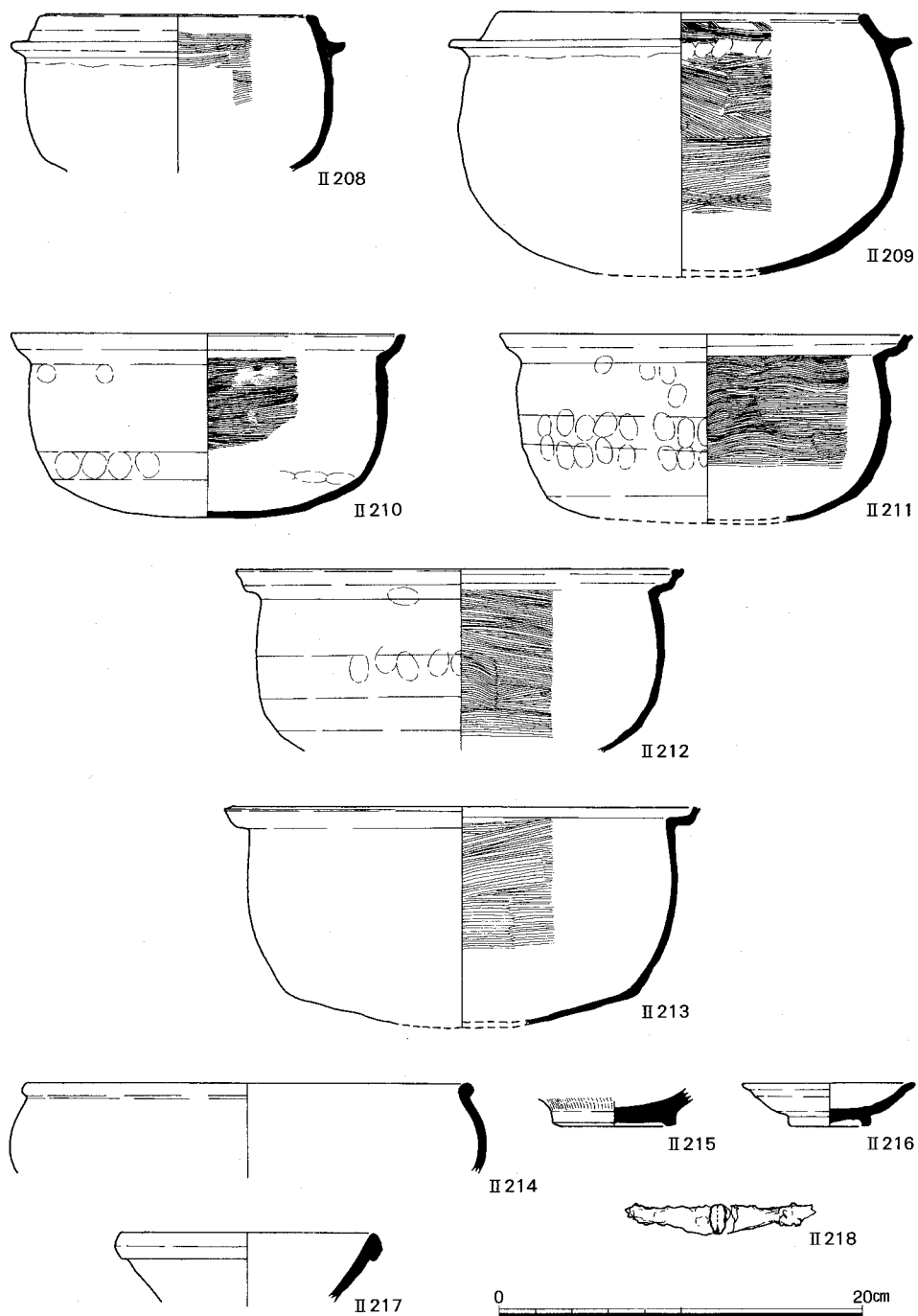


図40 SD 6 出土遺物(2) (II 208～II 213瓦器, II 214黄釉陶器, II 215灰釉系陶器, II 216・II 217白磁, II 218鉄器)

SD10出土遺物（Ⅱ219～Ⅱ221） 提示した資料はすべて赤褐色を呈する土師器皿で、D₄類に相当する。

SD11出土遺物（Ⅱ222～Ⅱ225） Ⅱ222～Ⅱ224は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ224のみD₅類で、あとの2つはD₄類。Ⅱ225は青白磁の底部で、平高台の外表面は露胎である。

SD9出土遺物（Ⅱ226・Ⅱ227） Ⅱ226は赤褐色を呈する土師器皿で、D₅類に属する。Ⅱ227は白色土器の高杯。見込みに小さなくばみをもつ。

SD2出土遺物（Ⅱ228～Ⅱ237） SD2からの出土遺物は大半が赤褐色を呈する大小の土師器皿であった。Ⅱ228～Ⅱ230は皿AⅡで、いずれもD₄類。Ⅱ231は受皿。Ⅱ232～Ⅱ236は皿AⅠ。Ⅱ233がD₄類、Ⅱ236がD₆類、ほかはD₅類に相当する。Ⅱ237は灰釉系陶器の底部。内外面とも体部上半のみ施釉する。

SX1出土遺物（Ⅱ238～Ⅱ247） 図示した資料はいずれも土師器。Ⅱ238～Ⅱ245は赤褐色の皿。Ⅱ238～Ⅱ243は皿AⅡで、Ⅱ238のみD₃類のほかはD₄類にあたる。Ⅱ244とⅡ245は皿AⅠで、ともにD₅類。Ⅱ246とⅡ247は灰白色の碗。D₅類に相当する。

SX2出土遺物（Ⅱ248～Ⅱ259） SX2からは図示したような赤褐色の土師器皿を中心とした遺物が出土した。Ⅱ248が皿AⅡ・D₄類であるほかは皿AⅠ・D₅類である。

SX4出土遺物（Ⅱ260～Ⅱ277） SX4からの出土遺物もほとんどが土師器の碗・皿であるが、灰白色の碗が比較的多い。Ⅱ260～Ⅱ267は赤褐色を呈する皿。Ⅱ260とⅡ261は皿AⅡで、それぞれD₃類とD₅類にあたる。口径の中心は9cmにある。Ⅱ262とⅡ263は受皿。Ⅱ264～Ⅱ267は皿AⅠで、13cmに口径の中心がある。Ⅱ267がD₆類であるほかはD₅類である。Ⅱ268～Ⅱ277は灰白色を呈する土師器。Ⅱ268が皿、Ⅱ272とⅡ273が受皿であるほかは碗である。碗の口径のピークは3つある。Ⅱ269～Ⅱ271は碗AⅢ、Ⅱ274とⅡ275は碗AⅡ、Ⅱ276とⅡ277が碗AⅠにあたり、それぞれ8cm、11cm、13cmにピークがある。このように白色系の土師器が口径別に3群にまとまる傾向は、SX5～SX8にも認められ、13世紀後半の様相を示すものである〔小森・上村96〕。

SX5出土遺物（Ⅱ278～Ⅱ301） 出土遺物は土師器が大半である。なかでも灰白色の土師器の比率が高く、約半数を占める。

Ⅱ278～Ⅱ300は土師器。Ⅱ278～Ⅱ286は赤褐色の皿で、すべてD₅類に属する。Ⅱ278～Ⅱ280は皿AⅡで、9cmに口径のピークがある。Ⅱ281～Ⅱ286は皿AⅠで、口径のピークは13cmにある。Ⅱ287～Ⅱ296は灰白色の碗と皿。Ⅱ287～Ⅱ290は皿AⅡで、D₅類に相当する。Ⅱ291とⅡ292は受皿。Ⅱ293～Ⅱ296はD₅類の碗。口径のピークは3つあり、皿AⅢ

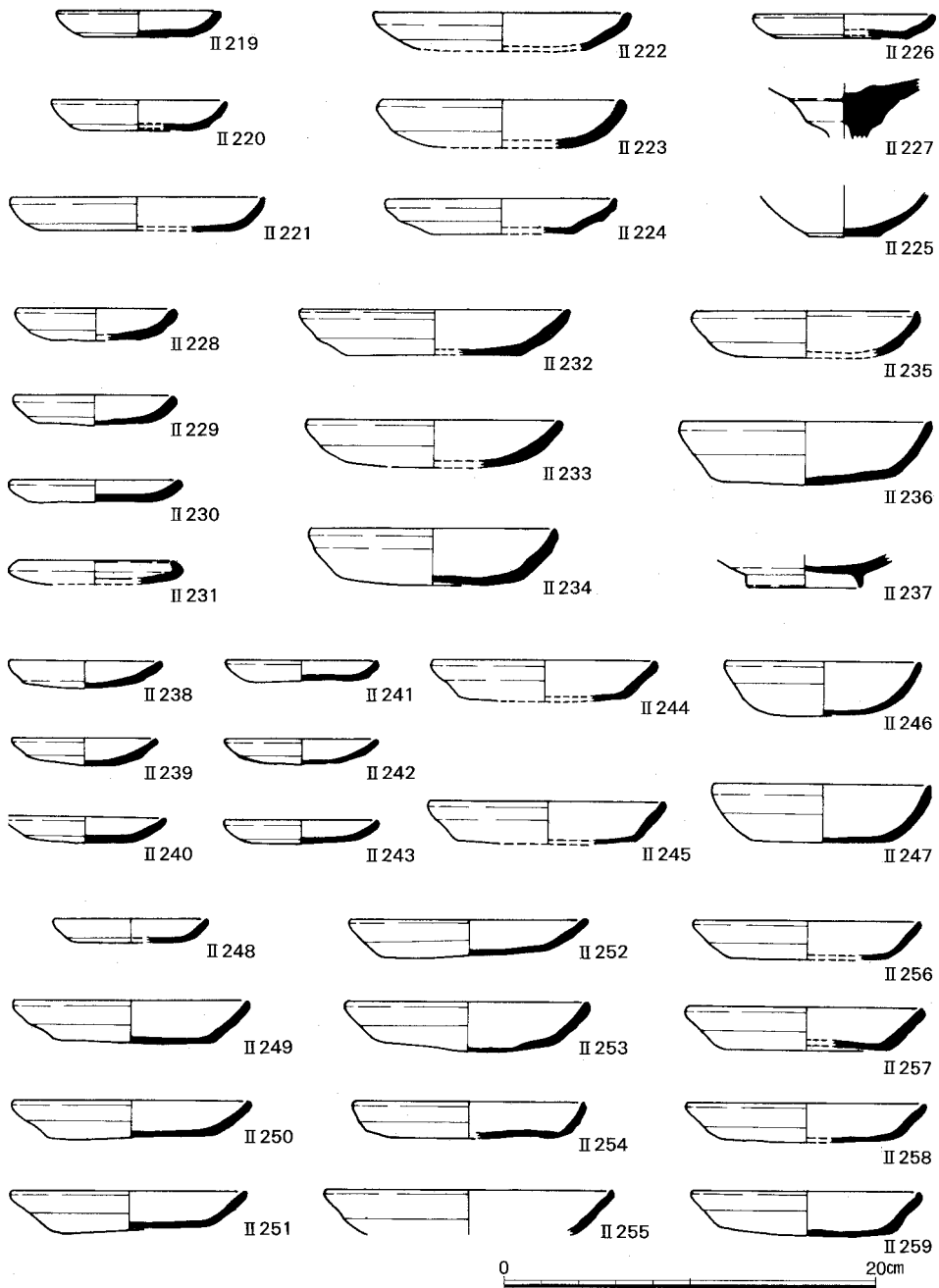


図41 SD10出土遺物 (II 219～II 221土師器), SD11出土遺物 (II 222～II 224土師器, II 225青白磁), SD 9 出土遺物 (II 226土師器, II 227白色土器), SD 2 出土遺物 (II 228～II 236土師器, II 237灰釉系陶器), SX 1 出土遺物 (II 238～II 247土師器), SX 2 出土遺物 (II 248～II 259土師器)

古墳時代～中世の遺跡

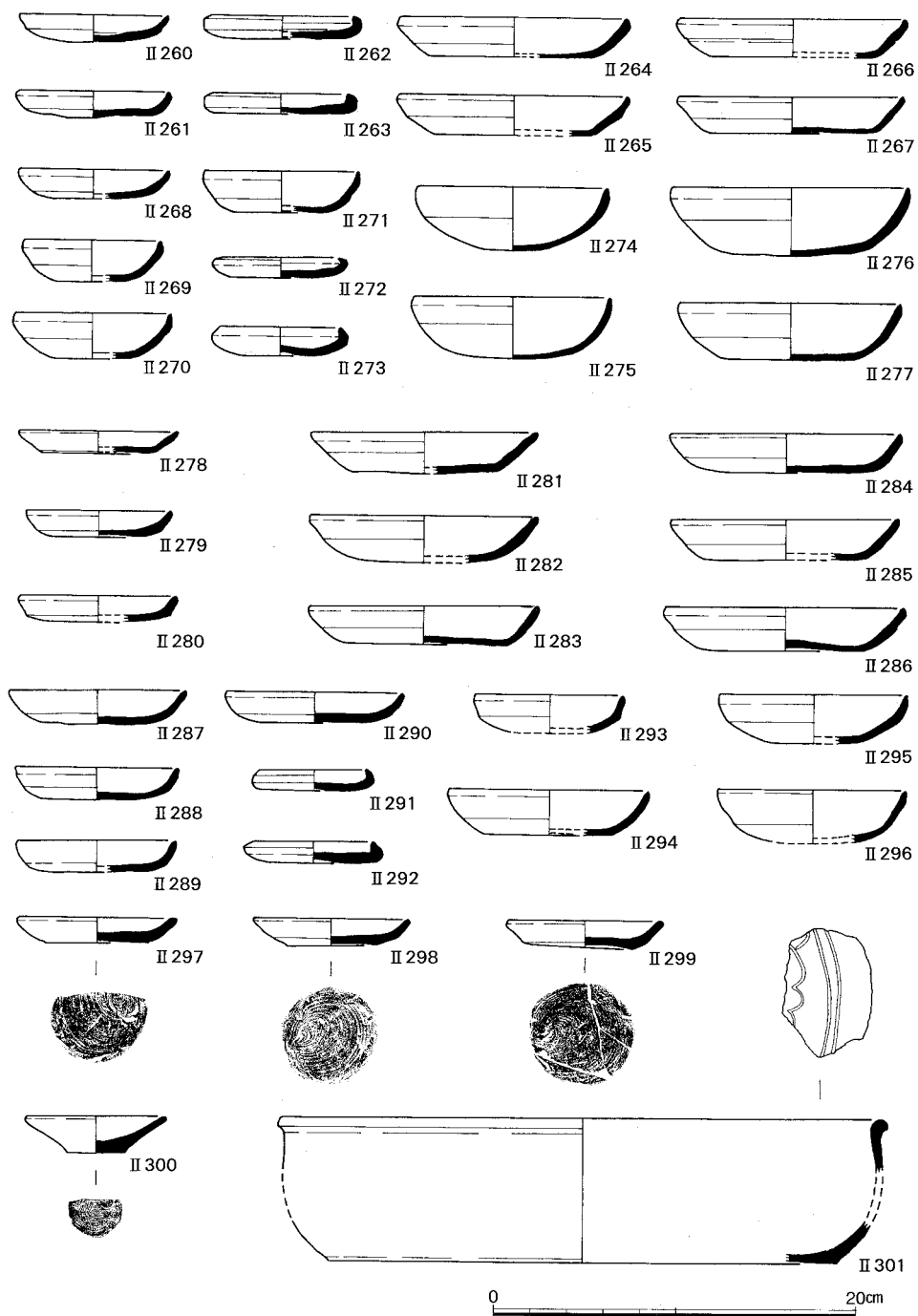


図42 SX 4 出土遺物 (II 260～II 277土師器), SX 5 出土遺物 (II 278～II 300土師器, II 301緑釉陶器)

(Ⅱ293)は8cm, 皿AⅡ(Ⅱ294～Ⅱ296)は12cm, 皿AⅠは14cmにそれぞれピークがある。Ⅱ300は糸切りの高台をもつ皿。色調は灰白色を呈し, 内外面とも回転撫で調整をほどこす。Ⅱ297～Ⅱ299は底部外面に回転糸切り痕を残す土師器の小皿。SD4やSD6出土のものと同等品である。以上は13世紀後半ごろのものとおもわれる。

Ⅱ301は緑釉陶器の盤。口縁部と底部が出土し, 同一個体として復元した。底部外面のみ露胎とし, 色調は濃緑色を呈する。見込みには篋で釉を掻き取って文様を描く。体部と底部の境部の2条の線と底部の花弁状の文様がある。

SX6 出土遺物 (Ⅱ302～Ⅱ320) Ⅱ302～Ⅱ317は土師器。Ⅱ302～Ⅱ308は赤褐色を呈する皿。Ⅱ302～Ⅱ304は皿AⅡでⅡ306～Ⅱ308は皿AⅠ。口径のピークはそれぞれ8cmと12cmにある。Ⅱ302とⅡ303がD₄類であるほかはD₅類に属する。Ⅱ305は受皿である。Ⅱ309～Ⅱ314は灰白色を呈する椀と皿で, D₅類に相当する。Ⅱ309とⅡ310は皿AⅡ。椀の口径のピークは3つあり, 椀AⅢ(Ⅱ311)は8cm, 椀AⅡ(Ⅱ312)は10cm, 椀AⅠ(Ⅱ313)は12cmにそれぞれピークがある。椀・皿ともSX4やSX5よりも小径化がすすんでいる。Ⅱ314は受皿。Ⅱ315は糸切り高台をもつ灰白色の小皿で, 体部が弱く内湾する。Ⅱ316とⅡ317は底部外面に回転糸切り痕を残す土師器。SD4やSD6出土のものと同じく, 灰白色を呈する。

Ⅱ318～Ⅱ320は瓦器。Ⅱ318は小型の羽釜。内面は通常の刷毛による調整ではなく, 横方向の撫でによる。体部外面には煤が付着し, 実用に供されていたことがわかる。Ⅱ319は口縁部が内傾する羽釜。Ⅱ320は鍋。口縁部の屈曲はあまい。

以上の遺物は, 13世紀前半に比定される瓦器鍋を除き, 13世紀後半ごろの資料であろう。

SX7 出土遺物 (Ⅱ321～Ⅱ332) 図示した土器はいずれも土師器である。Ⅱ321～Ⅱ323は赤褐色を呈する皿。Ⅱ321は皿AⅡで, D₄類。Ⅱ322とⅡ323はD₅類の皿AⅠ。Ⅱ324～Ⅱ328は灰白色の椀と皿。Ⅱ324は皿AⅡでD₅類。Ⅱ325は受皿。Ⅱ326～Ⅱ328はD₅類の椀。Ⅱ326は椀AⅢ, Ⅱ327は椀AⅡ, Ⅱ328は椀AⅠ。Ⅱ329～Ⅱ332は底部外面に回転糸切り痕を残す産地不明の土師器。小型の皿(Ⅱ329)と大型の杯(Ⅱ330～Ⅱ332)の2器種がある。

SX8 出土遺物 (Ⅱ333～Ⅱ340) 土師器や瓦器を中心とした遺物のほか, 瓦類が多く出土した。Ⅱ333～Ⅱ339は土師器で, このうちⅡ333～Ⅱ336は赤褐色を呈する皿。Ⅱ333～Ⅱ335は皿AⅡで, Ⅱ336は皿AⅠ。D₄類のⅡ335のほかはD₅類である。Ⅱ337～Ⅱ339は灰白色を呈する。Ⅱ337とⅡ338は受皿。Ⅱ339は椀である。Ⅱ340は瓦器羽釜の口縁部。

古墳時代～中世の遺跡

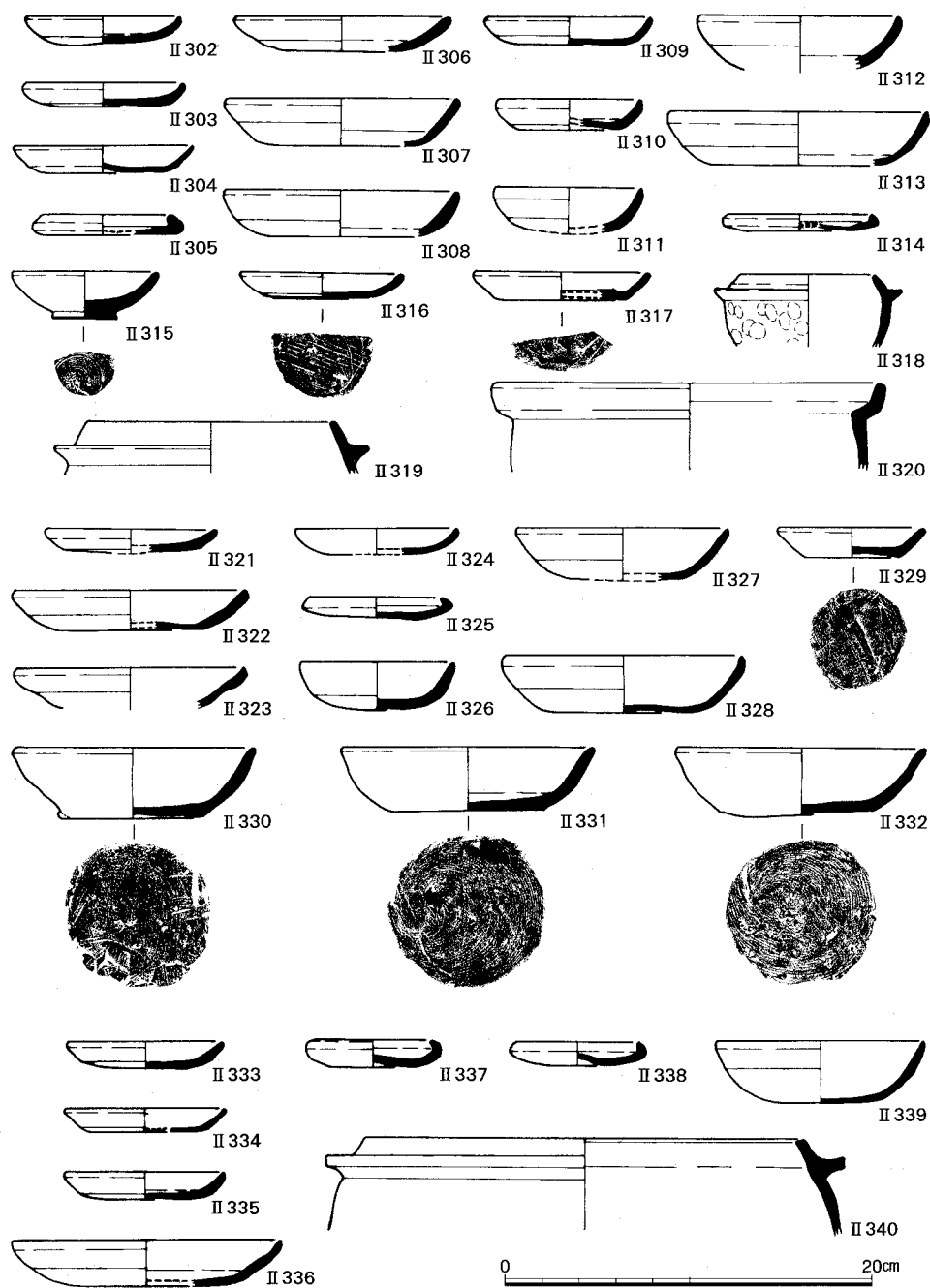


図43 SX 6 出土遺物 (II 302～II 317土師器, II 318～II 320瓦器), SX 7 出土遺物 (II 321～II 332土師器), SX 8 出土遺物 (II 333～II 339土師器, II 340瓦器)

京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査

表1 出土土器の計測結果(1)

種類別の比率		土師器口縁部形態の比率				
SD 4		SD 4	皿 A II	皿 A I	椀 A II	椀 A I
	126.5個体		50.3個体	47.3個体	4.5個体	9.9個体
土師器 (椀・皿)	88.5%	D ₄ 類	91.1%	25.4%		
搬入土師器	9.8%	D ₅ 類	8.9%	70.3%	100.0%	100.0%
瓦器 (椀)	0.1%	D ₆ 類		4.2%		
瓦器 (盤)	1.3%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
灰釉陶器 (椀)	0.1%					
陶磁器	0.2%					
輸入陶磁器 (白磁)	0.1%					
合計	100.0%					
SD 6		SD 6	皿 A II	皿 A I	椀 A II	椀 A I
	38.3個体		14.5個体	11.9個体	1.0個体	4.7個体
土師器 (椀・皿)	84.0%	D ₄ 類	43.7%	22.0%		
搬入土師器	2.0%	D ₅ 類	55.2%	65.8%	50.0%	100.0%
瓦器 (椀)	0.7%	D ₆ 類		2.8%		
瓦器 (鍋・羽釜・火鉢)	12.2%	E ₁ 類			50.0%	
須恵器	0.2%	E ₂ 類	1.1%	9.4%		
古瀬戸	0.2%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
輸入陶磁器 (白磁)	0.8%					
合計	100.0%					
SD 7		SD 7	皿 A II	皿 A I	椀 A II	椀 A I
	93.8個体		49.0個体	33.3個体	0.2個体	0.3個体
土師器 (椀・皿)	88.1%	D ₃ 類	13.0%			
搬入土師器	4.1%	D ₄ 類	66.4%	28.9%		
瓦器 (椀)	0.2%	D ₅ 類	20.6%	69.7%	100.0%	100.0%
瓦器 (鍋・羽釜・盤)	6.1%	D ₆ 類		0.8%		
須恵器 (すり鉢)	0.1%	E ₁ 類		0.3%		
古瀬戸	0.1%	E ₂ 類		0.4%		
輸入陶磁器	1.3%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	100.0%					
SD 3		SD 3	皿 A II	皿 A I		
	90.1個体		49.2個体	40.0個体		
土師器 (椀・皿)	99.0%	D ₃ 類	12.4%	2.3%		
瓦器 (鍋)	0.1%	D ₄ 類	79.6%	37.4%		
輸入陶磁器 (青磁皿)	0.9%	D ₅ 類	7.5%	57.6%		
合計	100.0%	D ₆ 類		2.1%		
		E ₂ 類	0.5%	0.4%		
		E ₃ 類		0.2%		
		合計	100.0%	100.0%		

古墳時代～中世の遺跡

土師器口径の度数分布

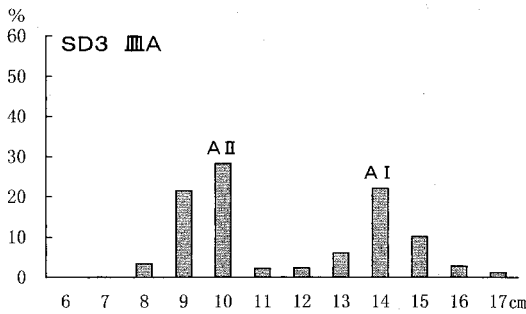
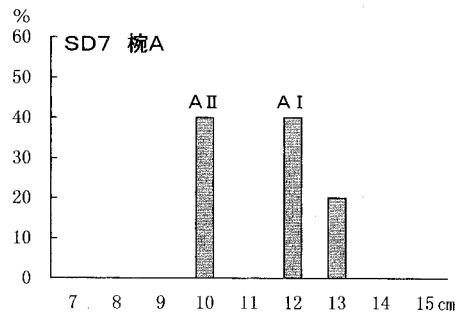
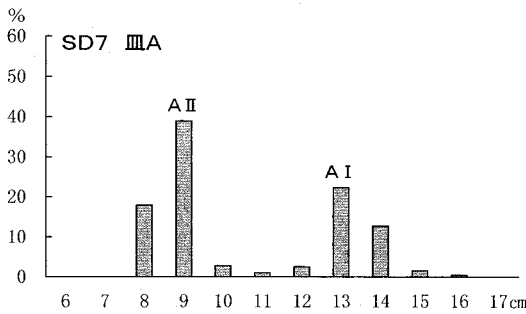
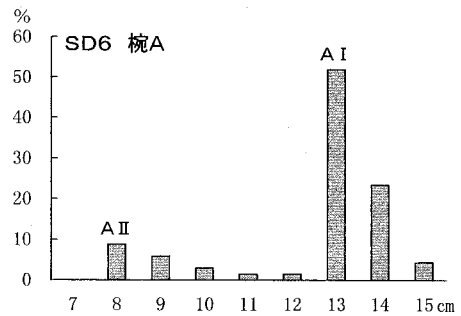
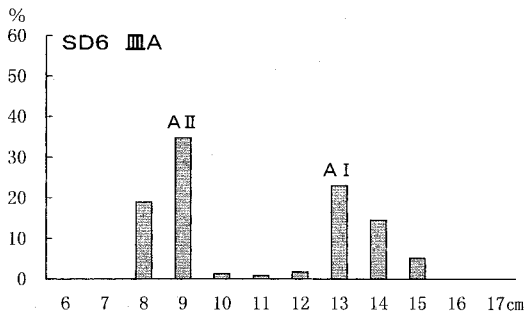
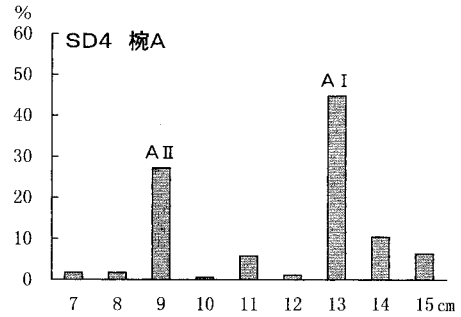
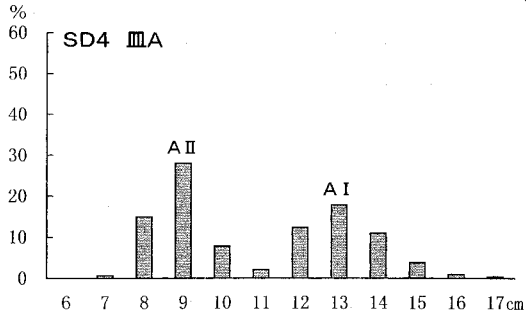
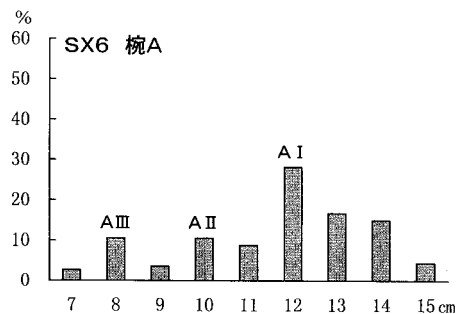
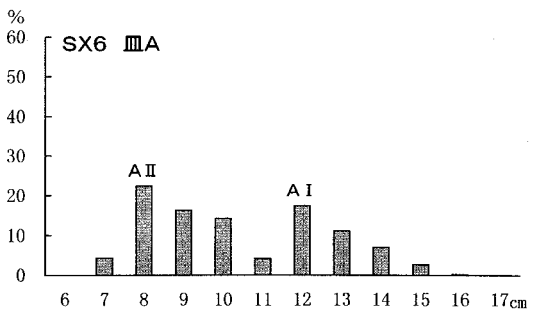
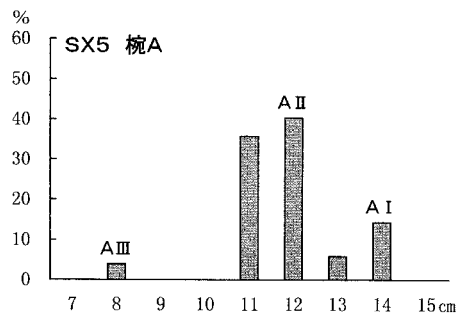
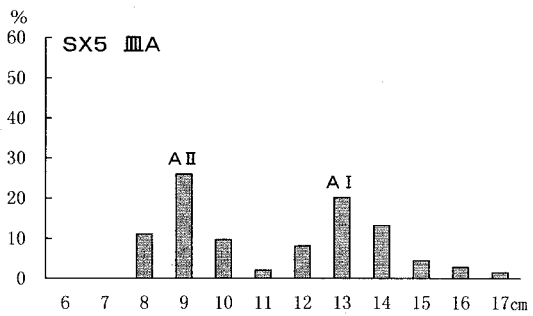
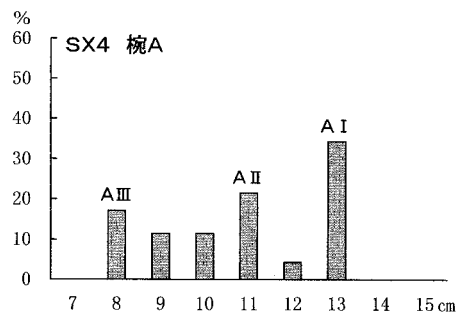
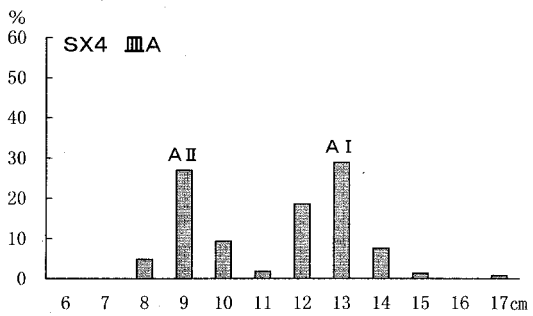
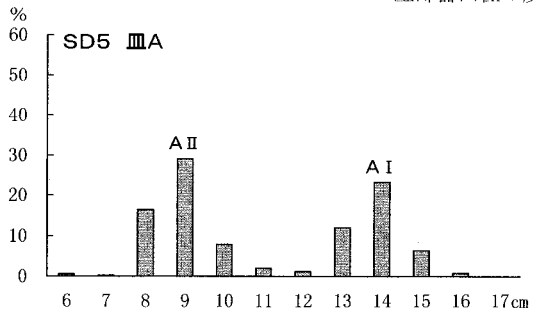


表 2 出土土器の計測結果(2)

種類別の比率		土師器口縁部形態の比率					
SD 5		SD 5	皿 A II	皿 A I			
	76.3個体		34.0個体	26.6個体			
土師器（皿）	79.6%	D ₃ 類	1.7%				
搬入土師器	0.3%	D ₄ 類	92.5%	43.3%			
瓦器（椀・皿）	18.5%	D ₅ 類	5.8%	56.7%			
瓦器（鍋・盤）	0.9%	合計	100.0%	100.0%			
須恵器（すり鉢）	0.1%						
灰釉陶器（椀）	0.1%						
輸入陶磁器	0.4%						
合計	100.0%						
SX 4		SX 4	皿 A II	皿 A I	椀 A III	椀 A II	椀 A I
	39.1個体		13.6個体	19.5個体	1.7個体	1.9個体	2.3個体
土師器（椀・皿）	99.6%	D ₃ 類	1.2%				
搬入土師器	0.4%	D ₄ 類	69.9%	17.9%			
合計	100.0%	D ₅ 類	27.6%	79.1%	100.0%	100.0%	100.0%
		D ₆ 類		3.0%			
		E ₂ 類	1.2%				
		合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
SX 5		SX 5	皿 A II	皿 A I	椀 A III	椀 A II	椀 A I
	48.1個体		18.3個体	20.9個体	0.3個体	4.9個体	1.3個体
土師器（椀・皿）	94.8%	D ₄ 類	45.1%	14.7%			
搬入土師器	4.8%	D ₅ 類	54.0%	80.5%	100.0%	100.0%	100.0%
瓦器（鍋）	0.2%	D ₆ 類	0.9%	4.8%			
輸入陶磁器（緑釉盤）	0.2%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	100.0%						
SX 6		SX 6	皿 A II	皿 A I	椀 A III	椀 A II	椀 A I
	38.9個体		18.6個体	13.9個体	0.6個体	1.1個体	3.0個体
土師器（椀・皿）	95.8%	D ₄ 類	74.5%	25.1%			
搬入土師器	3.0%	D ₅ 類	23.9%	69.2%	100.0%	100.0%	100.0%
瓦器（椀）	0.2%	D ₆ 類	1.6%	5.1%			
瓦器（鍋・羽釜）	1.0%	E ₂ 類		0.6%			
合計	100.0%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

古墳時代～中世の遺跡

土師器口径の度数分布



(3) 瓦 類 (図版21・22-1, 図44~47, 表3)

今回の調査では、軒平瓦28点、軒丸瓦42点のほか、整理箱7箱分の平瓦と丸瓦が出土した。瓦類の半数は中世の溝SD6から出土したが、東西調査区にわたる長い溝の各所からおおむね偏りなく出土した。SD6のほかは、SX8をはじめとした西調査区南西部の中世の土器溜からの出土が目立つ。

軒平瓦 (Ⅱ341~Ⅱ358) Ⅱ341~Ⅱ347は唐草文軒平瓦。Ⅱ341とⅡ342は同範。主茎が波状で、枝葉は渦巻き状をなす。凹面は布目痕、凸面は縄叩き痕が残る。瓦当頸部は指で横撫でされる。隣接する218地点から同範例が出土している。それぞれSX8とSD6出土。Ⅱ343は外区に珠文をめぐらせる。SD6出土。Ⅱ344は唐草文が崩れ波状をなす文様を単位とし、6単位に復元できる。凹面には細かい布目残り、窠記号が施される。SX7出土。Ⅱ345とⅡ346は波状の主茎から木の葉状の枝葉が派生する唐草文をもつ。Ⅱ345の凸面は斜格子叩き、凹面には布目が残る。Ⅱ346の瓦当頸部には折れ皺が残る、折り曲げ技法によるものである。それぞれSX8と茶褐色土出土。Ⅱ347は斜格子文で瓦当を飾るもの。SD6出土。以上の軒平瓦は平安時代末期から鎌倉時代前期の資料であろう。

Ⅱ348~Ⅱ358は剣頭文軒平瓦で、すべて折り曲げ技法による。Ⅱ348は剣頭を5単位並べる文様。凹面の布目は粗く側縁に面取りを施し、凸面は指押さえによる調整で一部布目が残る。SX5出土。Ⅱ349~Ⅱ351は剣頭の間隔が広く、6単位並べる文様に復元できよう。Ⅱ351の凹面には布目を残すが、Ⅱ349の布目は不明瞭で、Ⅱ350は布目を撫で消す。いずれも折り曲げのあと頸部を横撫で調整し、凹面には縦方向の撫でを加える。Ⅱ351が攪乱からの採集のほかはSD6出土。Ⅱ352~Ⅱ357は剣頭を7~8単位並べる文様に復元できるとおもわれる。Ⅱ352、Ⅱ356およびⅡ357は同範。凹面の布目は細かい。Ⅱ356はSX5出土、ほかはSD6出土。Ⅱ353~Ⅱ355もSD6出土。凹面の布目はやはり細かく、Ⅱ355は布端の圧痕が残る。Ⅱ354は凸面全面を指押さえにより調整し、瓦当裏面には一部布目を残す。Ⅱ358の文様は、中央に巴が頭部から反時計回りに尾を引く左廻り三巴文をおき、両側に剣頭を4単位ずつ配する。瓦当に窠記号状の2条の沈線を持ち、凹面の布目は粗い。SD6出土。これらの剣頭文軒平瓦は鎌倉時代中期ごろのものであろう〔上原95〕。

軒丸瓦 (Ⅱ359~Ⅱ373) Ⅱ359~Ⅱ361は蓮華文軒丸瓦。Ⅱ359は単弁4葉蓮華文。瓦当が薄く中房が段状に隆起するが、中房上には蓮子はない。全体に磨耗しており成形痕は確かでない。SD5出土。Ⅱ360とⅡ361は同範の単弁8葉蓮華文。中房に4+1の蓮子をもつ。瓦当裏面に掌圧痕と撫でが残る。それぞれSX8とSD5出土。Ⅱ362~Ⅱ373は三

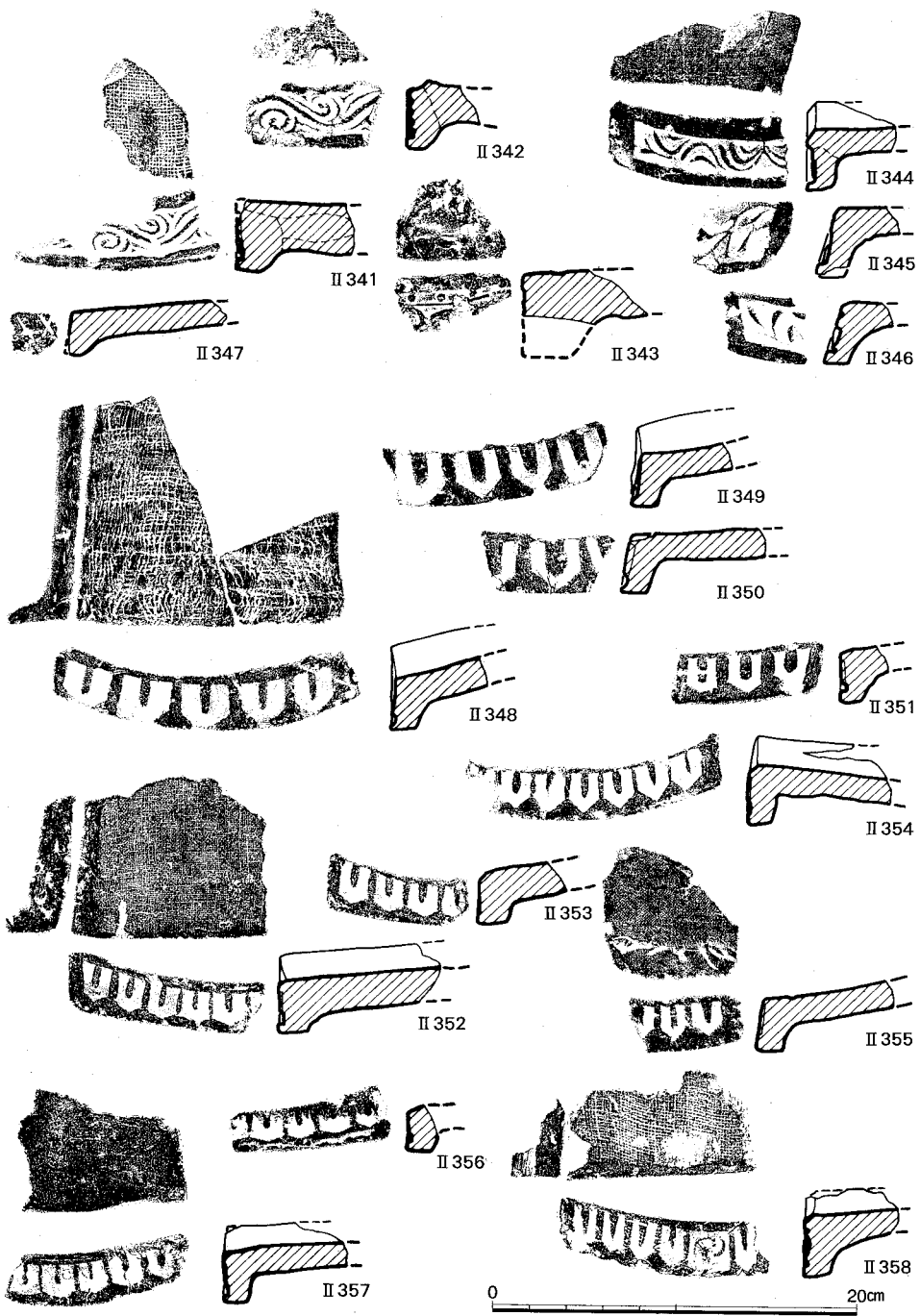


図44 軒平瓦 (II 341～II 358)

巴文軒丸瓦。SD 6 から出土したⅡ362～Ⅱ364は左廻り巴文で、巴は頭部から反時計回りに尾を引く。Ⅱ364は巴の頭部が大きい。Ⅱ363は瓦当側面に横方向の篋削りをほどこす。いずれも瓦当裏面は主に撫でて調整する。Ⅱ365の巴文は右廻りである。巴の尾は長く引き周縁に接する。SD 6 出土。Ⅱ366～Ⅱ372は左廻り巴文の周囲に珠文を配する文様をもつ軒丸瓦。SD 6 から出土したⅡ366～Ⅱ368は同範。巴・蓮子とも肉厚があり明瞭なもので、文様間の瓦当底面に瓦範の木目圧痕を残す。瓦当側面は横方向に削り、丸瓦部凸面は粗い撫でを加えている。同範の資料はほかに5個体出土した。Ⅱ369とⅡ370もSD 6 出土。Ⅱ371とⅡ372は内外区間に1条の圈線をほどこす。それぞれSX 4と茶褐色土出土。Ⅱ372は珠文を密に配し、丸瓦部凸面は斜格子叩きをほどこす。Ⅱ373は1条の圈線で仕切った内区に右廻り二巴文をおき、外区に珠文を配する。胎土は砂粒が目立つ。SD 6 出土。

平瓦（Ⅱ374～Ⅱ382） 平瓦は小破片が多く、全体の形状を知ることのできる資料はほとんどないが、凸面の叩き、凹面の調整、色調、厚さ、胎土などからA～Cに大別でき、数量を表3に示す。なお表3で計測に用いた資料は端部が残っているものに限り、うち隅部を有している資料の個数も付した。

A 凹凸面に篋削りをしないものをA類とする。厚さは2.5cm前後と厚く、胎土は非常に精良。

A 1（Ⅱ374） 凸面に丁寧な撫でをほどこすもの。色調が灰色で須恵質に焼成されたものが多い。凹面は細かい布目が残る。

A 2（Ⅱ375） 凸面に明瞭な縄叩きをほどこすもの。凹面は布目のものと撫でるものがある。

B 凹凸面を横方向に篋削りし、調整台との間に離れ砂を使用するものをB類とした。凸面調整には叩きをほどこすものと、そうでないものがある。

B 1（Ⅱ378） 凸面に縄叩きを加えるが、不明瞭なもの。凹面は糸切りのままのものと布目が残るものがある。厚さは1.8cm前後とやや厚い。胎土は精良で須恵質または硬質に焼成されたものが多い。篋記号は広端面に縦線1本の例が多い。

B 2（Ⅱ379） 凸面を斜格子叩きするが、やはり不明瞭なもの。凹面は布目を残すものと撫でを加えるものがある。胎土は粗い砂粒を多く含む。厚さは1.5cm前後。

B 3（Ⅱ380） 凸面に平行叩きをほどこすもので、図示した1例のみ。凹面は細かい布目残り、須恵質に焼成される。

B 4（Ⅱ381） 草花状の文様が刻んである叩き板で、凸面に叩きをほどこすもの。こ

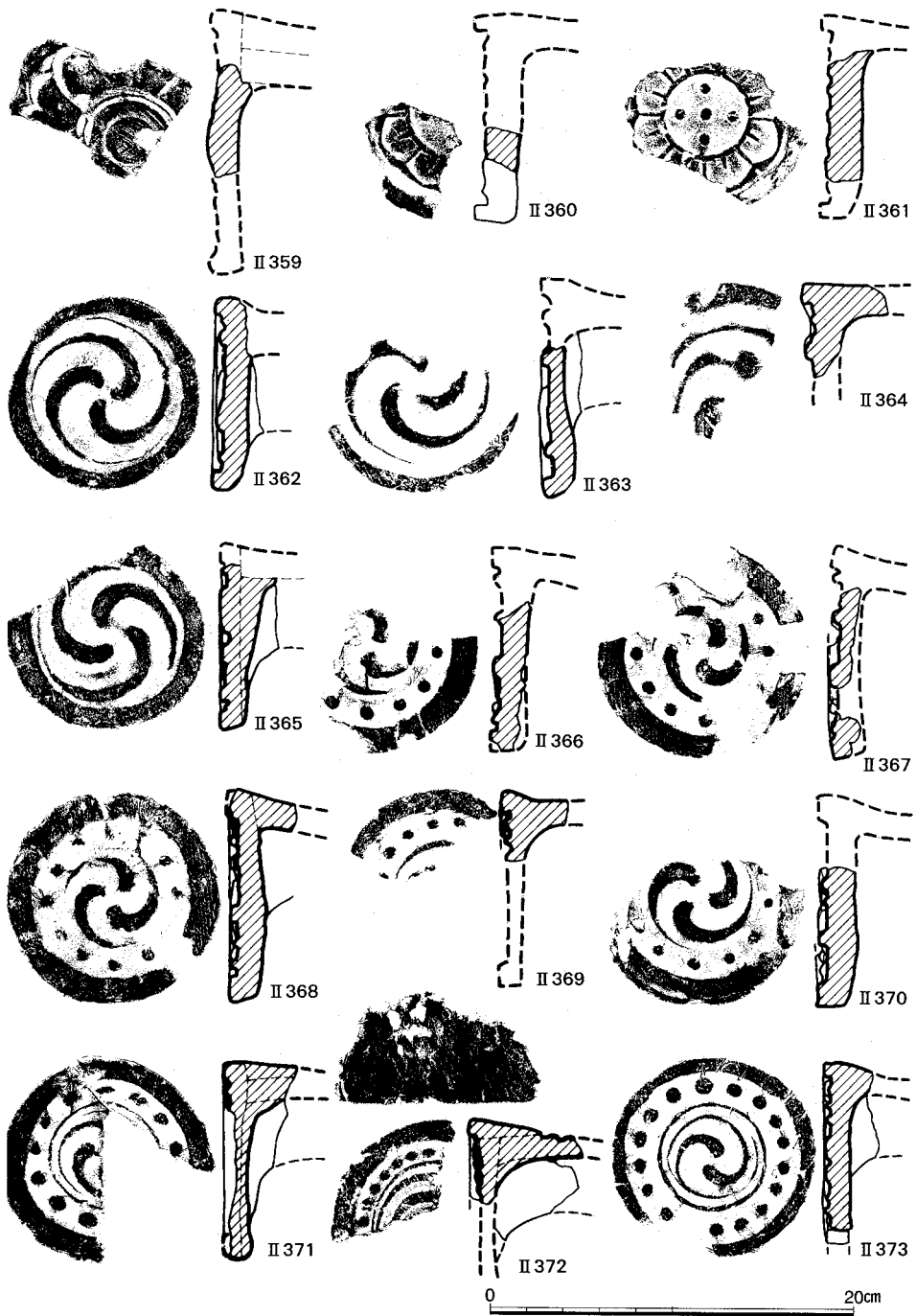


図45 軒丸瓦 (II 359～II 373)

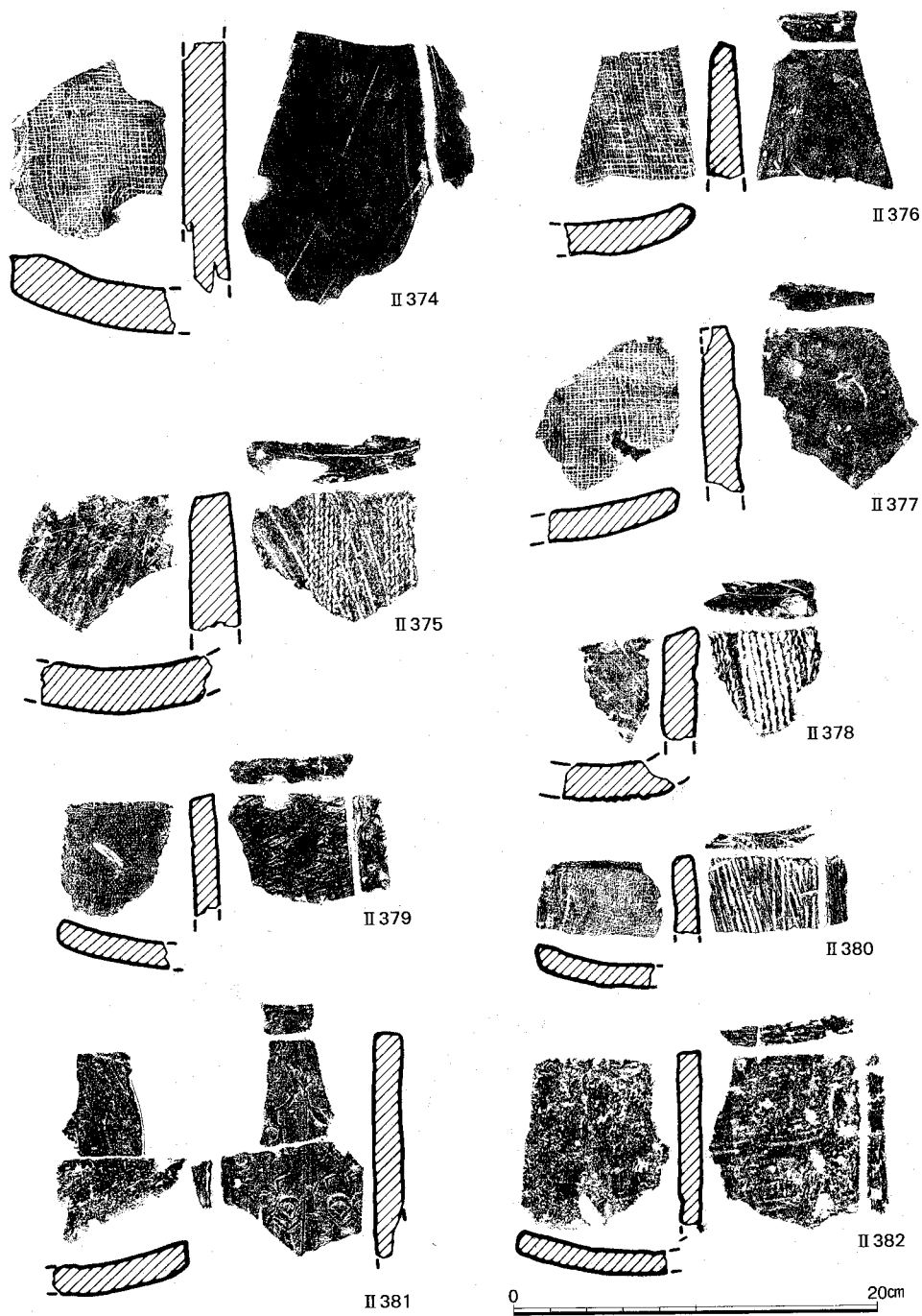


図46 平瓦 (II 374～II 382)



図47 丸 瓦 (II 383～II 385)

れも 1 例のみ。凹面は糸切り。色調は灰黒色。

B 5 (Ⅱ382) 凸面に叩きをほどこさず糸切りのままか、調整が不明なもの。

C 凸面を撫でまたは指押さえにより調整したものを C 類とした。厚さは薄く 1 cm 前後。灰黒色を呈するものが多い。範記号は広端面の縦 1 本線の例が多いが、V 形や X 形、あるいは凹面の 1 本線の例もある。

C 1 (Ⅱ376) 凸面に丁寧な撫でをほどこすもので、凹面は撫でるか糸切り痕や布目が残るものがある。

C 2 (Ⅱ377) 凸面を指押さえにより調整するもの。凹面は粗い布目が残る。

丸 瓦 (Ⅱ383～Ⅱ385) 丸瓦も小片が多いが、凸面の叩き、凹面の調整、胴部の厚さ、胎土、色調から、A～C に大別でき、表 3 に数量を示した。

A (Ⅱ383) 凸面を撫で調整するもの。凹面は布目が残るものと撫でを加えるものがある。灰色で須恵質に焼成されるものが多い。厚さは 1.5～1.8cm。

B (Ⅱ384) 凸面に深い斜格子叩きをほどこすもの。凹面に残る布目は非常に粗いものが多い。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調は赤褐色または灰色を呈する。厚さは A 類と変わらない。

C (Ⅱ385) 凸面を縄叩きするものを C 類とした。丸瓦の大半を占める。凹面に残る布目が粗いもの (C 1) と細かいもの (C 2)、および凹面に糸切り痕が残るもの (C 3) に細分される。玉縁部外面は撫で、端部凹面側を面取りする。色調は灰色か赤褐色を呈し、厚さは 1.3～1.6cm とやや薄い。

表 3 平瓦・丸瓦の分類別出土点数

平 瓦				丸 瓦			
分類	破片数	隅部点数	範記号	分類	破片数	隅部点数	範記号
A 1	2			A	5	2	
A 2	1			B	14	1	1
B 1	45	13	12	C 1	41	5	5
B 2	12	4		C 2	29	8	1
B 3	1	1		C 3	8	1	1
B 4	2						
B 5	173	72	16				
C 1	36	11	3				
C 2	4	1					
計	276	102	31	計	97	17	8

5 近世・近代の遺跡

(1) 近世の遺跡と遺物 (図48・49)

東調査区と西調査区の北半は攪乱や削平が著しく確かではないが、遺構の密度は低い。近世の遺構は西調査区南半に集中する。検出した遺構は耕作にともなうものであり、野壺と柵列がある。

野 壺 SE 1～SE 3 は径約1.5mの漆喰づくりの野壺である。SE 4 は SE 1 を掘りなおしてつくられた素掘りの野壺。

柵 列 検出した柱穴は大きさ10～15cmの方形または円形の掘形で、2.5m間隔で東西に並ぶものがあり柵列とした。方位は真北から西に約3°振り、隣接する218地点で検出した柵列ともよく符合する。

さて、京都大学本部構内には幕末に尾張藩邸が置かれ、本調査区付近は馬場付近にあたると推測されるが、今回の調査では確認できなかった。今後の周辺の調査に期待したい。

近世の遺物は整理箱4箱に収まる量が出土した。土師器、陶器、磁器、瓦類、土製品(泥面子・伏見人形)、鉄釘、銭貨などがある。Ⅱ386～Ⅱ389は SE 1 出土遺物。Ⅱ386と

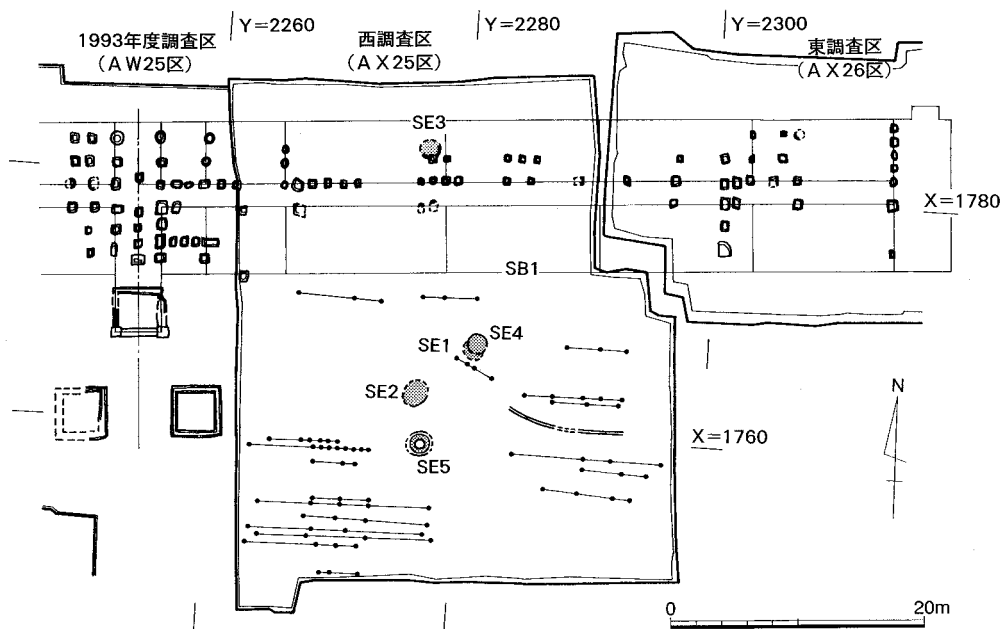


図48 近世・近代の遺構 縮尺1/600

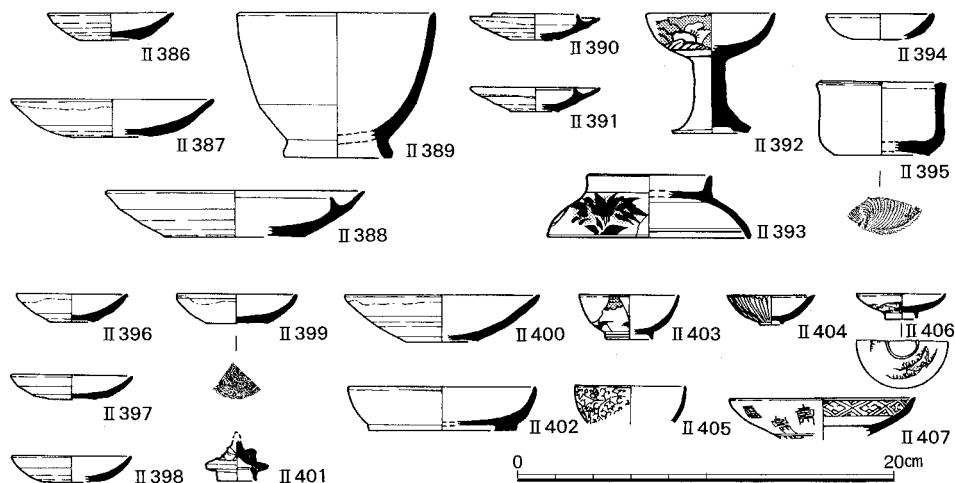


図49 SE 1 出土遺物 (Ⅱ 386～Ⅱ 389 陶器), SE 2 出土遺物 (Ⅱ 390・Ⅱ 391 陶器, Ⅱ 392 磁器), SE 3 出土遺物 (Ⅱ 393 染付), SE 4 出土遺物 (Ⅱ 394・Ⅱ 395 土師器), 灰褐色土出土遺物 (Ⅱ 396～Ⅱ 403 陶器, Ⅱ 404 白磁, Ⅱ 405～Ⅱ 407 染付)

Ⅱ 387は陶器の皿で、体部外面は無釉である。Ⅱ 387の口縁部には煤が付着する。Ⅱ 388は陶器の灯明皿。Ⅱ 389は腰折れ形の陶器碗で、体部下半は無釉。Ⅱ 390～Ⅱ 392は SE 2 出土遺物。Ⅱ 390とⅡ 391は陶器の灯明皿。Ⅱ 392は磁器の色絵仏飯器。畳付の釉を掻き取る。Ⅱ 393は SE 3 出土遺物で、染付碗の蓋。外面に草花文、見込みに圈線を描く。見込み中央の文様は欠落により特定できない。Ⅱ 394とⅡ 395は SE 4 出土遺物。Ⅱ 394は型作りの土師器皿。見込みに離型剤の雲母が付着する。Ⅱ 395は土師器の筒形容器。底部外面に糸切り痕を残す。Ⅱ 396～Ⅱ 407は灰褐色土出土遺物。Ⅱ 396～Ⅱ 400は無高台の陶器皿。いずれも外面は無釉である。Ⅱ 401は陶器の蓋。Ⅱ 402は蛇の目凹形高台をもつ盤形陶器皿。Ⅱ 403は陶器小碗。体部外面の文様は染付風である。Ⅱ 404は白磁紅猪口。Ⅱ 405は染付碗。外面を繊細な唐草文でうめる。Ⅱ 406とⅡ 407は染付の皿。Ⅱ 407は外面に福文と壽文をちらす。

(2) 近代の遺跡 (図48)

近代の遺構は井戸と建物がある。井戸 SE 5 の上部は後世に破壊されており、黒褐色土上面で初めて検出した。井筒は深く、約 3 m 掘り下げたところで底部に届かず、掘削を中止した。径 1.8 m の円形の掘形に、型作りの円筒形の漆喰を積み重ねて置き、井筒とする。漆喰は径 1 m、高さ 60 cm、厚さは 9 cm をはかる。

西調査区の北半と東調査区の表土下面で、方 70 cm の方形の掘形に割栗石を充填した建物基礎を多数検出した。隣接する AW25 区の調査でも同様な遺構が発見されており、京都大

小 結

学の前身である第三高等中学校の吉田学舎が明治20年に建設された際、この地付近に設置された寄宿舍に比定されている〔千葉ほか97〕。今回検出した建物 SB 1 はこれに連続するものであり、その配置をより正確に把握することができた。『官報』第1867号（明治22年9月17日）の竣工報告によれば、寄宿舍は木造3階建ての中廊下式である。また『第三高等中学校全図』〔神陵史資料研究会編94〕や明治30年の新設にともなってこの建物を引き継いだ京都帝国大学の創立間もない頃の配置図『京都帝國大學略図』〔京都大学百年史編集委員会編98〕には、東西に長い左右対称平面の寄宿舍の姿を認めることができる。これらを勘案すれば、AW25区検出の基礎列が寄宿舍の中央部分にあたり、この南に位置する真々4.5mの3箇所の方形布基礎跡が玄関車寄せと玄関両脇の付属屋で、東に長くのびる本調査区検出部分が寄宿舍の東翼に相当するものとおもわれる。建物全体の規模は不明であるが、中央南北軸から東端の基礎列まで約60mをはかり、西翼部分も同様の規模をもつものとするれば、桁行き120m以上の大規模な建物となる。図48には想像される規模を示しておいた。建物の方位は真北から西に4°振っており、現在の本学の建物配置と一致する。

6 小 結

(1) 中世の溝と土地利用

古代には遺構・遺物とも希薄だった京都大学本部構内は、およそ13世紀を画期として14世紀ごろまでの人びとの活動の痕跡が各所で認められるようになる。これまでに判明した中世前半の遺構として、まず本部構内を北西から南東に横切る中世志賀越え道があげられる（90・168地点）。この道に近い北側に掘立柱建物（90地点）、井戸（90・218地点）、大土器溜（90・181地点）があり、南側には掘立柱建物・井戸（124地点）、木棺墓・土壙墓（75地点）がある。また砂取り穴がこの道に近接した南北（90・110・168・214地点）と南方（89地点）に存在する。このほか溝や土坑および土器溜が各地点で認められ、発見される遺物の量も古代に比較して飛躍的に多くなる。

今回調査した地点は中世志賀越え道の北側約80mに位置し、12世紀後葉から13世紀代の遺物を包含する溝群や土器溜を検出した。溝群は西調査区の南半を中心に多様な形態のものが複雑に交錯する。溝には東西方向のものとそれに直交するものがあり、現在の国土座標とほぼ方位を同じくする。ただ溝 SD 6 はほかの溝とは方位を少しく異にしており、中世志賀越え道を意識してこれに平行に掘られたものであろう。出土する遺物の時期や切り合いから SD 6 は他の溝からやや遅れて掘られたことがわかっており、この地の土地利用

の基準方位が、正方位から中世志賀越え道の方角を基準とする方位へ変わっていった可能性も指摘できよう。

溝以外の遺構については、隣接する218地点で溝より南側に井戸や墓などの生活あるいは祭祀に関連する遺構があり、遺物についても溝より南側に多量の瓦類の出土があり北側にはみられないことなどから、これらの溝を北の境界とする屋敷地あるいは境内があり瓦葺きの建物が存在したことが想定される。また文献からも藤原北家勧修寺流の人びとの邸宅や、吉田社を中心とする構がこの地付近に存在したことがわかっている〔浜崎83〕。しかしながらこれまでの調査をみる限り、本部構内で発見された遺構は人びとの居住地に直接つながるものではなく、墓や廃棄場所や砂取り穴などの居住地周辺の様相を呈しており、居住の中心からはやや外れているものとかがえられる。

溝の形態に目をうつすと、今回検出した溝は多様である。屈曲する断面U字形の溝SD3は、水流の跡は認められなかったもののその形態から水路として機能したものであったと理解したい。また、約10mの間隔をおいて南北に連なる2対の溝SD2・SD9とSD13・SD14は、何らかの出入口部分であった可能性もある。断面V字状で長大な溝SD6や、断面逆台形状の大規模な溝SD4・SD5・SD7は、単なる区画以上に防御的な機能をもっていたとかがえられる。旧平安京の洛中・洛外において防御を目的とした堀が多数発見されており、洛外の堀は鎌倉時代後期から室町時代にかけて存続し、戦国時代にはほとんどが埋められてしまうが〔山本96〕、今回発見した溝はこれより早い時期の例に相当しよう。

溝から出土する遺物は12世紀後葉から13世紀前半に時期を限っており、掘削後比較的短期間の間に廃絶されたと推測できる。遺物の内容は瓦器などの煮炊用土器や白色系土師器などの祭祀に関連するとおもわれる遺物も多く、溝は廃絶後周辺でおこなわれた祭祀や生活廃棄物の捨て場となったとかがえられる。14世紀以降の遺物は全体に少なく、中世後半には耕作地と化していったようだ。近世には一面の田畑となり、こうした景観は幕末に尾張藩邸が設置されるまでつづき、明治20年には京都大学の前身である第三高等学校がこの地に創設されるのである。

(2) 古代・中世の遺物 (図版22-2, 図50)

古代と中世の遺物のうち、特色のあるものを取りあげここで検討しておく。

緑釉円塔 上層の中世遺構からではあるが、緑釉の円塔が出土した(図32-II 55)。焼き物の小仏塔については泥塔や土製円塔と呼ばれ、素焼きを中心としたさまざまな形態のものが知られている〔石田編72〕。今回出土したものは鐙状の基台上に半球状の伏鉢ふくはつをの

せる形態で、緑釉をほどこしたものである。同様のものは京都大学構内から過去に3例の出土があり〔泉81, 五十川ほか95〕, すべて医学部構内からのものである。未発表のものを含めてここに改めて図示した。

京都大学構内出土のこれら4例の円塔は、その特徴から3つに分類できる。II 55とaは扁平な形状の伏鉢が鐙からまっすぐ立ちあがる形態をもち、釉調は淡黄緑色を呈するが、底面の釉ははげ落ちている。伏鉢下部には細かい布目の圧痕と皺が観察でき、型による成形であることがわかる。大きさは伏鉢の径4.5cm, 高さ2.5cmをはかる。鐙は全周あるいは大半を欠失している。この2例は形態・釉調ともよく似通っており、同一の型による製品である可能性がある。bは上記2例と同じ製法で形態もよく似ているがやや小型のもの。釉調は濃緑色で、やはり鐙を欠失し底部の釉も磨滅している。大きさは伏鉢の径4cm, 高さ2.2cmをはかる。cは上記3例と形態も製法も異なる。伏鉢が鐙から緩やかな曲線を描いて立ち上がる形態をもち、全面に回転台による横撫での痕跡が残り、底部の糸切り痕は撫で消す。釉は鮮やかな淡緑色を呈し、底面にもおよぶ。大きさは全径6cm, 伏鉢径3.5cmで、頂部を欠失しているため高さは不明である。

同様な円塔は京都大学構内を含めて京都府岡崎の白川地区周辺に出土が集中するが、平安京内や鳥羽離宮跡のほか奈良県、愛知県や岩手県からも発見されている〔早野97〕。その形式には型作りのもの、回転台成形のもの、無釉のものなどさまざまである。これらの円塔は大治3(1128)年、法勝寺における法会のさい、白川法皇が供養した18万余基の円塔に比定されるものであるが〔西田25〕, 時期が特定できないものも多く、具体的な使用法や流通あるいは形態や製法の全容を明らかにするには、まだ資料が不十分である。今後の調査に期待したい。

搬入土師器 今回の調査では中世の遺構から、回転台による成形で底部に糸切り痕を残し、灰白色を呈する土師器が13世紀前葉～中葉の遺物と共伴して多数出土した。胎土は粗く気泡を多く含んで硬質に焼成され、明らかに京都産の土師器と異なる特徴をもつ。こ

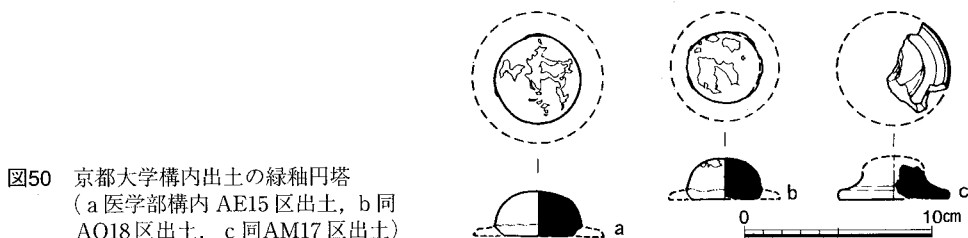


図50 京都大学構内出土の緑釉円塔
(a 医学部構内 AE15 区出土, b 同
AO18 区出土, c 同 AM17 区出土)

これらの土師器は2つの器形があり、口径13～14cm器高3.5cmの杯と口径8～9cm器高1.5cmの皿がこれにあたる。出土状況を見ると、完形かそれに近い形で一括してまとまった量を投棄しており、複数の遺構にまたがる。同様の土器は隣接する218地点で出土したほか、本調査区南方約1.1kmの白川街区跡でも完形の回転台土師器が土坑から一括出土しており、調査者は12世紀後半の年代を与えている〔吉村96〕。これらの出土状況や、胎土が白色系の色調を呈することなどから、祭祀などで使用されたあと一括廃棄されたものとかんがえられる。しかし、現在のところ産地をはじめ、搬入された目的や具体的な用途は不明とせざるをえない。今後の資料の増加をまって再検討したい。

なお、先史時代の自然流路について竹村恵二氏（本学大学院理学研究科）、中世の搬入土師器について吉村正親氏（京都市埋蔵文化財研究所）にそれぞれ御教示を得た。末尾ながら、感謝申し上げます。

発掘調査と整理調査は古賀と吉田広が担当した。測量・実測などの作業は、西調査区では下坂澄子・柴垣理恵子・中井淳史・安見昌幸・飛知和東子・大岡由記子・鈴木雅美が、また東調査区では磯谷敦子・柴垣・長尾玲・伊藤休一・佐藤啓介が補助した。

参 考 文 献

- 石山志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 石田茂作編 1972年 「焼物の塔」『塔』日本の美術第77号
- 泉 拓良 1980年 「北白川上層式土器の細分——京都大学教養部構内 AO24 区出土の縄文土器を中心に——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 1981年 「金属器、土製品、石製品」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白川北殿北辺の調査——』
- 1983年 「京都大学教養部構内 AO21 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 1985年 「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ——北白川追分町縄文遺跡の調査——』
- 五十川伸矢 1981年 「京都大学本部構内 AT27 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 1983年 「京都大学本部構内 AX28 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 1986年 「京都大学医学部構内 AN20 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 1994年 「京都大学構内の梵鐘鑄造遺構」『月刊文化財』第374号
- 五十川伸矢・伊藤淳史・伊東隆夫 1995年 「京都大学医学部構内 AM17 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 五十川伸矢・飛野博文 1984年 「京都大学教養部構内 AP22 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 五十川伸矢・宮本一夫 1988年 「京都大学医学部構内 AN18 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 伊藤淳史 1995年 「京都大学構内遺跡における弥生前期水田の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第58号
- 上原真人 1994年 「瓦と瓦窯の変遷——前期の瓦——」『平安京提要』
- 1995年 「京都における鎌倉時代の造瓦体制」『文化財論叢Ⅱ』（奈良国立文化財研究所）
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告 第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第16冊
- 1936年 「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第7輯
- 宇野隆夫 1981年 「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白川北殿北辺の調査——』
- 宇野隆夫・岡田保良 1979年 「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』

参 考 文 献

- 岡田保良 1980年 「平安時代鴨東白河の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 小野山節 1968年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部日本歴史時代
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 川上 貢 1977年 「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会)
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大百年史編集委員会編 1998年 『京都大学百年史写真集』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊——京大農学部遺跡 BG36 区——』
1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白川北殿北辺の調査——』
1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ——北白川追分町縄文遺跡の調査——』
1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
1990年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
1991年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ——京都大学病院構内遺跡の調査——』
1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
1993年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
1995年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
1997年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
1998年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 京都市文観局(京都市文化観光局)
1991年 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』
- 京都市文化市民局 1996年 『京都市遺跡地図』
- 京都市編 1983年 『史料 京都の歴史』第2巻 考古
- 京都市埋文研(京都市埋蔵文化財研究所)
1980年 『板東善平収蔵品目録』
1982年 『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』
1987年 『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報 昭和61年度』
- 古代学協会・古代学研究所編 1994年 『平安京提要』

参 考 文 献

- 小森俊寛・上村憲章 1996年 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（京都市埋蔵文化財研究所）
- 近藤喬一編 1978年 『平安京跡研究調査報告』第4輯
- 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
- 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦 1929年 「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号
- 神陵史資料研究会編 1994年 『資料神陵史』
- 竜子正彦 1997年 「京都大学北部構内遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』
- 田辺昭三 1966年 『陶邑古窯址群Ⅰ』
- 千葉豊・伊藤淳史・古賀秀策 1997年 「京都大学本部構内 AU30区・AV30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
- 千葉豊・吉井秀夫・小崎隆・矢内純太・藁科哲男 1997年 「京都大学本部構内 AW25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
- 長戸満男・竜子正彦・尾藤徳行 1997年 「京都大学構内遺跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
- 奈良国立文化財研究所 1976年 『平城宮発掘調査報告』Ⅶ
- 植崎彰一 1983年 「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ
- 西田直二郎 1925年 「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊
- 西田泰民 1992年 「縄文土瓶」『古代学研究所研究紀要』第2輯
- 橋本久和 1992年 『中世土器研究序論』
- 浜崎一志 1983年 「浄蓮華院と吉田構——応仁の乱後の吉田の復元的考察——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
1984年 「京都大学病院西構内 AF15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 早野浩二 1997年 「緑釉円塔」『埋蔵文化財愛知』no.47（愛知県埋蔵文化財センター）
- 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）
1978年 「北白川扇状地と京都大学構内遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 平安博物館 1977年 『平安京古瓦図録』
- 間壁忠彦 1991年 『備前焼』（考古学ライブラリー60）
- 山本雅和 1996年 「中世京都の堀について」『研究紀要』第2号（京都市埋蔵文化財研究所）
- 横山浩一・佐原眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代
- 吉村正親 1996年 「白川街区跡」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』

京都大学構内遺跡調査要項 1995年度

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

- 第1条 京都大学に埋蔵文化財研究センター（以下「センター」という。）を置く。
- 第2条 センターは、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行なう。
- 第3条 センターにセンター長を置く。
- 2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長は、センターの所務を掌理する。
- 第4条 センターに、必要に応じて、助教授、助手その他の職員を置く。
- 第5条 センターに、調査研究及び保存に関する業務を処理するため、研究部を置く。
- 2 研究部に主任を置き、前条の教官をもって充てる。
- 3 主任は、研究部の業務をつかさどる。
- 第6条 センターにセンターの事業に関する基本的計画、人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため、運営協議会を置く。
- 2 運営協議会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
- (1) センター長
- (2) センターの研究部の主任
- (3) 前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者 若干名
- (4) 事務局長及び施設部長
- 3 センター長は、運営協議会を招集し、議長となる。
- 4 前各項に規定するもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、運営協議会が定める。
- 第7条 この要項に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長

山中 一郎（文学部教授 1995.4.1～）

運営協議会委員

大山 喬平（文学部教授）

鎌田 元一（文学部教授）

石田 英實（理学研究科教授）

西村 進（理学研究科教授）

瀬戸口烈司（理学研究科教授 1995.4.1～）

高橋 康夫（工学部教授）

足利 健亮（人間・環境学研究科教授）

伊東 隆夫（木質科学研究所教授）

清水 芳裕（文学部助教授）

中林 勝男（事務局長 1995.4.1～）

吉本 亮三（施設部長）

研究部主任

清水 芳裕（文学部助教授）

同 研 究 員

五十川伸矢（文学部助手）

千葉 豊（文学部助手）

伊藤 淳史（文学部助手）

古賀 秀策（工学部助手）

吉田 広（文学部助手）

磯谷 敦子（施設部教務補佐員）

中田 敬子（施設部教務補佐員）

柴垣恵理子（施設部教務補佐員

1995.4.1～）

事 務 室

松本 一代（施設部事務補佐員）

京都大学構内遺跡のおもな調査

表4 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京)
(大埋文研, 「調」は京大調査会をさす。)

年度	遺跡 調査 地名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表採・試掘			縄文土器, 石器	梅原23, 島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・ 佐原60	
1929	大阪府 満		島田貞彦 水野清一 ほか	発掘			弥生土器	島田・ 水野ほか 29	
1934	大阪府阿 武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺・玉 飾枕	梅原36	
1935	北白川 小倉町		梅原末治				縄文土器, 石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒		
	大阪府 満		小野山節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・ 都出73	建物をずらし条里の溝を保存
	追分地蔵	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田・ 中村72	
	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採 集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73	
	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕 棺・配石遺 構	縄文土器	中村74b, 泉77	甕棺・配石 遺構の移築 を決定
1974	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山節 中村徹也	事前発掘	750		土師器,瓦, 陶磁器	小野山・ 中村76	
1976	農学部 BE33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土 墳墓	縄文土器, 土師器,瓦	調77	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査区	地点	担当者	調査の 種類	面積 (m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1976	病院 AE15区	19	岡田 保良	事前発掘	2200	古代・中世 溝、池、土 器溜	土師器、瓦、 陶磁器	調77, 埋81 a	
	植物園 BD35区	29	吉野 治雄	保 存				調77	墓棺・配石 の移築復原
	病院 AH17区	34	泉 拓良	事前発掘	200	近世溝、井 戸、集石	土師器、瓦	埋78 a	
	教養部 AS23区	35	吉野 治雄	試 掘	10	溝	縄文土器、 須恵器	埋77	
	北部 BJ33区	36	宇野 隆夫	試 掘	10		縄文土器	埋77	
	和歌山県 瀬戸		丹羽 佑一	事前発掘	300	縄文時代土 壙墓	縄文土器、 人骨	埋78 a	
1977	病院 AF14区	39	岡田 保良 宇野 隆夫	事前発掘	800	古代護岸、 溝、井戸	土師器、瓦、 陶磁器	埋78 a, 埋81 a	
	医学部 AO18区	41	泉 拓良 吉野 治雄	事前発掘	1200	中世溝、土 器溜、井戸	土師器、瓦、 陶磁器	埋79	
	北電管	43	吉野 治雄 宇野 隆夫	立 合		溝、土坑	須恵器、土 師器	埋78	
	教養部 AQ23区 AN23区	48	宇野 隆夫	試 掘	80	溝	弥生土器、 土師器、瓦	埋79	
	白河北殿 比定地 AA18区	49	岡田 保良	試 掘	40	溝	土師器、瓦、 陶磁器	埋79	
1978	理学部 BE29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方 形周溝墓、 中世火葬塚	弥生土器、 土師器、瓦	埋79	火葬塚と方 形周溝墓を 現地保存
	農学部 BG32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑、 古代溝、土 坑	縄文土器、 土師器	埋79	
	北部 BG31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋 没林	縄文土器	埋80, 埋85	
	本部 AW28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器、土 師器、銭貨	埋80	
	本部 AY22区	60	泉 拓良	立 合		高野川旧河 道		埋79	
	病院 AN19区	64		立 合		井戸、溝	弥生土器	埋79、 埋80	
1979	北部 BH37区	66	吉野 治雄	試 掘	46	土坑	土師器、須 恵器	埋80	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1979	教養部 AM24区	69	岡田 保良 清水 芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
	本部 AT29区	70	吉野 治雄	試掘	28	溝, 土坑	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 瓦	埋80	
	本部 AZ30区	71	西川 幸治 浜崎 一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
	医学部 AP19区	74	清水 芳裕 五十川伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81 b	
	本部 AT27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期竪穴住居, 中世土墳墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81 b	竪穴住居跡を現地保存
	北部 BD32区	79	泉 拓良	立合			瓦 (平安)	埋80	
1980	本部 AT27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81 b	
	本部 AX28区	90	泉 拓良 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃 (弥生), 磨製石鏃	埋83	
	京都府 美月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立ち合い調査中に遺跡を発見, 工事を中断し発掘調査
	教養部 AO21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土墳墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
	教養部 AM22区	93	吉野 治雄	立合		火葬墓, 石列	瓦器, 陶器	埋81	
	本部 実験排水	98	清水 芳裕	立合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 BD30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	
	和歌山県 瀬戸		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代土坑	縄文土器, 硬玉管玉, 弥生土器, 製塩土器	埋84	
	本部 AX28区	110	浜崎 一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 硯	埋83	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1981	教養部 AP22区	111	五十川伸矢 飛野 博文	事前発掘	1716	古墳，古代 梵鐘鑄造遺 構，中世門， 溝，墓	縄文土器， 弥生土器， 須恵器，土 師器，鋳型， 溶解炉	埋84	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
	京都市 本 山			分布調査			縄文土器， 緑釉陶器， 灰釉陶器	埋83	
1982	京都府 中海道		泉 拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器， 土師器	埋84	
	病院 AF15区	122	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	1028	中世井戸， 溝，土坑	土師器，瓦 器，白磁	埋84	
	農学部 BF33区	123	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	787	縄文住居跡， 中世土坑	縄文土器， 土師器	埋84	
	和歌山県 瀬 戸		泉 拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器， 弥生土器， 製塩土器	埋84	古代製塩炉 を移築保存
	本部 AT29区	124	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	890	中世濠，建 物	土師器，瓦 器，陶磁器	埋86	
	農学部 BE33区	125	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	803	中世・近世 水田，溝	土師器，瓦 器，陶磁器	埋86	
1983	医学部 AN20区	134	泉 拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸， 土取り穴	須恵器，瓦 器，土師器	埋86	
	北部 BF31区	135	清水 芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林， 古代・中世 溝	縄文土器， 土師器，緑 釉陶器	埋87	
	医学部 AM19区	139	泉 拓良 浜崎 一志	立 合		中世土取り 穴	土師器，瓦 器，石鍋	埋86	
1984	病院 AF19区	141	浜崎 一志 宮本 一夫	事前発掘	863	近世池，井 戸，野壺	縄文土器， 蓮月焼	埋87	
	病院 AJ19区	142	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	260	中世土坑， 近世土取り穴	土師器，近 世陶磁器	埋87	
	医学部 AN18区	143	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	1920	中世井戸， 土取り穴， 中世梵鐘鑄 造遺構	土師器，瓦 器，鋳型	埋88	
1985	北部 BJ31区	153	清水 芳裕 宮本 一夫	事前発掘	624	古代溝，建 物跡，土坑， 近世溝	弥生土器， 土師器，須 恵器	埋88	
	病院 AJ18区	154	清水 芳裕 浜崎 一志 菱田 哲郎	事前発掘	4295	中世井戸， 近世土取り 穴	土師器，近 世陶磁器	埋89	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1985	病院 AJ19区	155	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	3000	中世井戸, 近世土取り 穴	土師器, 近 世陶磁器, 鋳型	埋89	
1986	教養部 AP25区	167	清水 芳裕 宮本 難波 洋三	事前発掘	599	中世・近世 溝	土師器, 近 世陶磁器	埋89	
	本部 AX30区	168	清水 芳裕 難波 洋三	事前発掘	330	古代土坑, 中世道	土師器, 陶 磁器	埋89	
	医学部 AL20区	169	浜崎 一志 難波 洋三	事前発掘	331	近世土取り 穴	土師器, 陶 磁器	埋90	
	教養部 AL23区	170	清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志	試掘	24	中世溝	土師器, 瓦 器, 陶器	埋89	
1987	北部 BD33区	180	浜崎 一志 難波 洋三	事前発掘	618	土坑, 河川	縄文土器, 土師器, 須 恵器	埋90	
	本部 AW27区	181	五十川伸矢 千葉 豊	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器, 土師器, 陶 磁器	埋92	
	本部 AT25区	188	清水 芳裕	立合		近世尾張藩 邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 AR19区	190	清水 芳裕 森下 章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器, 瓦, 陶磁器	埋92	
	病院 AH19区	191	浜崎 一志 千葉 豊 森下 章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋93	
	病院 AE12区	192	千葉 豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	598.5	近世道路, 溝, 野壺, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋93	
1989	病院 AE13区	198	千葉 豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸, 野壺, 欄列	土師器, 陶 磁器, 瓦	埋93	
1992	病院 AG14区	200	千葉 豊 森下 章司	事前発掘	393.5	近世井戸, 道路	土師器, 陶 磁器	埋95	
	教養部 AR21区	202	五十川伸矢 浜崎 一志 森下 章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 AM17区	207	五十川伸矢 森下 章司	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器, 陶 磁器	埋95	
	北部 BA28区	208	浜崎 一志 千葉 豊	事前発掘	1242	噴砂, 古代 埋納遺構, 近世堀	縄文土器, 土師器, 陶 磁器, 棧瓦	埋95	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1992	和歌山県 瀬戸	213	浜崎 一志 伊藤 淳史	立 合		縄文包含層	縄文土器, 石器	埋95	
	本 部 AV30区	214	千葉 豊 伊藤 淳史	事前発掘	1480	中世砂取り穴, 近世野壺	土師器, 陶 磁器	埋97	
1993	北 部 BB28区	217	清水 芳裕 古賀 秀策	事前発掘	1323	古代溝, 中 世土坑	土師器, 陶 磁器	埋97	
	本 部 AW25区	218	千葉 豊 吉井 秀夫	事前発掘	929	中世井戸, 濠, 溝, 土 坑	縄文土器, 石器, 土師 器, 陶磁器	埋97	
	本 部 AU30区	219	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	1074	弥生流路, 古代溝, 中 世土器溜	弥生土器, 土師器, 陶 磁器	埋97	
	総合人間 学 部 AO22区	220	五十川伸矢 伊藤 淳史	事前発掘	4080	弥生水田, 古代梵鐘鑄 造遺構, 中 世井戸, 溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶 磁器	第2章	
	北 部 BF34区	221	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	1228	古代土器溜, 土坑, 中世 近世道路	土師器, 陶 磁器, 瓦	埋98	
	病 院 AF12区	222	伊藤 淳史	試 掘	112.5	近世道路	土師器, 陶 磁器	埋97	
	北 部 BF30区	229	千葉 豊 古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴, 弥生方形周 溝墓, 平安 土壇墓	縄文土器, 弥生土器, 土師器	埋98	
1994	本 部 AX25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝, 土 器溜	土師器, 陶 磁器	第3章	
	総合人間 学 部 AR25区	238	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓, 古代溝, 土坑, 中世溝, 土坑	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器		発掘中
1995	病 院 AG20区	239	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	2260	縄文流路, 弥 生流路, 中世 井戸, 近世大溝	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器		発掘中
	病 院 AF20区	240	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	280	近世池, 土 坑	土師器, 陶磁 器, 連月焼		発掘中
	本 部 AX26区	241	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	627	中世大溝, 近世柵列	土師器, 陶 磁器	第3章	
	北 部 BD34区	242	千葉 豊	立 合					
	本 部 AW29区	243	古賀 秀策 吉田 広	立 合					

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1995	本部 AW29区	244	清水 芳裕 古賀 秀策	立 合					
	北部 BC32区	245	五十川伸矢	立 合					古代包含層
	本部 AY26区	246	古賀 秀策	立 合					
	病院 AF16区	247	千葉 豊	立 合					

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうこうないいせきしょうさけんきゅうねんぼう1995ねんど							
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報1995年度							
編著者名	山中一郎, 清水芳裕, 千葉 豊, 伊藤淳史, 古賀秀策, 富井 眞							
編集機関	京都大学埋蔵文化財研究センター							
所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-7691							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
総合人間 学部構内 AO22区	京都府京都市左京区 吉田二本松町	26100	—	35° 1' 15"	135° 46' 55"	1993 1111 1994 0922	4,080	人間・環境 学研究科校 舎新営に伴 う発掘調査
本部構内 AX25区 AX26区	京都府京都市左京区 吉田本町	26100	—	35° 1' 25"	135° 47' 0"	1995 0307 1996 0315	1,941	文学部校舎 新営に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
総合人間 学部構内 AO22区	生産址	弥生時代	水田		縄文土器, 弥生土 器, 埴輪, 須恵器, 土師器, 瓦器, 陶 器		弥生前期の水田, 平安中期の梵鐘鑄 造土坑	
	墓 地	古墳時代	方形墳 1					
	集落跡	奈良時代	堀立柱建物 1					
	生産址	平安時代	梵鐘鑄造土坑 4					
	集落跡	鎌倉～室 町時代	井戸 多数 砂取り穴					
本部構内 AX25区 AX26区	散布地	縄文時代			縄文土器, 石器, 須 恵器, 土師器, 瓦器, 黄釉・褐釉陶器, 青 磁, 白磁, 緑釉円塔, 瓦, 陶磁器		古墳末期の土坑墓, 鎌倉時代の溝群と 土器溜	
	墓 地	古墳時代	土壙墓 2					
	集落跡	鎌倉時代	溝 多数 土坑 多数					
	田 畑	江戸時代						

第Ⅱ部 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要 XⅢ

北白川追分町弥生時代遺跡の展開

伊藤 淳史

北白川追分町弥生時代遺跡の展開

——京都大学北部構内 BA30 区（追分地蔵地点）の出土資料——

伊藤 淳史

1 はじめに

比叡山西南麓に点在している先史時代の遺跡群のうち、京都大学北部構内に所在する遺跡は、その地名にちなんで、とくに「北白川追分町遺跡」と呼ばれている（以下、「追分町遺跡」と略記する）。縄文時代中期末の住居跡、後期の甕棺・配石墓、晩期の埋没林などの各時期の遺構や豊富な出土遺物によって、近畿地方を代表する縄文時代遺跡のひとつとして、良く知られているところである。しかしながら、それにひきつづく弥生時代前期における遺跡のありようについては、土器の出土や包含層のひろがり具合から、そのまま継続して活動の地となっているとみられるにもかかわらず、目立った遺構がみつかっていないこともあって、深く関心を寄せられることはなかった。ゆえに本稿では、弥生時代前期に関係する調査成果を中心にあらためて検討を加えて、水稻農耕の定着にともなう社会変動が生じたと予想される弥生時代のはじまりにおいて、追分町遺跡というひとつの空間内で暮らしてつづけていたであろう集団にどのような変化が起こり、またそれが何を背景としていたのかを考えることにしたい。

具体的には、まず、遺跡内で実施された発掘調査のうち、弥生時代前期の土器が最も良くまとまって出土している BA30 区の出土資料を紹介検討する（図51-6 地点、以下各調査の番号と位置は図51を参照）。この調査は、1972年10～11月にかけて、理学部事務棟の建設に先だって実施されたもので、京都大学が主体となって構内でおこなったはじめての調査であるとともに、北白川追分町遺跡としても実質上最初の本格的発掘調査である⁽¹⁾。調査成果は、『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』（1972年11月、以下『概報』と略記）として発表されているが⁽²⁾、残念ながら多くの人の目に触れるような出版物とはなっておらず、出土遺物の内容も簡略な記載にとどまった。北部構内では唯一量的にまとまった前期の資料でありながら、その後一部が紹介されただけで現在に至っており⁽³⁾、該期の追分町遺跡を考える上では、全容を明らかにしておくことが必須の資料であると考えられる。なお、後にも触れるが、1995年には京都市埋蔵文化財研究所によって南に隣接する今出川通り内が調査され、前期の土器が再び大量に出土したばかりか、土器棺墓や土壙墓とみるべき遺構がはじめて確認されている（A 地点、a が土器棺墓、b が土壙墓）⁽⁴⁾。その成果

と比較検討するうえでも、過去の重要調査の内容を明らかにしておくことは必要であろう。

そして次には、上述の作業により得られた情報も加えて遺跡内の調査成果を整理し、追分町遺跡において、おおむね縄文時代晩期～弥生時代前期という時間幅で、人々の活動の中心がどこに想定され、またそれがいかに変遷しているのかを見、その事象のもつ背景や意義を考えていくことにしたい。もちろん、ひとり北白川追分町のみで完結して人々が活動していたと考えているわけではなく、例えば比叡山西南麓といった範囲の空間に存在する他の弥生前期の集団の動向、さらには京都盆地全域といったひとつの地域全体での動向とも密接に関係していただろう。これらの点についても、かつて拙い論考で若干触れたことはあるが⁽⁵⁾、いくらかの見通しを得るようにしたい。

なお本稿では、いわゆる遠賀川式土器は弥生時代前期の土器、突帯文土器はすべて縄文時代晩期の土器として記述する。双方の存在時間が一部重複する可能性はかなり高いものと考えているけれども、ひとえに記述の繁雑さと混乱を避けるための便法と了解されたい。また、京都大学が主体となって実施した調査については、これ以後、埋蔵文化財研究センターで用いているアルファベットと数字で表す地区名称や通算の調査回数と一致する固有の地点番号で示す。紙幅の都合から報告文献を逐一示さないけれども、毎年度の年報所収の図版1および調査一覧表をご参照願いたい。

2 1972年北部構内BA30区（追分地蔵地点）の発掘調査

(1) 調査の概要（図51～53・図版23）

出土資料の呈示に先だって、概報の記述を参考に発掘調査の概略を述べておこう。

調査区の位置と環境 調査区は、北部構内の南端に位置する。地勢の総体的な傾向として北西から南東へ傾斜する白川扇状地の西南の端にあたるが、現地形は東から西への傾斜が卓越しており、標高63m前後。周辺の状況は、1998年までの時点で縄文後期以降の成果が得られている地点を中心に図51に示した。詳細は後述するが、基本的には東西に尾根状にはしる微高地が南北2つあり（北微高地と南微高地）、ここで紹介するBA30区（6地点）や南側のA地点は南微高地の西端にあたと想定される。また、両微高地の間には谷があるとみられ、弥生前期末の土石流の本流が流下したことがわかっている。

なお、この調査地点については、誰ともなく慣習的に「追分地蔵（地点ないし遺跡）」と呼ばれてきており、公的な名称では全くないが、以後併記する。敷地内の東南の一角に、小さな石仏等が多数集められた祠が建っていることに由来する名称だろう。これらの石仏

1972年北部構内 BA30 区（追分地蔵地点）の発掘調査

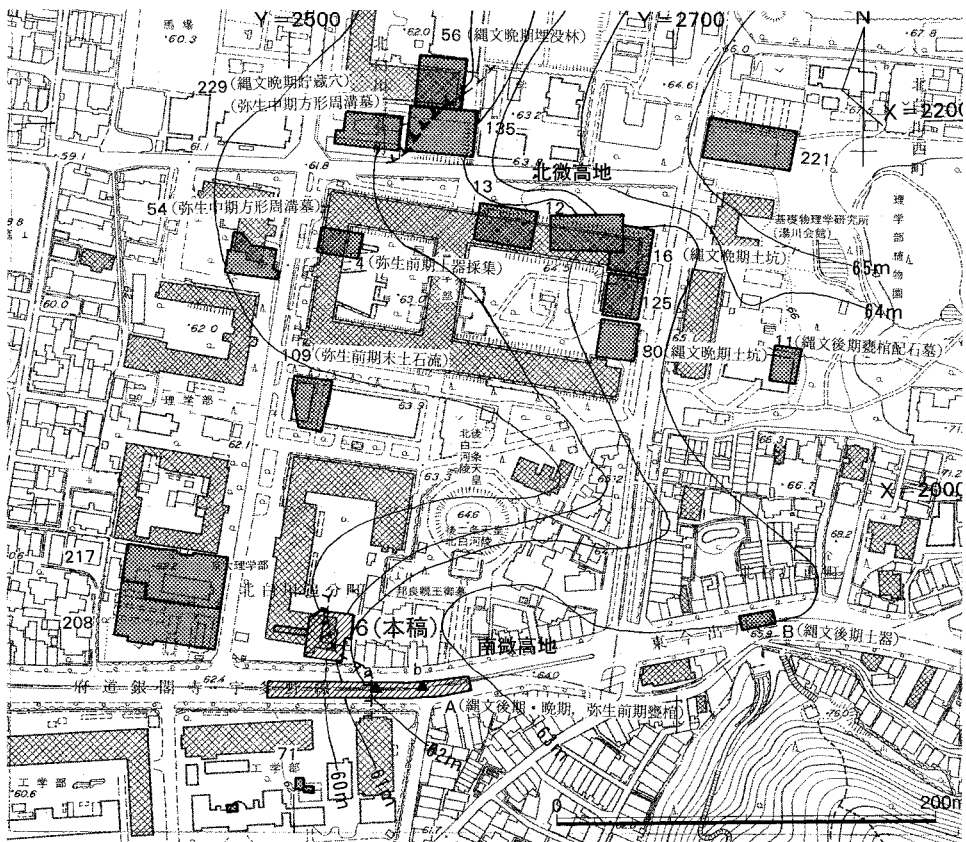


図51 調査区の位置と関連地点（等高線は弥生前期の想定地形） 縮尺1/4000

等は、1921（大正10）年における地質鉱物学教室の建設工事に際して近辺で出土したものが集められた、とも言われているが、記録は全く残されていない⁽⁶⁾。

調査の経緯と経過 1970年代にはいり、北部構内では農学部校舍群の改築が進んでおり、石棒や弥生前期土器の底部が採集されるなど（4地点）、遺跡が存在しているという認識が高まりつつあった。ただし面的な広がりには把握されておらず、追分地蔵地点でも、ひとたび建設工事が開始され、地表下1.5mまで掘削が進んで土器の出土をみたところで中断し、発掘の体制がとられるに至った⁽⁷⁾。そして、まず、遺跡範囲の確認を目的とした東西方向の長さ42mのトレンチと5ヶ所の試掘坑による1次調査が1972年10月25日に実施され、その結果を受けて2次調査が11月9日から22日に実施された。

1次調査では、弥生土器の包含層が現地地表下2.5～2.8mの黑色土層で、建設予定地東北部を中心に残存していることと、その上面に厚さおよそ1.5mの花崗岩質粗粒砂層がのっ

ていることが判明した。したがって2次調査では、調査区を建設予定範囲よりも北と東に拡張して東西24.4m、南北26.3mの600㎡あまりとし、弥生土器包含層の直上までは重機で除去した。その後、遺存の良い東北部分300㎡あまりを中心に人力によって包含層上面を検出し、1.5/9.0mの勾配で西へ落ちる旧地表面を露呈させた。この範囲は、3.0m方眼のグリットを設けて徐々に掘り下げ、遺物を取り上げた。最終的に、包含層下面の地形測量を行うとともに、東西方向に断ち割りのトレンチを入れて下層の堆積状況を調査し、層位を記録した。その際、下層から数片の縄文土器片が出土している。図52・53の地形図と層位図がこの際作成されたもので、概報掲載の図を再トレースした。ただし、国土地標については調査時に設定されていなかったため、京都市埋蔵文化財研究所による南側のA地点の報告から図上で復元し、それを現行の構内座標に変換して示している。

層位と遺構 東西方向の層位は、微高地末端の旧河道の埋積状況を良く示していた。機械により除去した第1層の黄色砂は、弥生前期末～中期初頭の一時期に生じた土石流による堆積で、京都大学構内一帯で広く検出される鍵層である。これにパックされた第2層の上面が、弥生前期末の地表面ということになる。その第2層の黒色土～黒褐色土は、概報で上部包含層として扱われた、弥生前期の遺物包含層である。基本的には黒色系の砂質土で、厚さ約25cmだが、西方では薄くなり、かつ色調も暗褐色と褪せてきて、粘質になってくる。遺物の包含頻度も減る。これより下層は、第3・4層の砂層を介在して、縄文後期の土器を微量包含する第5層の暗褐色粘質土が堆積しており、下部包含層として扱われた。この層は、水平堆積している砂層a～g層をえぐった崖際を中心に厚く堆積しており、扇状地末端が浸食された後の安定期に形成された腐植土層と言える。第6・7層の砂層は白川系の旧流路に由来するものとみられ、一方、第9層の礫層は高野川系旧流路の河床礫だろう。すなわちこの地点は、縄文後期以前のある時期、蛇行しながら南流していた高野川系の流路により浸食されて崖面を形成していたが、その後、扇状地内を流れる白川系流路により砂が運ばれるなどして、縄文晩期を迎えるころにはほぼ埋積が完了していたもの、と理解される⁽⁸⁾。実際、西側に約60m離れた208地点や、南側に約100mの71地点での黄色砂直下の標高は59.5～59.7m程度であり、この調査区西端との比高差は50cmにも満たないので、西方～南方にかけては弥生前期の段階にはかなり広く平坦な低地がひろがっていたとみてさしつかえない。ちょうど調査区一帯が、東方の微高地から下ってくる斜面と、西方の平坦な低地との、地形の変換点にあたっていたのである。なお北微高地の56・135地点でも、同様な微高地末端の地形が確認されている（図51破線部分）。

1972年北部構内BA30区（追分地蔵地点）の発掘調査

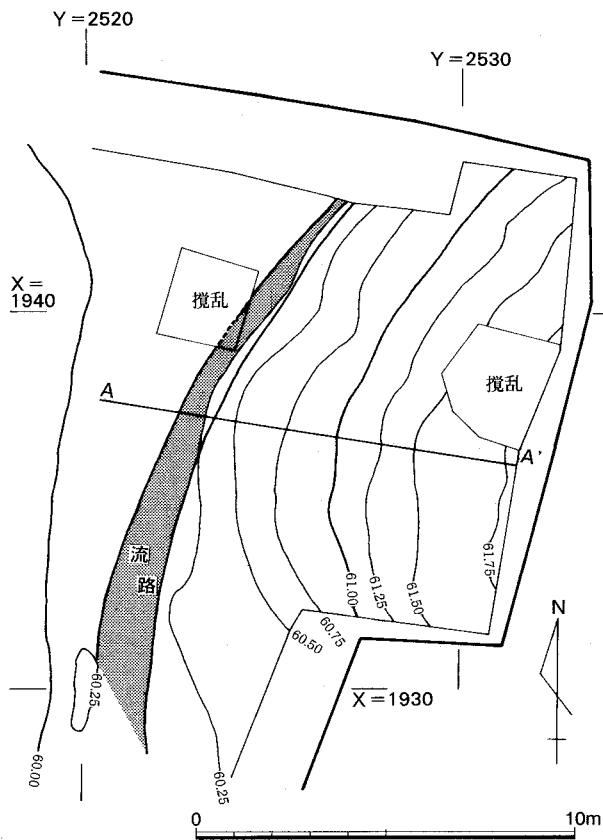


図52 上部包含層（黒色土～黒褐色土）掘りさげ後の地形 縮尺1/200

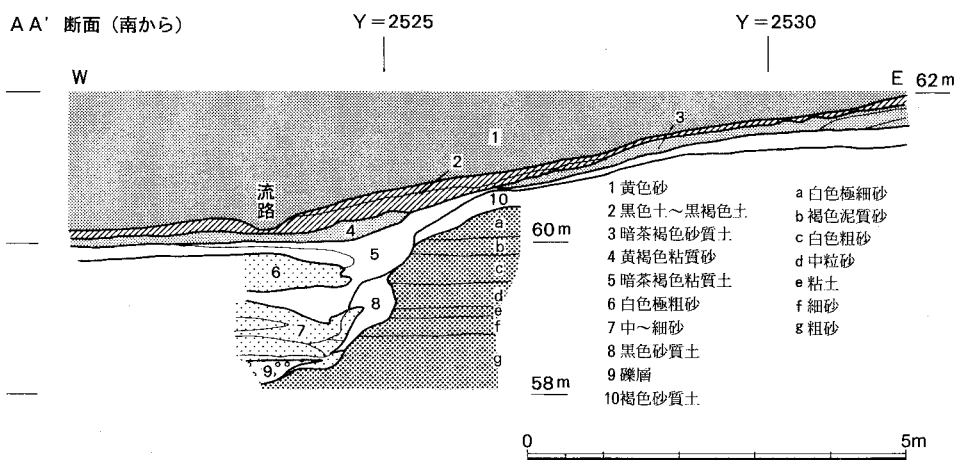


図53 東西方向の層位 縮尺1/100

遺構としては、第2層上面に南北方向にはしる浅い流路状のものが検出されているほかは、顕著なものは無い。ただし、南接するA地点では縄文後期・晩期・弥生前期各期の土器棺墓や土坑が見つかっており、特に縄文後期・晩期の遺構や遺物の出土は東方の微高地上にはば限られる状況が明らかとなっている。このことから、追分町遺跡の範囲が、弥生前期については今回の調査地をも含む形で広くとらえられるのに対して、それに先行する時期は微高地上のみにば限られている、ということがわかる。

(2) 出土遺物（表5，図54～60，図版24～27）

追分地蔵地点の出土遺物の大半は、第2層中より出土した土器である。3×3mグリッドで取り上げられていた土器類は、注記と接合がされておおよそ器種別に収納されていたが、今回内容を確認したところ、まだかなり接合することがわかったので、有文破片や口縁部や底部を中心にあらためて接合作業を実施した。その後に点数のカウントを行い、結果を表5に示した。特徴から明らかに縄文晩期以前とみなせるものはごくわずかしき無く、大半が弥生前期のいわゆる遠賀川式土器である。総破片数の8割以上が無文の破片であるため、このなかにはいずれとも判別しがたいものも若干含まれているが、大きく傾向は変わらないものと判断している。

破片数カウント後、口縁部・底部・有文破片はすべて実測・採拓し、個々に固有の番号をつけて登録した。本稿では、小破片の一部を除いてほとんどを図示する。器種構成などの検討は後述するとして、まずおおむね時代・種類別に説明しよう。

a. 縄文時代後期の土器（1～12）

10・11のみ下層の第5層からの出土で、それ以外は第2層中で混在して出土したとみられる。いずれも小さな破片で、厳密な所属型式の判別は難しいけれども、おおむね後期前葉の北白川上層式1期ごろを中心とするようだ。薄手の小さな破片5は、浅い沈線内に押し引き状の刺突が認められるので、それより下る時期の可能性もある。縄文はRL（1・2・6）がLR（7）よりも目立つようである。9は中央を小さく円錐形にえぐった瘤状の装飾で、瘤の表面には縄文が施文されている。有文深鉢の肩部付近であろうか。11・12は粗製深鉢の口縁部片で、いずれも器表面をなでて仕上げる。11はやや厚手で口唇部が弱い面を成すが、12は薄手で細く尖る口縁であり、かつ角閃石を多く含む胎土である。

b. 縄文時代晩期の土器（13～19）

いずれも第2層中で弥生前期の土器と混在して出土。晩期末の刻目突帯文土器を中心とする。13は滋賀里Ⅳ式の精製浅鉢の口縁部。口唇は幅広く面をとり、内外面とも端部から

1972年北部構内 BA30 区（追分地藏地点）の発掘調査

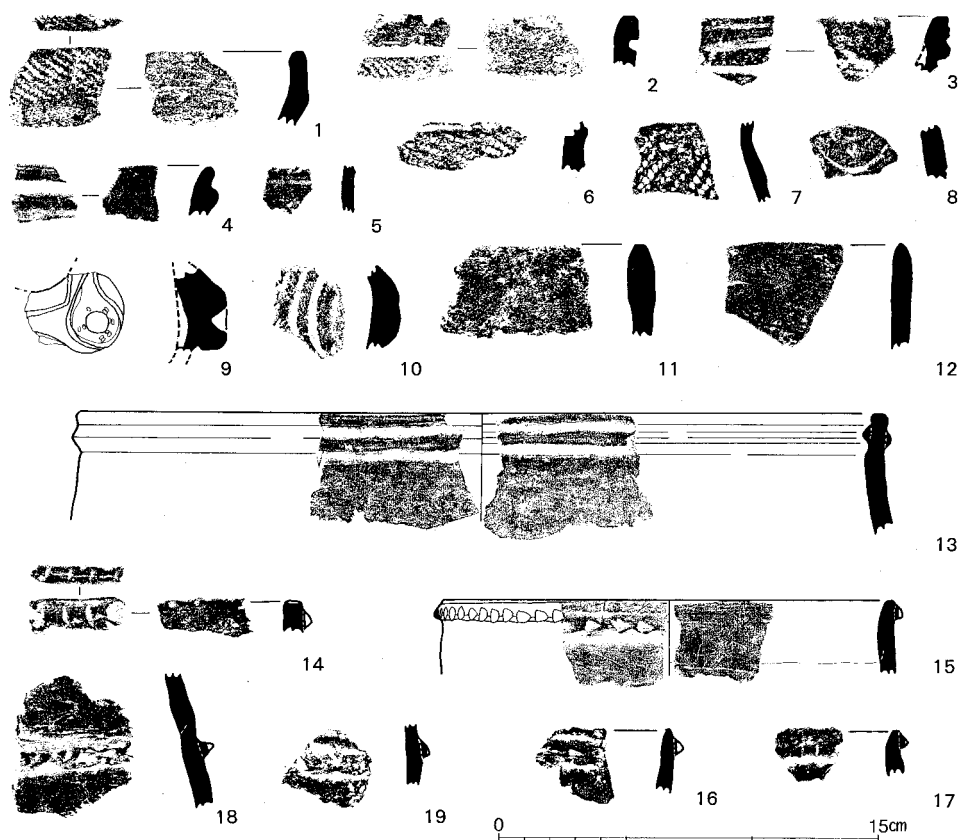


図54 BA30区出土縄文時代後期・晩期土器 縮尺1/3

やや下がった位置に紐状の突帯を貼り付け、全面を横位方向に丁寧に磨く。とくに内面側の突帯は、上下を粗く磨いて浮彫風の造出を意識している点に注意される。14は同じ滋賀里Ⅳ式の深鉢口縁部とみられ、面をとった口唇部には浅い押し引き状のD字刻みが、端部からやや下がって貼り付けられた断面三角形の突帯上には細いV字刻みが施される。15～17も深鉢の口縁部で、丸く収めた口唇部に接するように刻目突帯が貼り付けられ、船橋式ないし長原式だろう。15・16はD字、17は細いV字の刻みである。18・19はこうした深鉢の突帯をもつ胴部～肩部破片であり、18の突帯上には鋭いD字刻みが施される。

以上の後期・晩期の土器は、表5に示したように、弥生前期土器に較べて出土量は圧倒的に少ないが、A地点では崖面より上部でこれらの時期の資料がまとまって出土している。本調査区は微高地西端の斜面部にあたり、縄文後期・晩期には明らかに遺跡の主体となる範囲からはずれていたことがわかる。

c. 弥生時代前期の土器 (20~145)

本調査区出土資料の主体を成す。残存率が低く器形や径を復元できた個体は少ないが、器種・部位別に示しておく。以下、壺形土器・甕形土器などはそれぞれ壺・甕と略記する。

壺口縁部 (20~23・37~51) 大きく外反して開く形状で、端部を曖昧に面取りすることを基本としている。44や51のように強く短く外反するものは鉢形土器の口縁かもしれないが、便宜的にここに含めておく。器面調整は内外とも横位の丁寧な磨きであるが、39などに端的に示されるように、外面には縦位の、内面には横位の刷毛目が消し残されている例も多くみられる。37・38・40・50は、口唇部周辺を強めに横撫でし、とくに50は内面側が凹線状にくぼむ。この50は端面にV字状刻みをもつ点でも特異な個体である。ほか端面に文様をもつのは23・48・49の3点のみで、いずれも1条の匏描沈線文である。

壺頸部 (24~26・52~60) 匏描沈線による文様帯をもつものが中心で、24・25・52・53・59は、文様帯の上側や下側を低めた削出突帯となっている。貼付突帯によるものは2点のみで、26は太くしっかりした断面蒲鉾形の突帯に細長いO字刻みを施すもの、60は下書きの匏描沈線1条を深くしっかりと施した上に帯状の粘土帯を貼り付け、中央を横撫でによりへこませることで見かけ上2条に見せている。

壺胴部 (27~34・61~80) 頸部と同じく匏描沈線による文様帯をもつものが中心である。27・28は文様帯の上下側をしっかりと低めた削出突帯で、29・61~65も上側ないし下側の削り出し部分が残存している。27は下端に帯状の剥離痕と下書きの匏描沈線の一端が残り、最大径部付近に貼付突帯もめぐっていたことがわかる。33は複雑な過程を経た特徴的な装飾をもつ。8条の匏描沈線文を施文した後に、上から4条目と5条目の沈線上に突帯を貼り付けてV字に刻み、さらに沈線間に竹管状工具による刺突列を施す。また、最上段の沈線の上側は磨きによって低められている。これらの沈線はいずれも深くしっかりとしたものだが、対照的に細く浅い沈線を多条にめぐらしたものに70や72がある。34ははっきりした匏描沈線が2条まで確認できるが、これに沿った帯状の剥落痕がみられるので、これらは下書きであり、本来的には貼付突帯の個体であったといえる。ほか、貼付突帯で飾るのは77~80がある。77は無刻の、78はV字に刻んだ突帯のようだが、残りが悪い。79は剥落した突帯の小片で、60と同様な見かけ上2条にみえる突帯にV字の刻みを施している。80は横に大きく伸びるレンズ状の押捺に見えるよう成形を施した特異な突帯である。かなり大型の壺になるようだが、裏面が剥離して本来の厚さはわからない。

蓋 (35・36) 35は背の高い笠形の器形と想定され、厚手の器壁で内外両面を丁寧に

1972年北部構内 BA30 区（迫分地蔵地点）の発掘調査

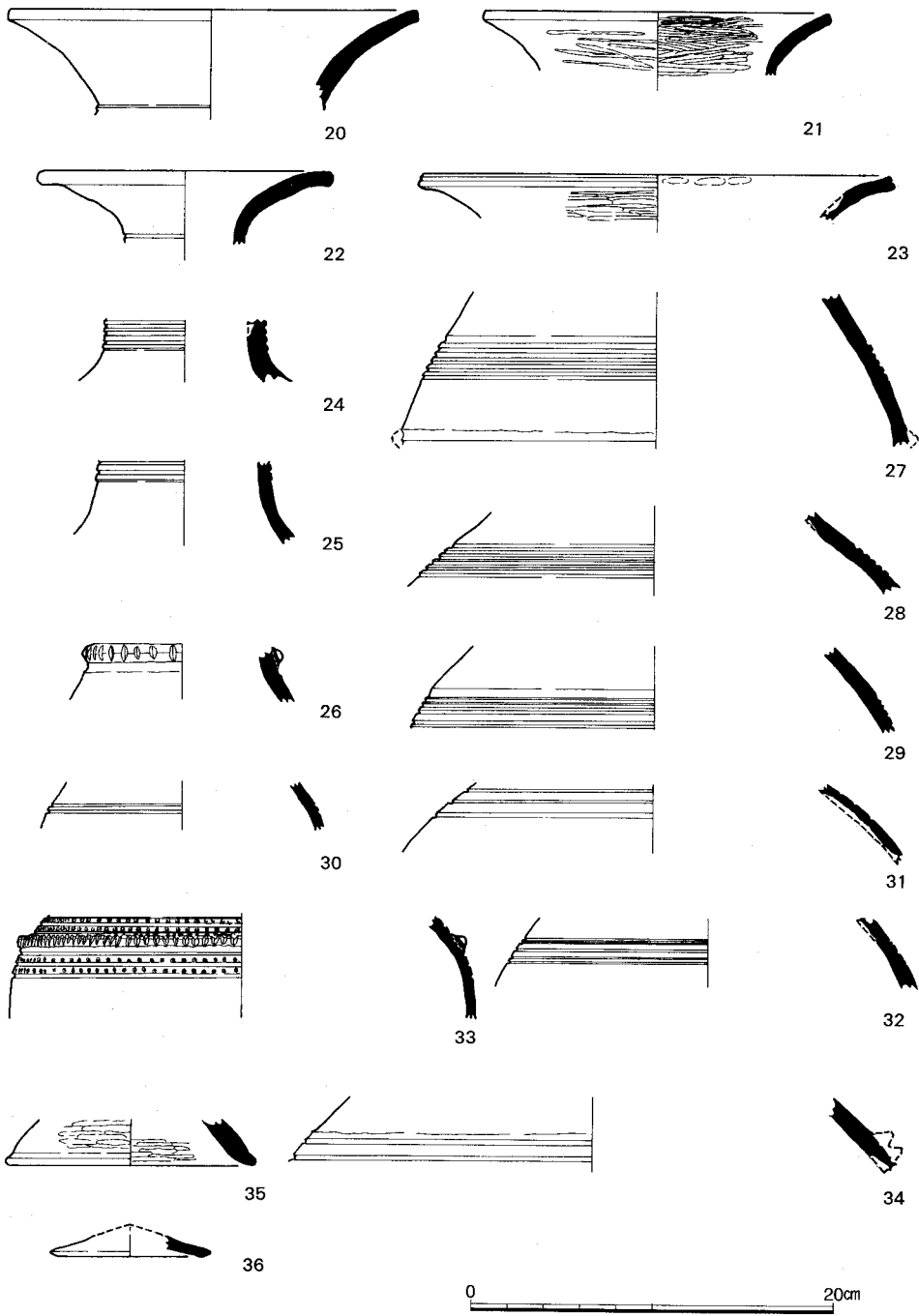


図55 BA30 区出土弥生時代前期土器(1) 縮尺1/4

北白川追分町弥生時代遺跡の展開



図56 BA30区出土弥生時代前期土器(2) 縮尺1/3

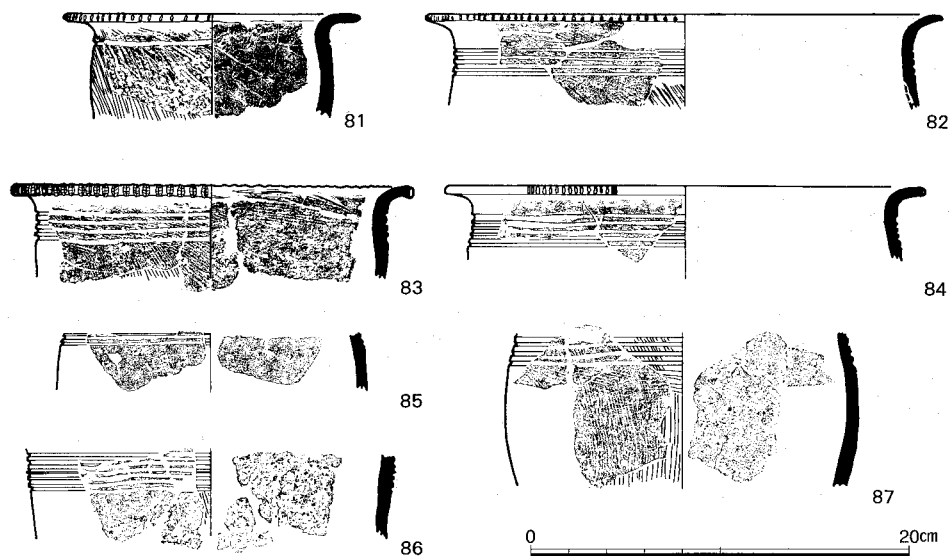


図57 BA30 区出土弥生時代前期土器(3) 縮尺1/4

磨いている。36は薄手で丈の低いもので、ややづくりが粗雑で径も小さい。このほかに、図化できないが蓋らしき小片がもう一点ある。いずれも壺用だろう。

甕口縁～胴部 (81～131) やはり残存が悪く、口径を推定復元できた個体はわずかしかないが、81は15cmあまりの小型品、83は20cmあまりの中型品、82・84は26～28cmの大型品である。器形としては、口縁端部が短く強く外反するものが多く、特に81は水平な鐙状を呈する。ただし、いわゆる「瀬戸内系甕」の範疇に属するものはみられない。また、89や96のように、ごく短く「く」字状に外折するだけのものもある。端部は丸く収めて篋で刻むことが基本だが、88～90は刻みをもたない。なかでも88は、端部をしっかりと面取りし、器表面も撫でつけており他の甕と較べて質感が異なる。刻みは、端部正面からのV字状の刻みを基本としているが、形状は多様で斉一性に乏しい。81や82は口唇先端の軽く浅い刻み、83は木目が残る大きく深い刻み、84や93は細く鋭い刻みで、84は一周せず一部分のみ施される。95や96は刻みというよりもO字状の押捺に近く、95には布目の圧痕が認められる。101や102は、施文具の入り方が正面からではなく端部の下側から深く抉るような刻みであり、また、104～106も端面の下端のみを軽く刻んでおり、技法の点でやや趣を異にしている。頸部の篋描沈線文については、断面V字形のはっきりしたものが中心だが、88・96・107は先丸の棒状工具を引きずったかのような断面U字形を呈している。特殊なモチーフは唯一131のみで、山形文を組み合わせたモチーフとなるようである。器面調整は、

北白川追分町弥生時代遺跡の展開

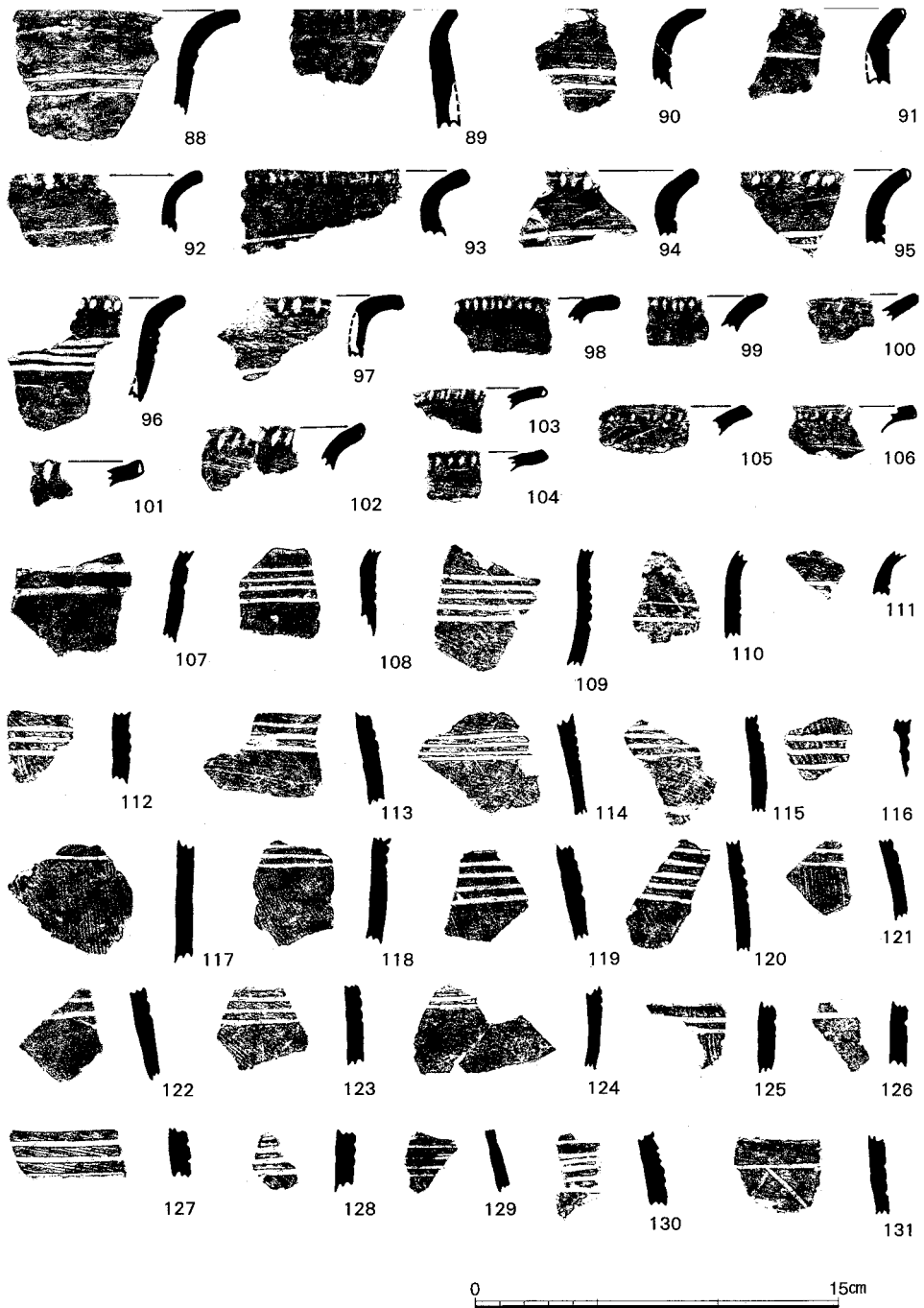


図58 BA30区出土弥生時代前期土器(4) 縮尺1/3

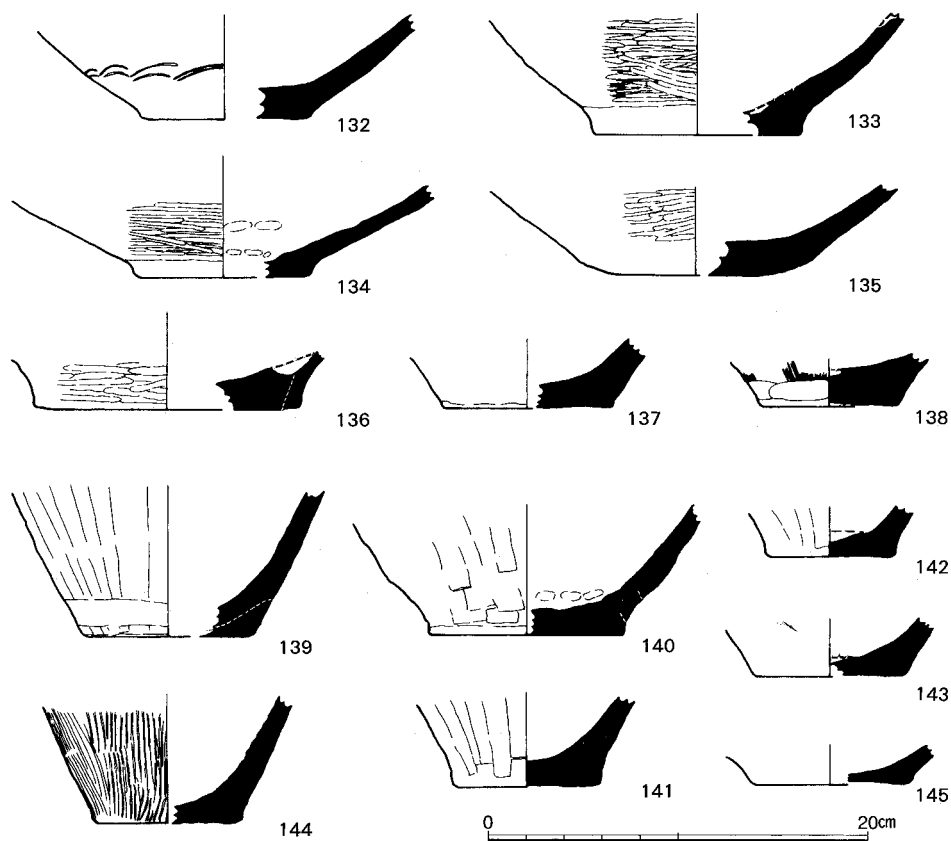


図59 BA30 区出土弥生時代前期土器(5) 縮尺1/4

ほとんどが、外面は7条/cm程度の縦位～斜位の刷毛目調整、口唇周辺から内面にかけてを撫でて仕上げるというこの時期の一般的なありかたを踏襲している。やや趣が異なるものとしては、82の浅い細密条痕風の調整、83の口縁内面に残る横位の刷毛目調整があり、また108のように内外面を丁寧に磨くのも、甕形土器として見た場合きわめて珍しい。

底部（132～145） 形態や器面の調整から、132～138が壺あるいは鉢、139～145が甕とみられる。132は黒色を呈し、篋描沈線2条により上向きの連弧状文様がめぐる。壺の場合外面は横位に篋磨きされているが、甕の場合底部末端まではっきり刷毛目調整がわかるのは144のみで、139～142のように板状工具による縦位の軽い擦過痕の方が目立つ。145はかなり磨滅しており、縄文土器の底部の可能性もある。ほとんどが破損しているので器壁の断面観察が容易であるけれども、成形技法復元の手がかりとなるような擬口縁を示す例は乏しく、この資料中にはいわゆる「側面積み上げ法」を示す例は確認できなかった⁽⁹⁾。

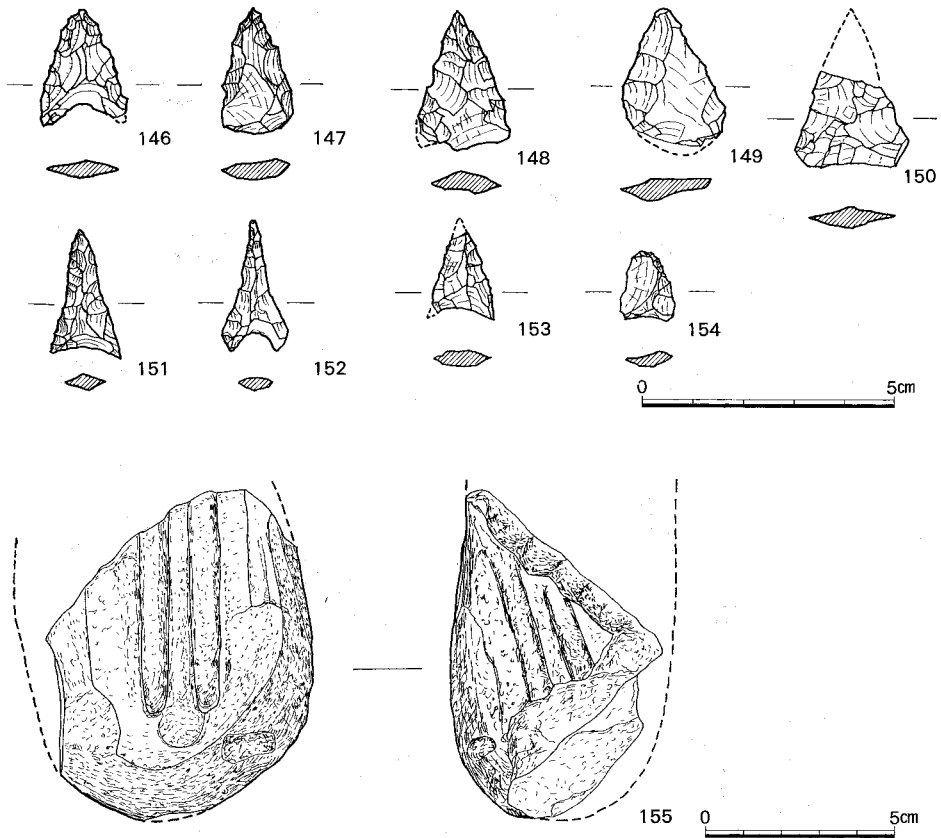


図60 BA30区出土石器 146～154縮尺2/3, 155縮尺1/2

ただ、138や141のように中央がドーナツ状に凹んでいる例が目につくことが注意され、底部の円盤部の製作段階を反映しているのかも知れない。

d. 石器 (146～155)

未製品・欠損品含めてサヌカイト製とみられる石鏃9点、約30点の剥片、砂岩製の砥石などが出土している。大半は、土器と同じく弥生前期に帰属するものと考えて良からう。砥石(155)はかなり欠損しているが、残存する2面にそれぞれ平行する2条の溝を残す。

(3) 出土弥生前期土器について

出土資料の主体をしめる弥生前期の土器について、ここで、その特徴や編年的位置づけなどを中心に若干の検討を加え、簡潔にまとめておきたい。

器種構成について 出土土器については、破片から判別した器種別点数と、それぞれの部位別装飾の内訳についても表5に示した。器種別点数については、特徴の把握しやす

表5 BA30 区出土土器（接合後）

〔種類別点数〕		〔弥生時代前期器種別点数〕		〔弥生時代前期底部点数〕	
縄文時代後期	19	壺・鉢	97	壺・鉢	21
縄文時代晩期	15	甕	97	甕	20
弥生時代前期	197	蓋	3	同定不可	2
無文胴部破片	1197	計	197	計	43
計	1428				

〔弥生時代前期土器部位別装飾・うち () は削出突帯をもつもの〕					
壺口縁部	端面無文	19	壺胴部	沈線 1 条	0
	〃 沈線	3		〃 1+a	4(1)
	〃 刻み	1		〃 2 条	2
	計	23		〃 2+a	6
壺頸部	沈線 1 条	1		〃 3 条	1
	〃 1+a	4(2)		〃 3+a	3
	〃 2 条	0		〃 4 条	2
	〃 2+a	4(3)		〃 4+a	4(2)
	〃 3 条	0		〃 5 条	3(3)
	〃 3+a	1		〃 5+a	0
	〃 4 条	2		〃 6 条	0
	〃 4+a	2(1)		〃 6+a	3
	〃 5 条	0		〃 7 条	0
	〃 5+a	0		〃 7+a	0
	〃 6 条	0		〃 8 条	2(1)
	〃 6+a	2		〃 8+a	1
	貼付突帯無刻	1		貼付突帯無刻	1
	〃 有刻	1		〃 有刻	3
	計	18(6)		計	35(7)

甕口縁部	端面無文	4	甕頸部	沈線 1 条	3
	〃 有刻	34		〃 1+a	8
	計	38		〃 2 条	4
				〃 2+a	10
				〃 3 条	3
				〃 3+a	7
				〃 4 条	7
				〃 4+a	7
				〃 5 条	2
				〃 5+a	2
				〃 6 条	1
				〃 6+a	1
			計	55	

い口縁部と底部，および頸部～胴部の有文破片からの同定点数のみであるが，構成をみるうえでは問題なかろう。口縁や底部のみでは区別が難しい壺と鉢はひとくくりになっているが，鉢の点数はそれほど多数になるとはみられないことから，おおむね壺と甕が半々か，わずかに甕が上回る程度の構成である，とみなして良い。これは，他の弥生前期遺跡の器種構成と傾向を同じくするものと言えよう。

また，資料中には，他地域からの搬入品あるいはそうした系譜につらなる土器と明確に認められるものは含まれてなかった。これまで京都大学構内から弥生前期土器が少量でも出土する場合，東海系の条痕文土器が含まれていることがまあり，それ以外でも，いわゆる生駒西麓産とよばれる胎土をもつものや瀬戸内系の甕の出土が知られる⁹⁰。本資料のようにある程度まとまった量がありながら搬入品や異系統土器が一点も含まれない場合の方が珍しいといえよう。生駒西麓産のものは前期でも比較的早い段階に，東海系の条痕文土器や瀬戸内系の甕は前期末葉に出現する頻度が高くなると考えた場合，本資料の時間的位置を反映した内容である，といえなくもないだろう。

装飾技法の特徴について 次に、口縁端部の装飾についてみてみよう、壺甕ともにこの時期のごく一般的なあり方に従っているといえよう。壺には沈線や刻みを施すものがわずかに存在するものの、肥厚あるいは拡張する傾向をみせるものは無い。甕は基本的に刻むものが中心で、無文のものがわずかにある。いずれも横撫ではそれほど発達していない。

頸部や胴部の装飾は、削出突帯と沈線が中心である。壺には貼付突帯もあるが、剥離痕のみ残るものを含めても、きわめて少数派である。削出突帯Ⅰ種は存在せず、窺描沈線と組合う削出突帯Ⅱ種多条のみであり、頸部・胴部の文様帯の四分の一を占めている。その造出技法としては、沈線文帯最上段ないし最下段の沈線文の片側（上側ないし下側）を、①板状工具で縦位方向に押さえて低める、②横位方向の磨きにより低める、のいずれかが観察される。本資料中の削出突帯に目立つのは①の技法で、頸部文様帯や胴部文様帯の上段側に採用されており、板状工具の木口圧痕や擦過痕が明瞭に観察できる（例えば、図版27-2参照）。これらがはっきりした器面上の段差を形成しているのに対して、②の技法は、胴部文様帯の下段側に採用されているが、段差はいずれも鈍く曖昧であり、なかにはほとんど段を成していないようなものもある。窺描沈線については、本来の条数を決めがたい資料が多いが、1条～8条までが認められ、おそらく10条を越えるようなものは無かったと想定される。壺甕ともに断面が深いV字状を呈するようにしっかりと施されているのが通例であり、浅く細い沈線が多条にめぐる70・72のようなものは例外的である。

このほか、装飾が目を引く資料として、33・80・131を挙げておく。うち、33のような沈線と竹管刺突文を組み合わせたモチーフ、131のような山形文のモチーフは、他遺跡出土資料にも散見されるので、少ないながらも前期土器の装飾のバラエティのひとつとして組成していたものといえる。80は、貼付突帯上に横に長いレンズ状の窪みを、押捺ではなく粘土を抉り取るにより造出している。唐古遺跡出土品に類似のものが知られるが¹⁰⁰、珍しいものだろう。やや無理して系譜的な関連を探るならば、本例とはやや趣を違えるものの、伊勢湾地方の土器である縄文晩期末の馬見塚式あるいは「亜流遠賀川式」と呼ばれる前期の土器は、レンズ状の押捺をもつ貼付突帯を特徴としている。

編年の位置づけ 以上に紹介してきた弥生前期の土器群は、壺甕ともに多条の沈線施文を特徴としており、既往の編年観での前期新段階に位置づけられる。そして、型式学的にみて格別に古く考えるべき個体もみられないことから、包含層出土ではあるものの、時間幅の短いまとまった一群とみなしたい。そうした前提に立ってさらに細かくみると、削出突帯Ⅰ種は見あたらず沈線が多条化してはいるけれども、同Ⅱ種は一定の比率を占め

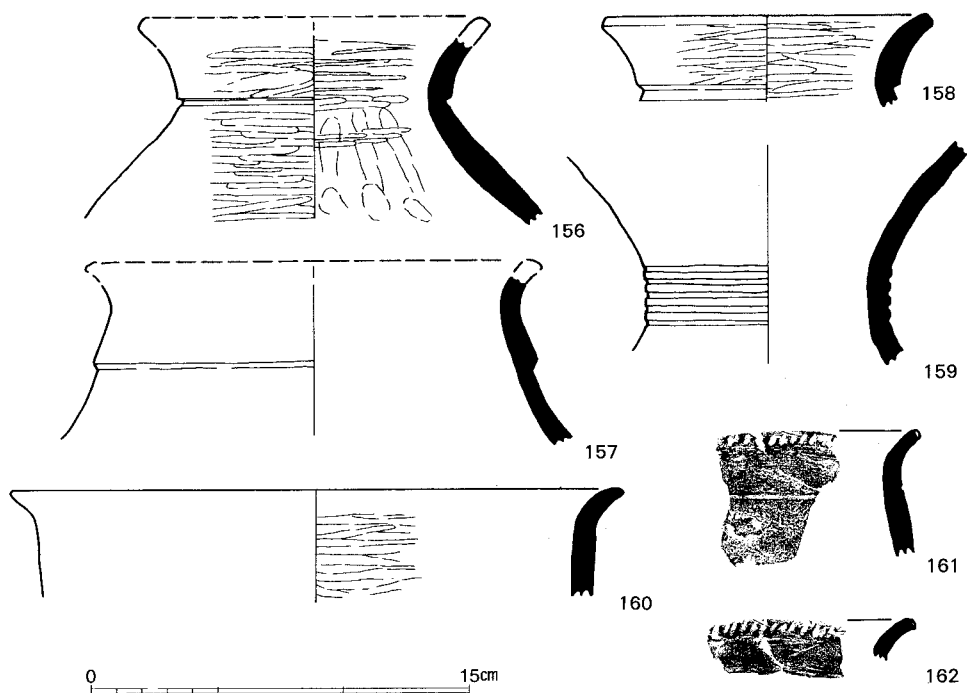


図61 BE32 区（12地点）出土土器（156・161・162），BE33 区（16・125地点）出土土器（157・159），BD33 区（180地点）出土土器（158・160） 縮尺1/3

て存在し、また貼付突帯は複数条で文様帯を成す例はみられない。そして、口縁端部などを加飾する傾向にも乏しい、という状況も考慮すると、これらを中段階的な特徴の残存ととらえて、新段階のなかでもやや古相の様相を示す資料として位置づけたい¹²⁾。

ところで、近畿地方の弥生土器編年の重要な課題のひとつとして、前期新段階の指標である多条化した篋描沈線文の土器と、第Ⅱ様式の櫛描文土器とが、どの程度時間的に重なっているのか、という問題がある。山城地域の場合、第Ⅱ様式のはじめまで多条沈線文が一部残る、という編年でおおむね落ちついているけれども¹³⁾、その場合でも、櫛描文出現後でそれと共存する段階の篋描沈線文の土器と、それ以前の段階のものとの型式学的な違いを厳密に特定することは、やはり重要な課題として残されるだろう。京都大学構内一帯で鍵層となる黄色砂層（本調査区での第1層）より下層からは櫛描文が一点も出土していない、という状況を考えたとき、ここに報告した資料群は、確実に櫛描文の出現前と認定できる段階の土器様相を知り得るものとしても、重要な意義をもつものだろう。

ここで、量的には多くないが構内遺跡の他地点の資料と比較してみよう（図61）。いず

表6 京都大学構内遺跡出土弥生土器の編年

	京都大学構内遺跡 地区名(地点番号)	要素	突帯文土器	段	削出突帯Ⅰ	削出突帯Ⅱ (少条)	沈 線 (少条)	貼付突帯 (少条)	貼付突帯 (多条)	『様式と編年』 (小呂社一九八九)	『雲宮遺跡』 (京都府一九九七)	『鶏冠井』 (高月市一九九七)
前期	(古) BE33区(125) BD33区(180)									山城Ⅰ-1	雲宮Ⅰ期	
	(中)									山城Ⅰ-2	雲宮Ⅱ期	
	AU30区(214)・SR1										雲宮Ⅲ期	鶏冠井Ⅰ期
	BA30区(6)										雲宮Ⅳ期	
	AO22区(220)									山城Ⅰ-3	雲宮Ⅴ期	鶏冠井2期
	BF30区(229) AR25区(238)											
黄色砂層												
櫛描文出現												
中期	Ⅱ BF30区(229)											
	BE29区(54)・方形周溝墓											
	Ⅲ AO22区(220)・SD19											
	Ⅳ AP22区(111)・SD18											

れも、黄色砂より下層の出土資料である。本部構内東南隅の AU30 区 (219地点) の流路 SR1 内黒褐色土層出土資料は、篋描沈線が3条までにとどまるもので、中段階のうちに収まるものとして明らかに今回の資料群に先行する段階である。これより形式的に遡る段階の資料は、未発達の間縁部下側を段状に区画する156～158が挙げられるが、刻目突帯文土器がまとまって出土する125・180地点などで微量混じって出土するにすぎない。一方、北部構内 BF30 区 (229地点) 暗褐色土層出土土器は、少量であるにもかかわらず、壺口縁端部の装飾や多条の貼付突帯、瀬戸内系甕の存在など、新相の特徴を顕著に示している。また、総合人間学部構内 AO22 区 (220地点) では、頸部に多条の篋描沈線文が収斂した壺が出土し、AR25 区 (238地点) でも同様な壺形土器を含むまとまった資料が得られている⁴⁴⁾。これらの資料中に削出突帯はほとんど含まれず、貼付突帯文は多条になり文様帯を成している。よっていずれの資料も、今回よりも後出の可能性が高いといえる。

以上、遺構にともなう資料ではないけれども、既往の型式学的な変遷観にのっとり地点別の資料の序列を求め表6にまとめた。結果として、追分地蔵地点の資料の位置づけについて、櫛描文の出現までにはもう一段階その後に介在するもの、という見通しを得ることになった。すなわち、削出突帯 (Ⅰ・Ⅱ種とも) がほぼ消えた段階がその後に続き、しか

るのち櫛描文の出現をみる、という変遷が想定されるのである。

この2段階の変遷を、山城地域で近年相次いで該期のまとまった資料が報告された長岡京市雲宮・向日市鶏冠井の両遺跡での区分に対応させると、雲宮遺跡でのⅣ期とⅤ期に、鶏冠井遺跡の2期にあてはめることができる⁶⁸。また、最近の大和地域の編年案でみればⅡ1a様式とⅡ1b様式の様相に⁶⁹、摂津地域では高槻市芥川遺跡の前期土器群の様相と相似していると思われる⁷⁰。遺跡や地域によっては、ここで想定した最後の段階が安定して分離できていなかったり、あるいは櫛描文出現後の段階として評価されているのが実態とみられるが、京都大学構内遺跡一帯では、黄色砂は目下のところ櫛描文の出現前後を隔てる鍵層として有効に活用できる。今後は、ひきつづき下層出土の資料でどこまで型式学的に下り得る様相が確認できるのか継続して追究するとともに、他地域における櫛描文出現前後の資料と比較検討することで、土器編年上の議論のみならず櫛描文出現の時間的ずれの同定や地域色の抽出へと向かうことを課題としたい。

3 弥生時代前期の北白川追分町遺跡

比叡山西南麓の先史時代の諸遺跡に限らず、追分町遺跡の内部においても地点によって主体となる出土土器型式が異なることが、これまでの成果の蓄積によってわかりつつある。ここでは、こうした地点別の土器型式の違いやその量的な多寡を、さしあたりその地での人間の諸活動の時期や活発さを反映するものと単純に理解して、弥生時代前期を中心とした追分町遺跡内部の動態を明らかにし、またその意味するところを考えたい。

遺跡の範囲と地形環境 最初に、想定される遺跡の範囲や当時の地形環境を確かめておこう。あらためて図51を参照されたい。現在までの知見による限り、遺跡は、おおむねここに示された京都大学北部構内南半と本部構内北辺部分を含んだ空間で、東西にはしる南北2つの尾根状の微高地を中心に展開していると想定される。北側の微高地は、13地点から180地点といった一帯が該当し、この北縁の斜面から低地にかけての様子が56・135・229地点で明らかとなっている。また、逆に東方の221地点までいくと、微高地上でありながら先史時代遺物の出土は稀少で、周辺的な様相になる。一方、南側の微高地は、今回紹介した6地点、その南のA地点で西端を示す斜面が検出されている。A地点の西半や208地点では起伏の乏しい低地の状況を呈していたが、遺物の出土量は減り、遺跡の中心である微高地上に対してはやはり周辺的な様相を示している。

これら南北の微高地の中間にあたる109・217地点では、弥生前期末に比定される巨礫を

交えた土石流の本流にあたっており、良好な包含層が見つからない。本来的にこの中間地帯は谷状の地形であった可能性が高く、南北の微高地を隔てていたものと想定される。

なお従来、本部構内北東辺には、今出川通り付近が白川系の流路に隔てられていて、追分町遺跡とは別の縄文・弥生時代遺跡が存在すると想定されてきた。71地点試掘坑での包含層の確認がその根拠となってきたものである。しかし、A地点での良好な包含層の確認から、遺跡は本部構内にまで及んでいることがほぼ確実となった。あえて別の遺跡を想定せずに、追分町遺跡の南限が71地点あたりにまで及んでいる、と考える方が自然だろう。

活動中心地点の変遷 今回紹介した追分地蔵地点（6地点）と京都市埋蔵文化財研究所調査のA地点での成果から、弥生時代前期後葉に至ってこれらの地点の位置する南微高地一帯で遺物出土量が激増することがわかり、該期にそこでの活動が活発化したことは明瞭である。ただしA地点では、滋賀里Ⅲb式の土器棺をはじめ、長原式までの縄文晩期後葉の各型式も一定量出土している。とはいえ、ともに出土している遠賀川式土器の出土量を凌駕するには遠く及ばない。また、こうした遠賀川式土器の出土が、検出された微高地から低地に移行する斜面付近一帯を中心としつつひろく全域に及んでいるのに対して、縄文後期・晩期の土器は、微高地上を中心とするように狭く限定される傾向にある。追分地蔵地点でこうした時期の土器が稀少であるのは、この主たる分布域をはずれた斜面にあたっていたからだろう。

遺跡内の他の地点での遠賀川式土器の出土状況をみると、さきに図61-156～158に挙げたような、未発達の間縁下に段状の装飾をもつ古い様相を示すものが、それぞれ12・125・180地点で出土している。いずれも北微高地上にあたり、小規模な谷を含むものの標高の高い一帯である。また、出土する土器は、滋賀里Ⅲb式から長原式までの縄文晩期後葉が中心であり、多量のそれらに混じってこうした古相を呈する遠賀川式土器の破片がわずかにともなうにすぎない状況である。低地への変換点にあたる56・229地点でも遠賀川式土器は出土しているが、やはり多量の晩期後葉の土器群に混じって微量が出土するにすぎず、しかも、ここではいずれも明らかに新相を呈するものである。ともあれ、古相新相のいずれにしろ北微高地での遠賀川式土器の出土は、きわめて少量にすぎないのである。

以上の様相をまとめると、縄文晩期後葉以降、弥生時代前期前半までは北微高地が中心で、南微高地は周辺的な位置にあり、かつその範囲も局所限定的な傾向がみられたのが、前期後半にいたってその関係が逆転し、南微高地一帯がひろく活動の中心地となったもの、となろう。突帯文土器最終末の長原式と遠賀川式土器の古段階とが並存していたと考えよ

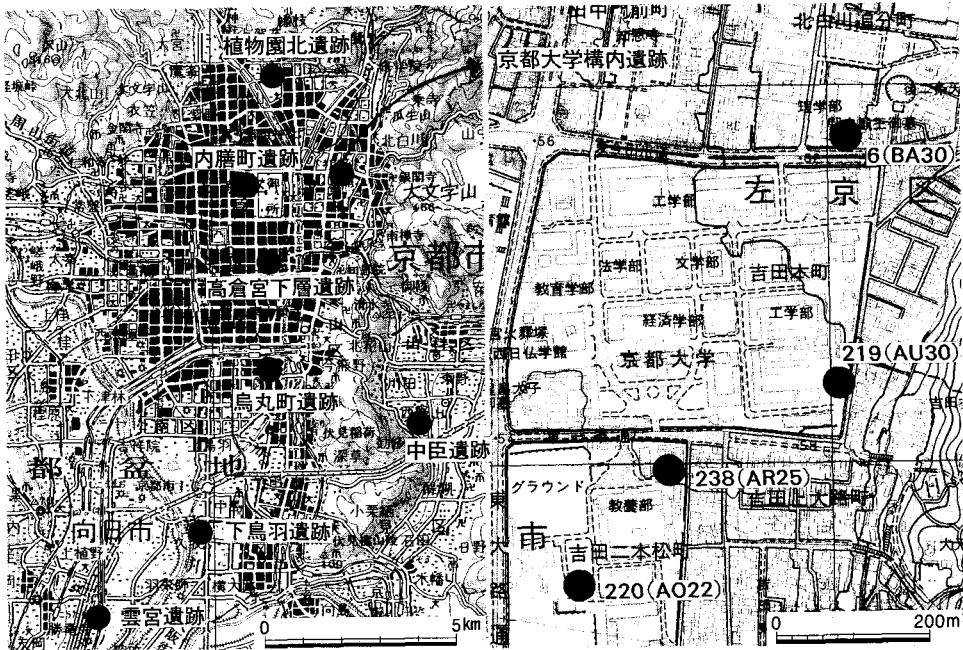


図62 弥生時代前期の主要遺跡（左：京都盆地1/20万，右：京都大学構内1/1万）

うが、時間的に前後関係をもって存在するものと考えようが、この図式に変化はない。ただ後者の理解に立つ場合は、遠賀川式古段階の土器量が極端に少なくなる点に不自然さを見ないものであるが。

変遷の背景 上述したような、弥生前期後半における北微高地から南微高地への活動中心地の変遷が大勢として間違いないものとして、その理由や背景を考えてみたい。

ひとつには、自然的な要因、すなわち弥生前期には流路の埋積が進んで、谷の利用価値がなくなってしまったから、という理由が想定できよう。しかし、南微高地の方にそれに代わる谷が多いわけではなく、むしろ北微高地の方が扇央に近くて谷の数が多いといえ、かつどちらの微高地も同様に埋積が進んでいたのであるから、これだけが根本的な原因とするのは説得力が弱かるう。もうひとつは、社会的要因ともいうべきもので、水稻農耕の定着にともなう集団間・集団内諸関係の変化により、南微高地へと移動集結する必要があったから、という理由である。総合人間学部構内 AO22 区で見つかった水田遺構の存在から、比叡山西南麓においては、弥生時代前期後葉には確実に水稻耕作を生業とする社会が定着していたとしてよい。しかし追分町遺跡の範囲内では、目下のところ水田遺構はおろか、それに相応しい土壌も検出できていない。総合人間学部構内のような、東方に吉田山

を控えた安定した後背湿地が確保できる状況にはないのである。

そこで、京都大学構内一帯全体を視野に入れたとき、総合人間学部構内が水田耕作を行う生産領域であるとする、本部構内から北部構内にかけての高地は、居住のための空間であると同時に、生産領域への治水給水の管理にとっても重要な位置を占めていることに気づく。そして実際、前期後半に至ると、総合人間学部構内220地点（AO22区）の水田から、その北東に接する微高地上の238地点（AR25区）、吉田山西麓の219地点（AU30区）、そしてこの追分町遺跡南半へと、おおむね100～200mの間隔で接して遺物の集中出土地点が分布するようになる（図62右）。これは、長原式までの各時期に見られた狭い空間の点的な分布とは明らかに様相を違えており、生産領域とその維持管理を重視した線的な立地が採用されるに至ったもの、と理解したい。つまりこの前期後半において、それまでの資源獲得型の立地戦略から、資源管理型のそれへと転換が果たされたもの、とみられるのであり、追分町遺跡における北微高地から南微高地への活動中心地の移動は、近隣他地点の動向と連動した立地戦略転換の一環であった、と考えられるのである。

京都盆地における動向 このように、弥生時代前期後半における追分町遺跡内部での活動地点の動きは、水系による結びつきが想定される近接地点の動向とも密接に関係づけられることを示唆したが、京都盆地全体のなかでの遺跡の動向とどのように関連づけられるのかも、気になるところである。縄文晩期末から弥生前期の遺物が良好な状態で出土している遺跡は、京都大学構内遺跡のほかには図62左に示すごとくであり、烏丸町遺跡については突帯文土器の出土以外に状況がはっきりしていないが、さしあたり該期の良好な遺跡になると仮定すると、おおむね鴨川水系沿いに、3～4 km程度の間隔をもって分布がみられる点が注目されよう。水稻農耕導入期における遺跡間のネットワークの存在、あるいは集団の基本的な領域の広さにかかわるような、きわめて示唆的な結果といえる。

4 おわりに——まとめと課題——

本稿では、これまで内容の全体が明らかでなかった追分地蔵地点（BA30区・6地点）の出土資料の紹介を行い、それらが弥生前期後葉を中心とするものであることを確認した。そして、他地点の調査成果も加味して、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての北白川追分町遺跡の内部での動向をさぐり、前期後葉における北微高地から南微高地への活動中心地の移動と、それが資源獲得型の立地から水稻農耕社会の資源管理型のそれへの転換を反映したものである、と推察した。

お わ り に

いずれも、あくまで限られた調査成果からの憶測にすぎないけれども、今後調査を進めていく上で問題意識となるよう、検証すべき課題として述べてみたものである。居住にかかわる遺構の発見に乏しいため、遺跡内のそれぞれの空間が果たしていた役割についてははっきり特定できていない。今後の遺構発見を待つとともに、自然科学的な手法も含めて、空間の機能を明らかにする方法を追究していく必要が感じられる。また、黄色砂埋積後で地形環境が大きく変わってしまった弥生中期以降の状況についても詳しく触れ得なかった。方形周溝墓が2箇所で見つかったことを除くと、得られている成果はきわめて断片的であるといえるが、成果の蓄積を待って検討を加えたい。

また、縄文時代から弥生時代への移行に際して、京都大学構内遺跡で認めたような立地戦略の転換とも言うべき変化が、他の遺跡や遺跡群でも認められるような普遍的なあり方なのか、あるいは局地的で特異なあり方のひとつであるのか、条件に適した遺跡や遺跡群を選んで、比較検討していく必要がある。近隣では、例えば山科区中臣遺跡は、京都大学構内遺跡と同様に、縄文中期以降弥生時代を通じて一定の範囲内に連綿と活動が続けられていることがわかっており、調査件数も多い。今後有力な比較対照の資料を提供してくれるものと期待される。

いずれにしろ、縄文時代から弥生時代を通じて活動の地となっている北白川追分町遺跡、あるいはそれを含んだ京都大学構内遺跡一帯は、弥生前期末の洪水層に覆われて当時の地形が残されるという条件も手伝って、縄文から弥生へのさまざまな変革が想定される時期に、ひとつの空間内でどのようにひとびとが活動し、それが変遷していったのかを見続ける定点観測には格好の場といえるだろう。今後も、こうした視点に立った調査研究を進めていきたいと考えている。

成稿にあたり、京都大学埋蔵文化財研究センターの諸氏に貴重な助言と協力を数多く得た。また、追分地蔵地点の調査成果の使用については、山口県埋蔵文化財研究センターの中村徹也氏に快諾いただき、今出川通り内の調査については、京都市埋蔵文化財研究所の高橋潔・長戸満男・竜子正彦の各氏に御教示いただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げる。

〔注〕

(1)これに先行するものとして、遺跡発見の端緒となった濱田耕作氏らによる1923年の縄文時代遺物の採集と、その後の試掘調査がある。

梅原末治「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告』第5冊、1923

島田貞彦「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号、1924

(2)石田志朗・中村徹也・中村友博『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』、1972

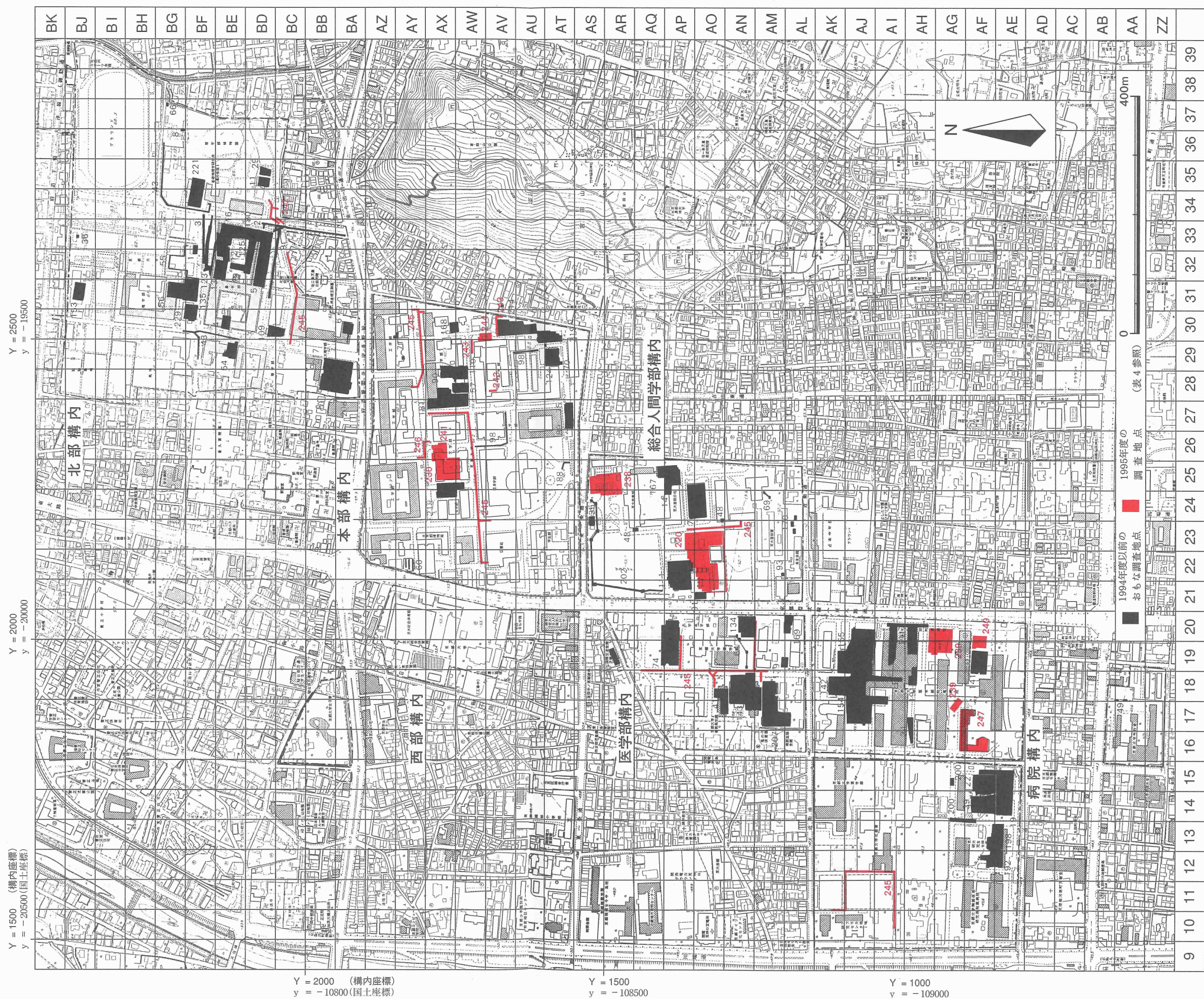
北白川追分町弥生時代遺跡の展開

- (3)帝塚山考古学研究所『弥生前期地域論』, 1984, p.45
伊藤淳史「北白川の弥生土器」『先史時代の北白川』(京都大学文学部博物館図録第4冊), 1991
- (4)長戸満男・竜子正彦・尾藤徳行「京都大学構内遺跡」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』, 1997
なお図51中のB地点も京都市埋蔵文化財研究所による調査である。
竜子正彦「京都大学北部構内遺跡」『平成8年度京都市内遺跡立合調査概報』, 1997
- (5)伊藤淳史「京都盆地の弥生時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財研究センター紀要X I』(『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』所収), 1995
- (6)このほかにも, 昭和4(1929)年の今出川通りの市電敷設工事に際しても同様な石仏類が多数出土したとされ, また208地点の調査でも表土掘削中に石仏が出土している。石仏の由緒等の伝承については下記を参照した。
京都市立北白川小学校『北白川こども風土記』, 1959, pp.75-6
北白川小学校創立百周年記念委員会『北白川百年の変遷』, 1974, pp.74-9
- (7)この経緯については下記を参照した。
京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊——京大農学部遺跡BG36区——』, 1978, pp.2-4
- (8)この追分地蔵地点の層位的状況については, かつて泉拓良氏が言及した際には, 旧白川の浸食による崖面と理解された。しかし, 最下層に礫層が堆積していることや, その後の他地点での調査成果を加味して, 高野川系流路による浸食が及んだとみる方がより妥当と考えた。
泉拓良「京都大学北部構内の地形復原——縄文時代から弥生時代——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』, 1978
- (9)深澤芳樹「土器のかたち——畿内第I様式古・中段階について——」『財東大阪市文化財協会 紀要』I, 1985
- (10)いわゆる生駒西麓産胎土の前期土器はAU30区(219地点)で(93年度年報I 1), 瀬戸内系甕はBF30区(229地点)で(94年度年報II 392)報告されている。後者はA地点出土品にも含まれていることを確認している。
- (11)末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第十六冊), 1943, 図版第42-15
- (12)弥生時代前期の既往の編年観および削出突帯I種・II種などについては下記に従った。
佐原真「山城における弥生文化の成立——畿内第I様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』第50巻第5号, 1967
- (13)國下多美樹「山城地域の中期弥生土器編年——搬入土器と地域色を中心に——」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』, 1993
- (14)総合人間学部構内AO22区(220地点)の成果については, 1995年度年報に略述しているが, 資料の全容は刊行準備中の発掘調査報告書に依られたい。AR25区(238地点)については1996年度年報にて報告予定である。
- (15)財京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書 第22冊 雲宮遺跡』, 1997, pp.92-144
財向日市埋蔵文化財センター『向日市埋蔵文化財調査報告書 第45集 鶏冠井遺跡』, 1998, pp.237-58
- (16)藤田三郎「大和第II様式の土器」『みずほ』第25号
- (17)高槻市教育委員会『芥川遺跡発掘調査報告書——縄文・弥生集落跡の調査——』, 1995, pp.137-54

京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度

図 版

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割りと調査地点
- 2～10 京都大学総合人間学部構内 AO22 区の発掘調査
- 11～22 京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査
- 23～27 北白川追分町弥生時代遺跡の展開



1 近世遺構



2 古代・中世遺構



3 弥生前期遺構
調査区全景（北東から）





1 水田域全景(1) (北東から)



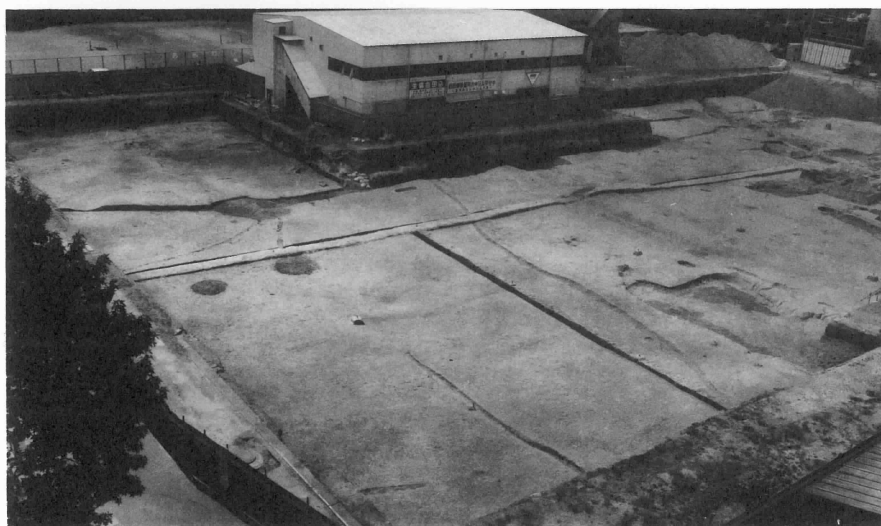
2 水田域全景(2) (北から)



3 水田域細部 (北から)



4 中央微高地上の農耕具痕 (東から)



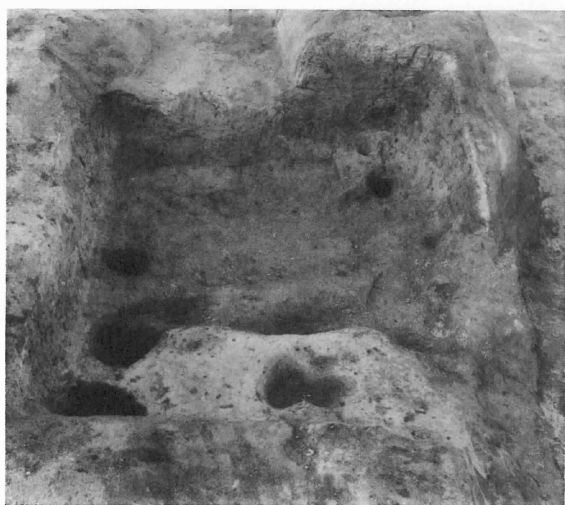
5 完掘後全景 (黄褐色土上面, 北東から)



1 鑄造遺構S X 1 ~ S X 4 (西から)



2 S X 1 上層遺構 (西から)



3 S X 1 完掘 (南から)



4 S X 2 完掘 (南から)



5 S X 3 完掘 (南から)



6 S X 4 完掘 (南から)



1 調査区西半古代・中世遺構完掘全景
(西から)



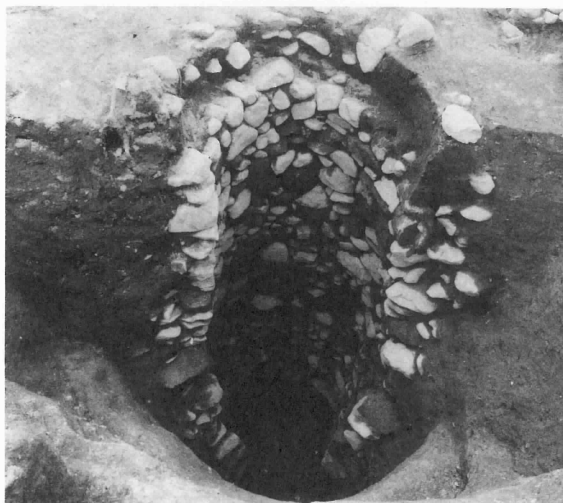
2 井戸S E30 (南から)



3 井戸S E29 (南から)



4 井戸S E19 (南から)



5 井戸S E20 (北から)



6 井戸S E31 (北から)



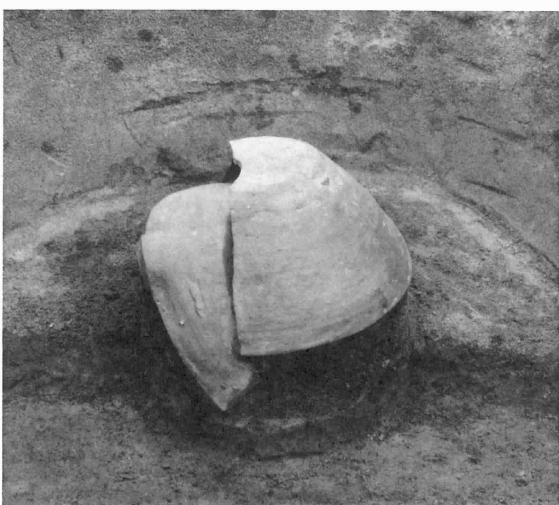
1 土器溜 S K 1 (北から)



2 土器溜 S K 17-2 下層 (西から)



3 土器溜・集石 S K 78 (井戸 S E 27 上面)
(北から)



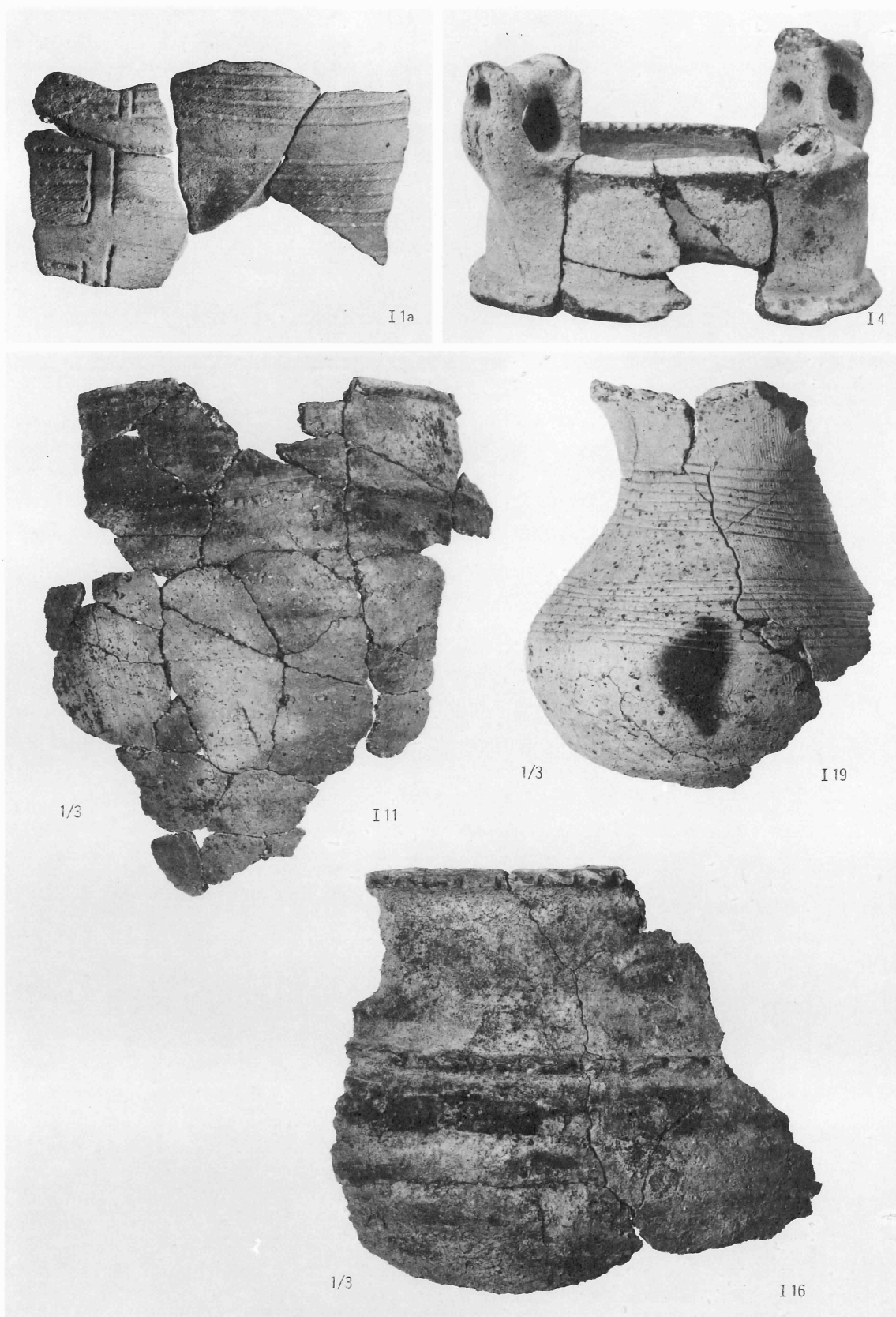
4 埋納遺構 S K 15 (東から)



5 配石 S K 13 (北から)



6 配石 S K 80 (北から)



黄褐色土出土遺物 (I 1a・I 4 繩文後期土器), 黒灰色土出土遺物 (I 11・I 16 繩文晚期土器, I 19 弥生前期土器)



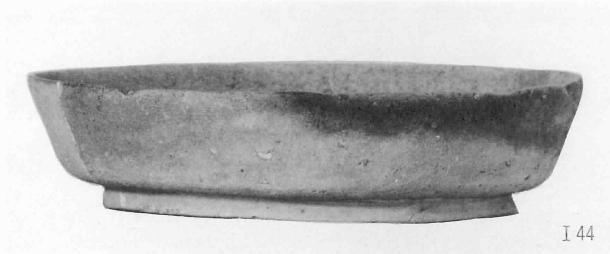
1/3

I 31



1/3

I 32



I 44



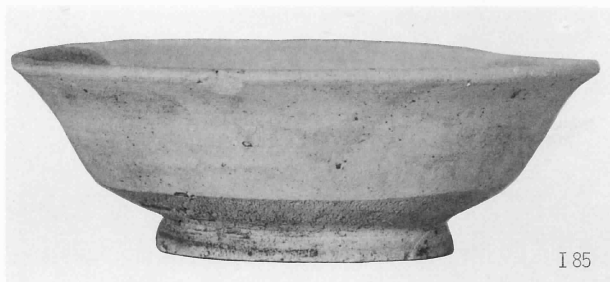
I 43



I 49



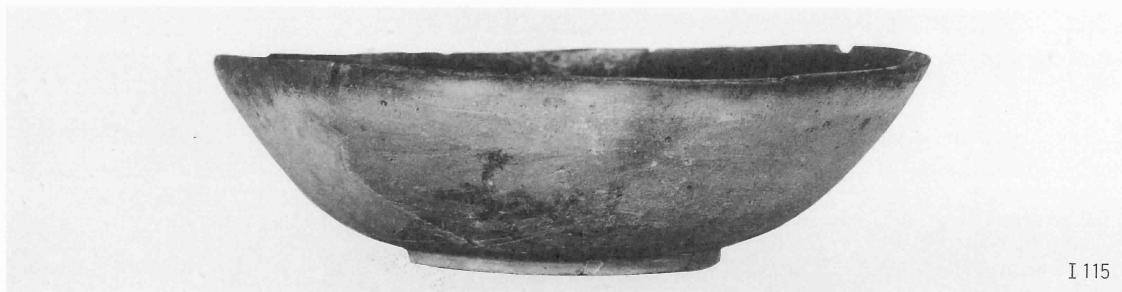
I 80



I 85



I 113



I 115

S D 19出土遺物 (I 31・I 32弥生中期土器), 黒褐色土出土遺物 (I 43・I 44須恵器), S E 29出土遺物 (I 49・I 80土師器, I 85白色土器), S X 3出土遺物 (I 113須恵器), S X 1出土遺物 (I 115黒色土器)



S K 1 出土遺物 (I 117・I 121・I 129・I 155土師器), S K17—2 出土遺物 (I 206・I 224土師器, I 231須恵器), S K15出土遺物 (I 237備前)

I 242

I 322

I 250

I 268

I 367

I 392

I 313

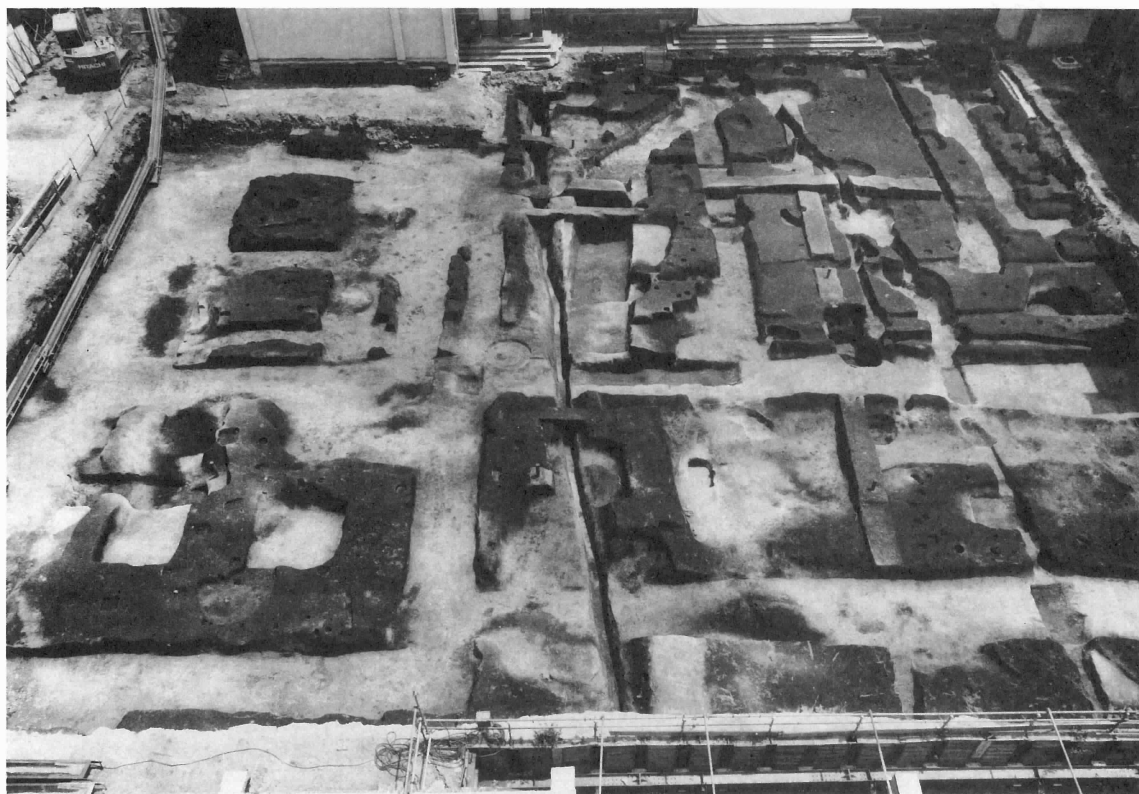
I 317

I 311

I 395

I 397

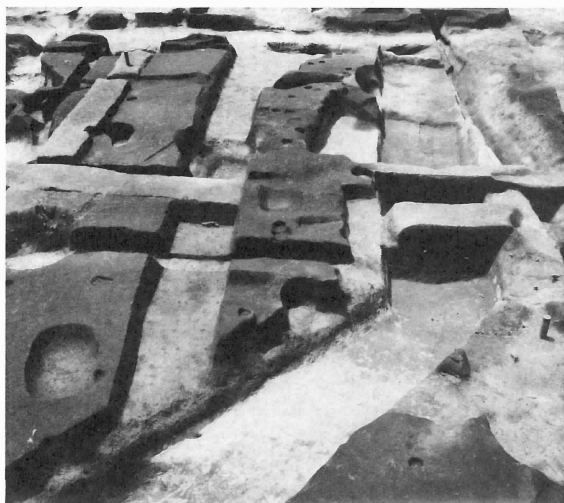
S K 78出土遺物 (I 242・I 250・I 268土師器, I 311・I 313灰釉系陶器, I 317瓦器),
S E 24出土遺物 (I 322・I 367・I 392土師器, I 395灰釉系陶器, I 397瓦器)



1 西調査区全景（西から）



2 東調査区全景（北から）



1 中世の溝群（東から）



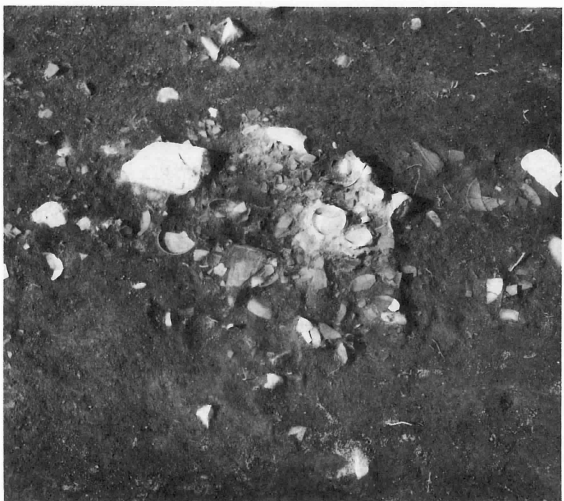
2 倒木跡（北から）



3 S D 2 遺物出土状況（北から）



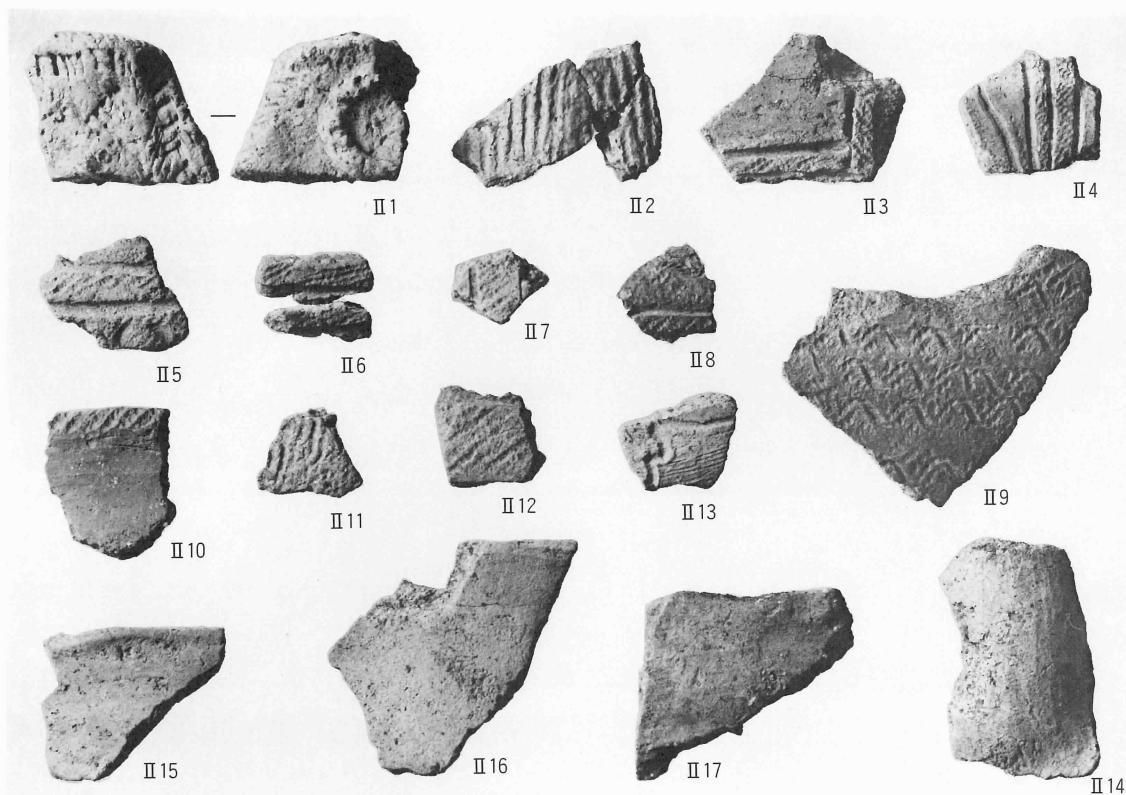
4 S D 4 遺物出土状況（西から）



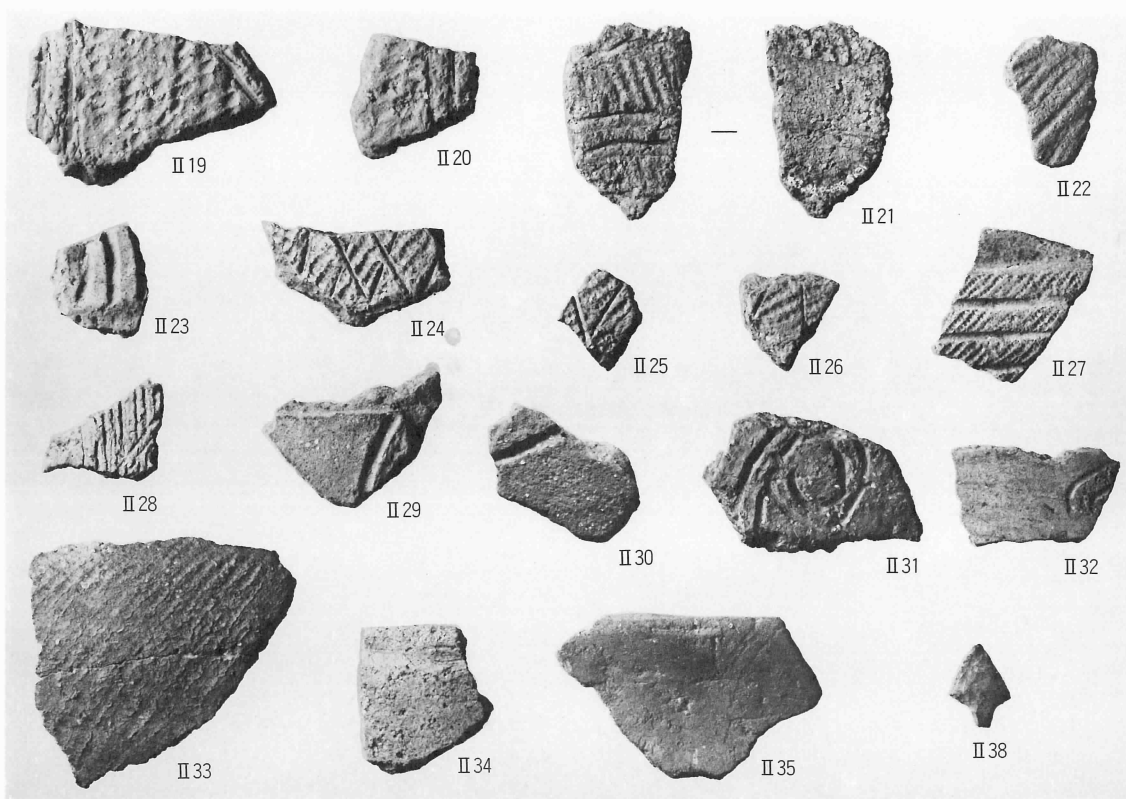
5 S X 5 遺物出土状況（南から）



6 S X 7 遺物出土状況（東から）



1 暗褐色土出土縄文土器 (II 1 ~ II 17)



2 上層遺構出土の縄文土器と石器 (II 19 ~ II 35縄文土器, II 38石鏃)



Ⅱ39



Ⅱ40



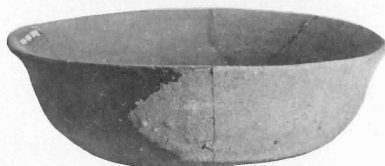
Ⅱ41



Ⅱ43



Ⅱ42



Ⅱ44



Ⅱ47



Ⅱ55



Ⅱ45

古墳時代・古代の遺物（Ⅱ39～Ⅱ45須恵器，Ⅱ47灰釉陶器，Ⅱ55緑釉円塔）



II59



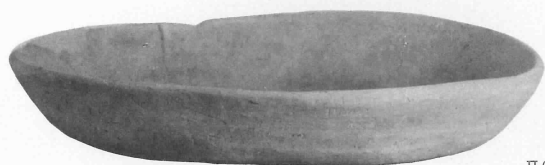
II64



II60



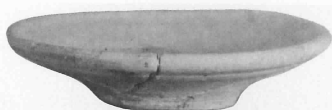
II63



II66



II71



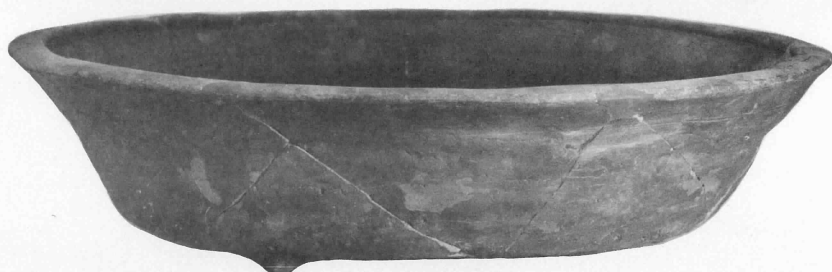
II138



II142



II146



II147

SD 3 出土遺物 (II59・II60・II63・II64・II66土師器, II71青磁),
SD 4 出土遺物 (II138・II142・II146土師器, II147瓦器)



II 107



II 118



II 117

S D 7 出土遺物 (II107土師器, II118褐釉陶器, II117黄釉陶器)



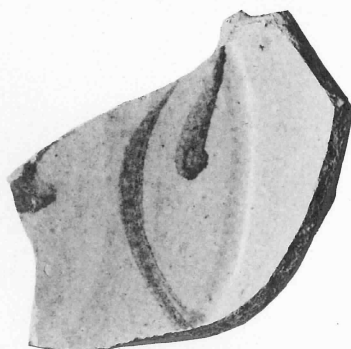
Ⅱ150



Ⅱ154



Ⅱ157



Ⅱ163



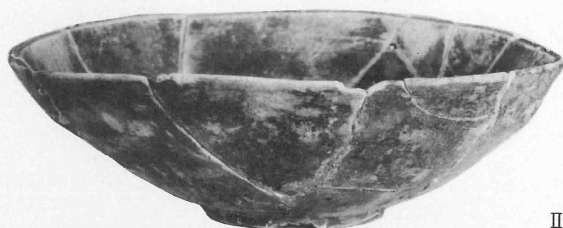
Ⅱ165



Ⅱ172



Ⅱ166



Ⅱ175



Ⅱ170



Ⅱ176



Ⅱ171



Ⅱ177

S D 5 出土遺物 (Ⅱ150・Ⅱ154・Ⅱ157土師器, Ⅱ163黄釉陶器, Ⅱ165・Ⅱ166・Ⅱ170～Ⅱ172・Ⅱ175～Ⅱ177瓦器)



II 178



II 181



II 182



II 184



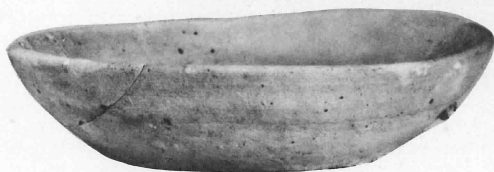
II 185



II 189



II 190



II 205



II 194



II 195



II 196



II 197



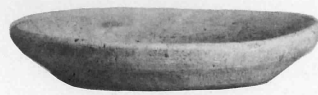
II 198



II 200



II 202



II 206



S D 6 出土遺物(1) (II 178・II 181・II 182・II 184・II 185・II 189・II 190・II 194~II 198・II 200・II 202・II 205・II 206土師器)

II 211



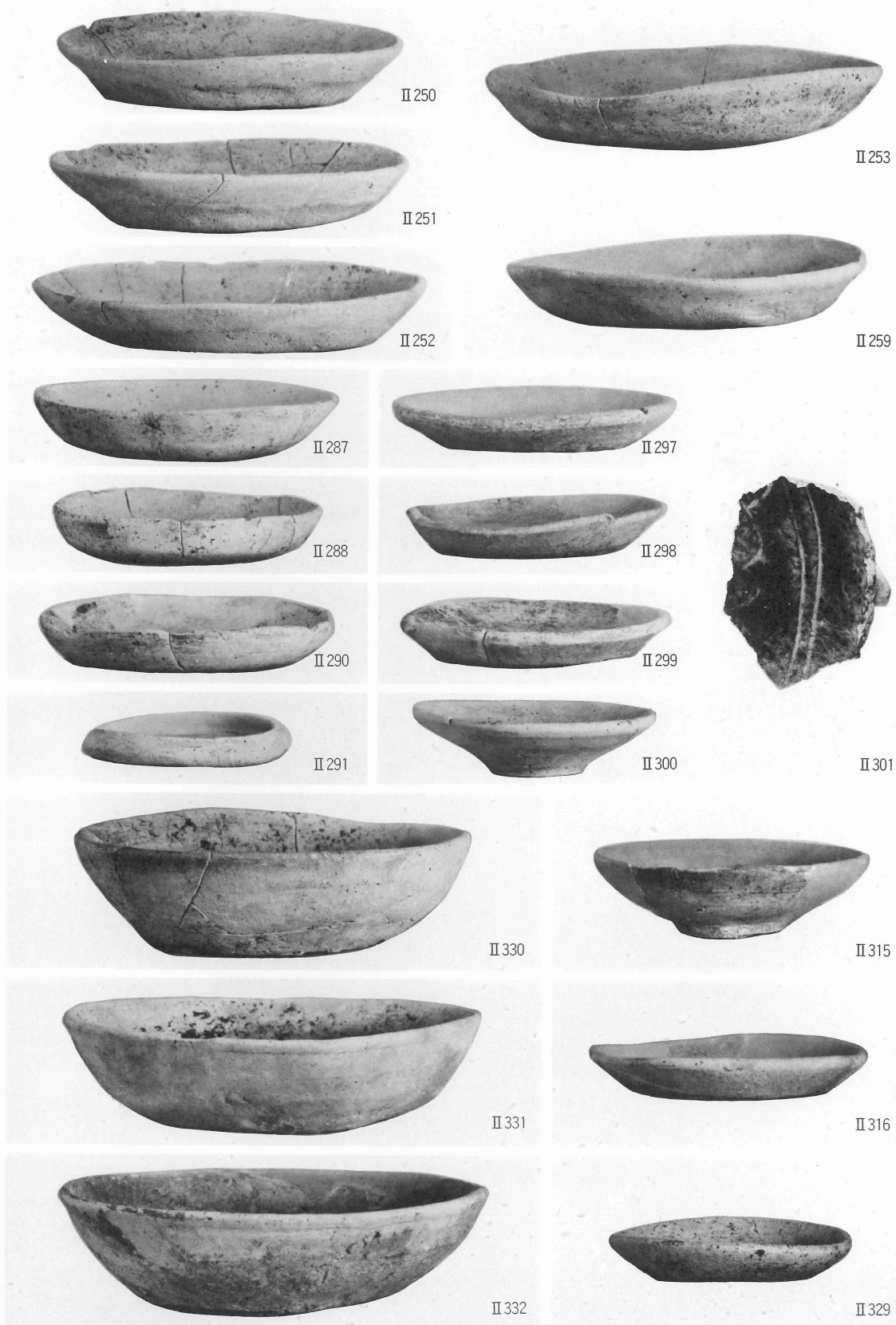
II 212



II 209



S D 6 出土遺物(2) (II 209・II 211・II 212瓦器)



S X 2 出土遺物 (II 250～II 253・II 259土師器), S X 5 出土遺物 (II 287・II 288・II 290・II 291・II 297～II 300土師器, II 301緑釉陶器), S X 6 出土遺物 (II 315・II 316土師器), S X 7 出土遺物 (II 329～II 332土師器)



II 342



II 343



II 344



II 345



II 346



II 358



II 354



II 349



II 348



II 352

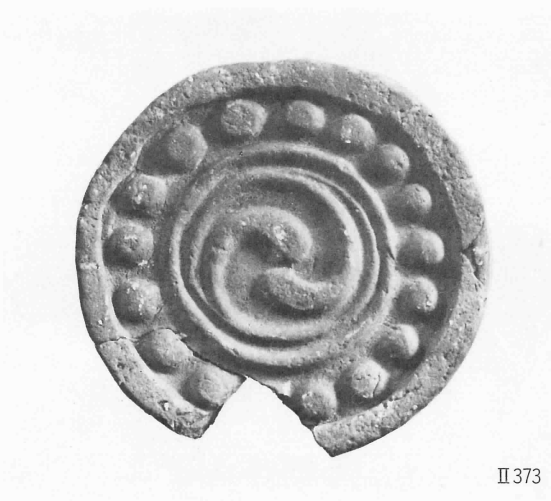
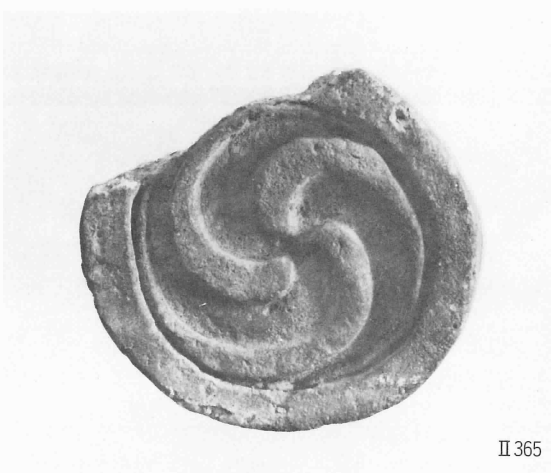


II 348



II 352

軒平瓦 (II 342~II 346・II 348・II 349・II 352・II 354・II 358)



1 軒丸瓦 (II 359・II 361・II 362・II 365・II 368・II 373)



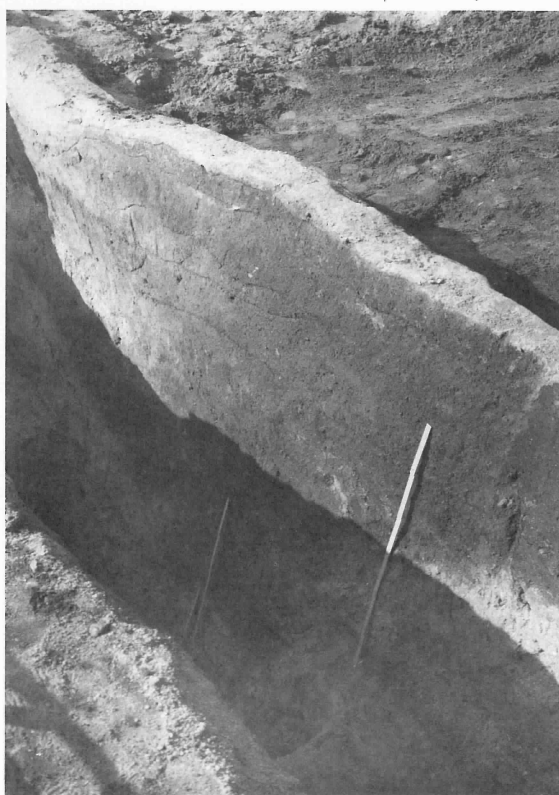
2 京都大学構内出土の緑釉円塔 (a～c 医学部構内出土)



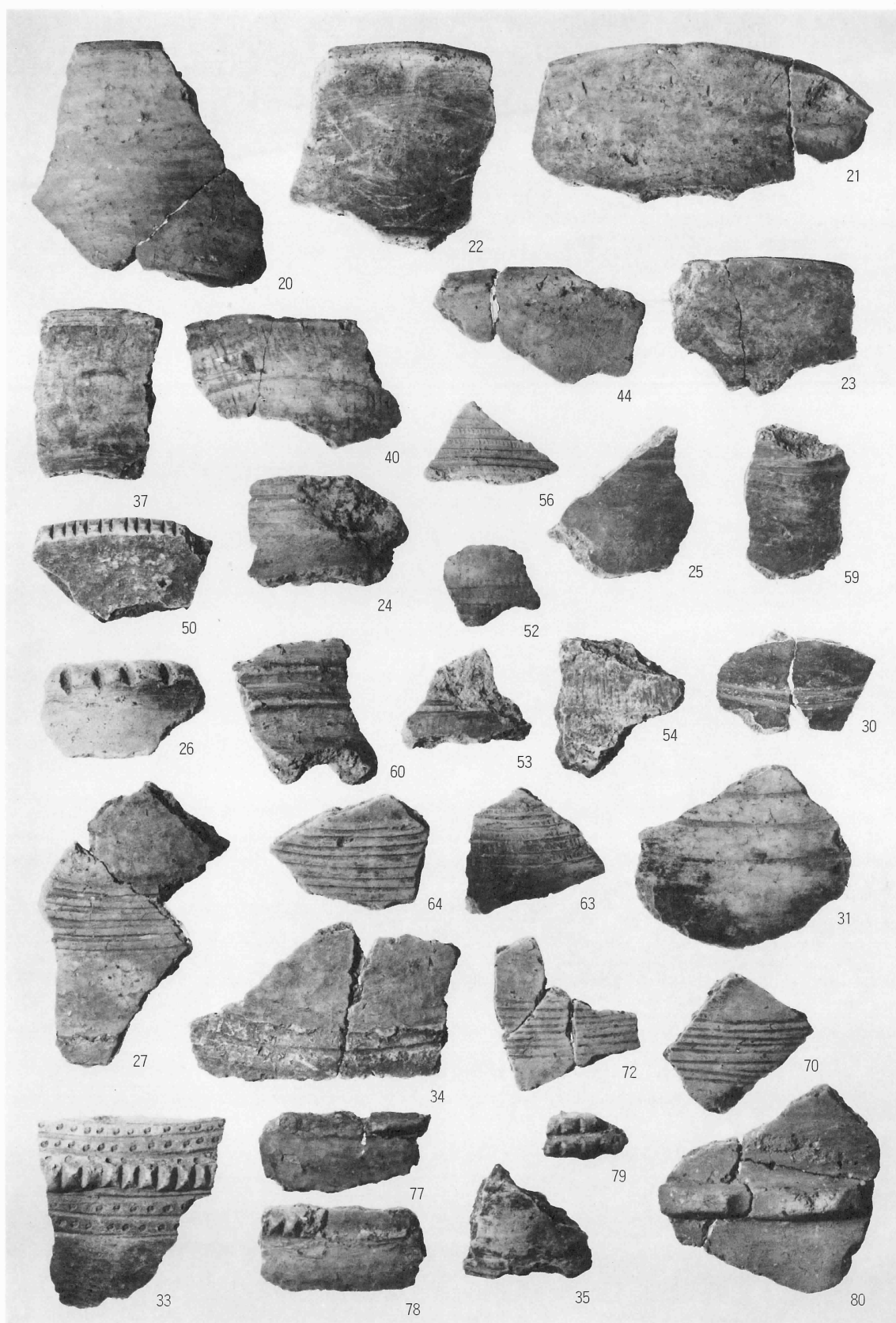
1 調査区全景（先史時代遺物包含層掘り下げ後，西から）



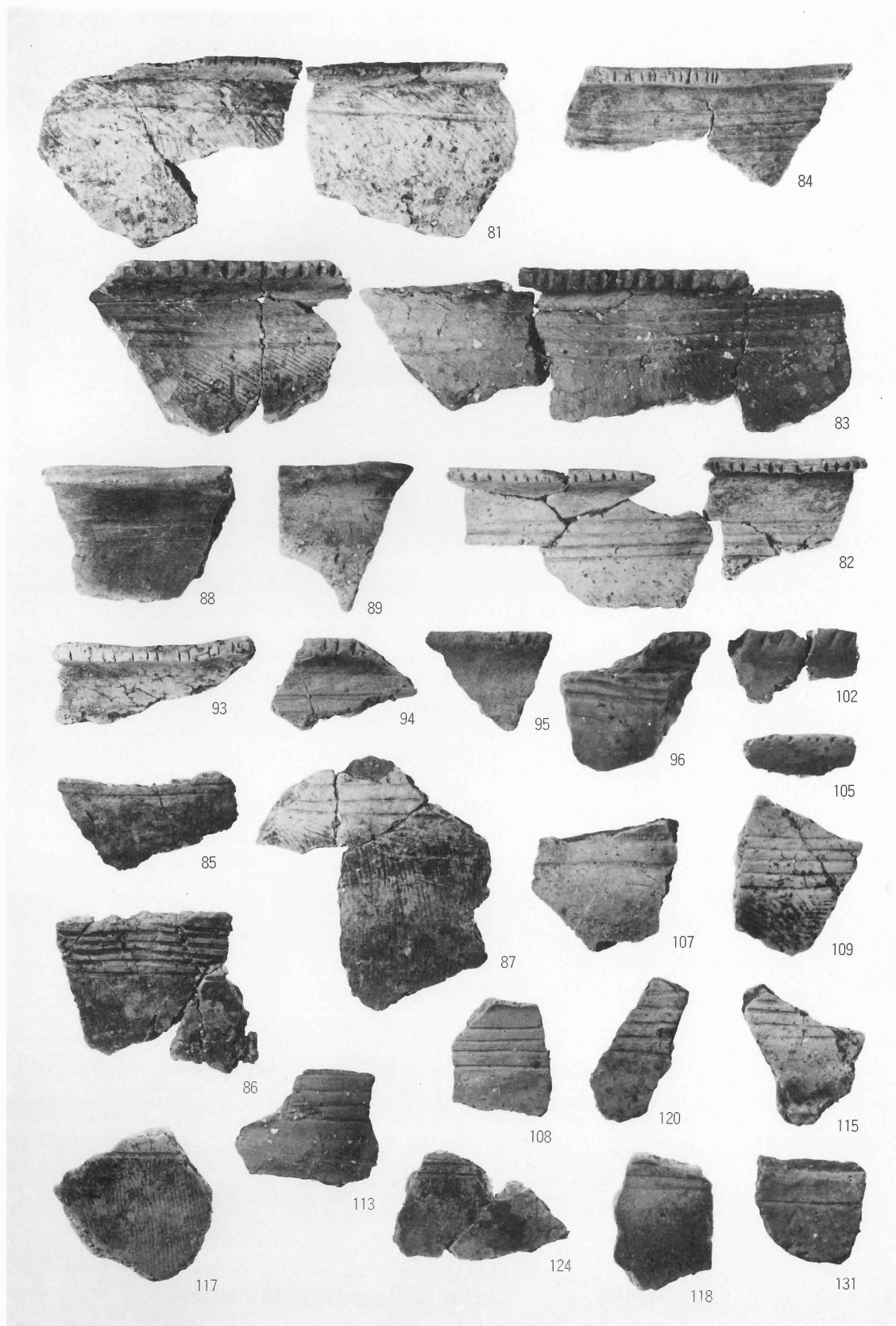
2 調査風景（北から）



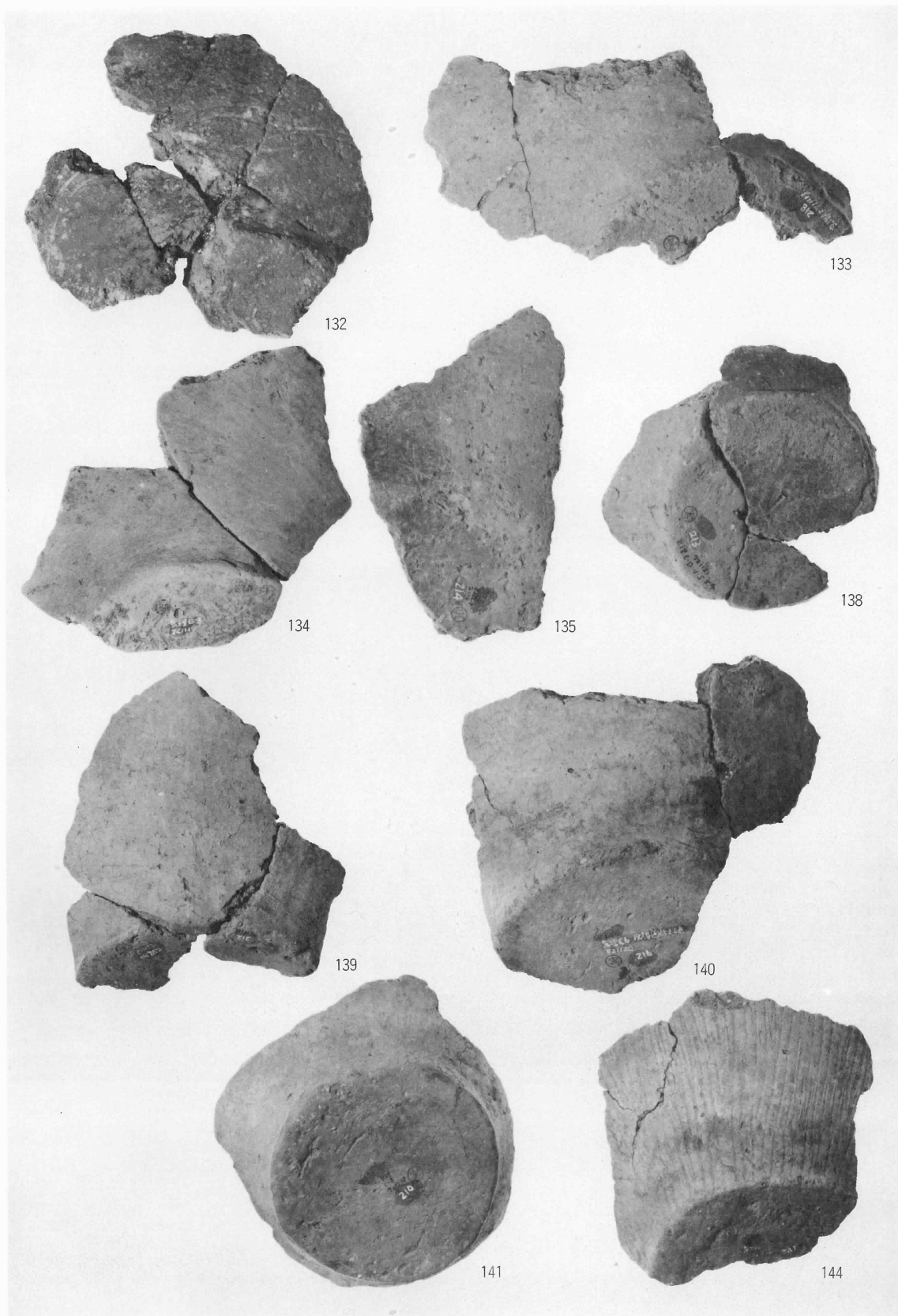
3 東西畔南壁の層位（南から）



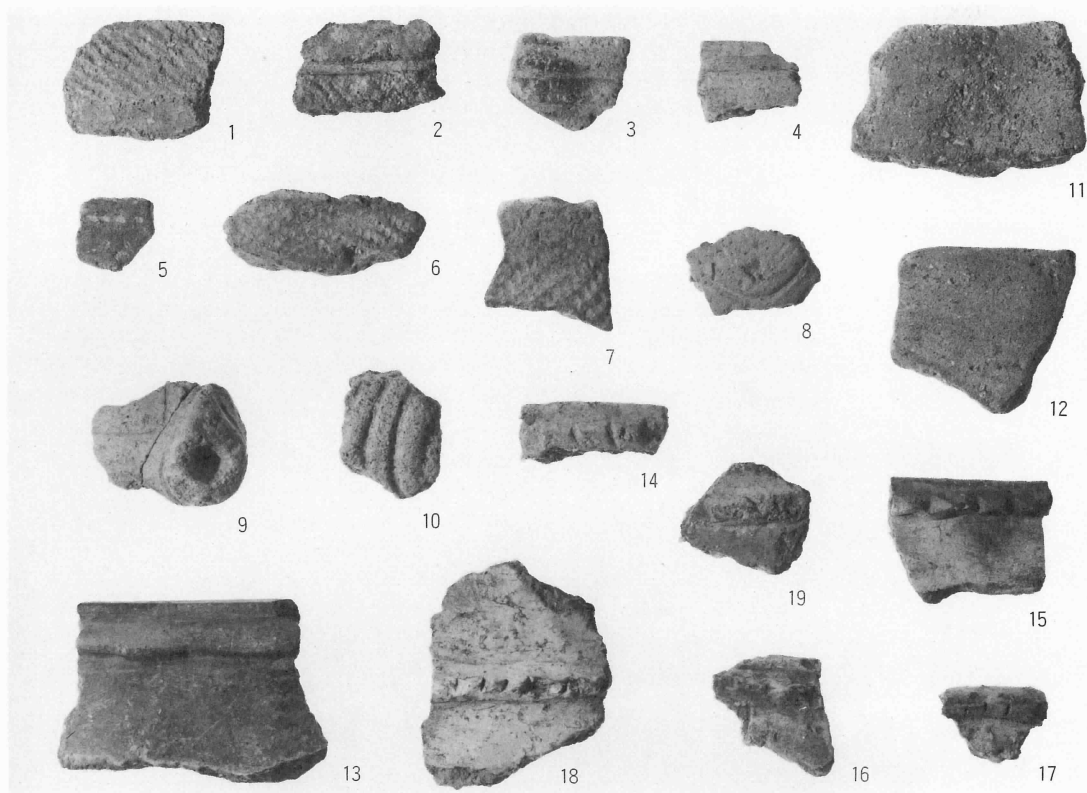
弥生時代前期の土器(1) (壺形土器, ただし35は壺用蓋形土器)



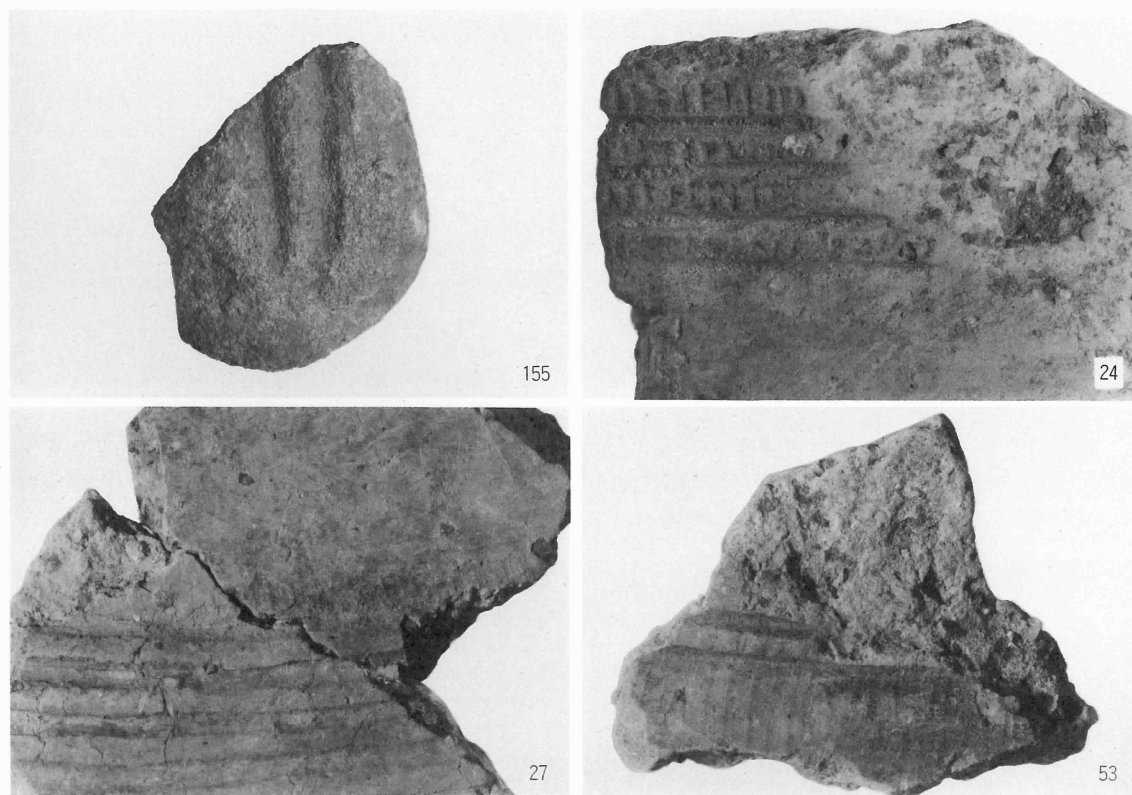
弥生時代前期の土器(2) (甕形土器)



弥生時代前期の土器(3) (底部)



1 縄文時代後期・晩期の土器



2 石器 (155), 削出突帯の細部 (24・27・53)

1999年3月31日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報

1995年度

編集 京都大学埋蔵文化財研究センター
発行 京都市左京区吉田本町

本文印刷 (株)石田大成社
製本

図版印刷 有限会社 真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル